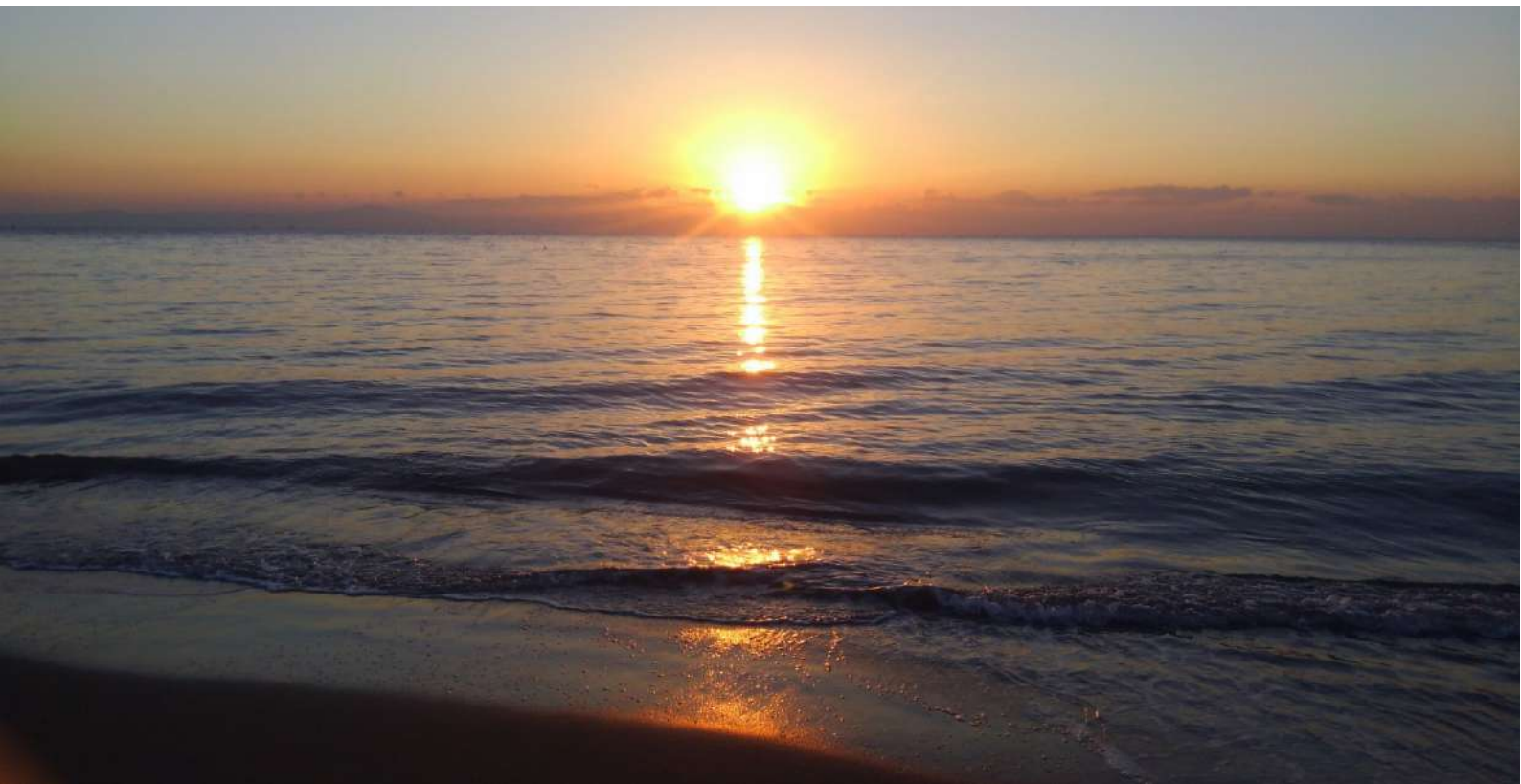




①【講演会】

私たちはいかにして分断を超えられるのか ～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える

基調講演「人間の顔をした財政を取りもどす～『頼り合える社会』をめざして～」

井手 英策（慶應義塾大学経済学部教授）

パネルディスカッション「分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ」

報告① 名里 晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）

報告② 三浦 知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

②【勉強会】

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

報告① 馬場 拓也（社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事）

報告② 早川 仁美（地域のお茶の間研究所さろんどて代表）

③【シンポジウム】

かながわから「頼り合える社会」をつくるために

問題提起「『経済』の視点から見た地域社会～自己責任社会を超えて～」

井手 英策（慶應義塾大学経済学部教授）

報告「地域の共感を創り出すために～子育て支援の場から広がる当事者意識～」

原 美紀（NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぷ施設長）

2017 年度

21 世紀かながわ円卓会議

全 3 回シリーズ

① 【講演会】 6/17 (土)

私たちはいかにして分断を超えられるのか～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える

② 【勉強会】 7/30 (日)

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

③ 【シンポジウム】 11/11 (土)

かながわから「頼り合える社会」をつくるために

はじめに

「21 世紀かながわ円卓会議」は、経済のボーダーレス化や地球規模で進む文化変容など、20 世紀末からのグローバル化に伴う諸課題について、各界の実務者や地方自治体の首長・職員、研究者、ジャーナリスト等が集まって討論し、その解決の道筋を学術研究交流の拠点である湘南国際村から発信する当財団の基幹事業として、2000 年度にスタートしました。その後、2 年ごとにテーマを設定して回数を重ねる中で、グローバル化の影の部分である、地域文化の画一化やコミュニティの崩壊が急速に進んでいる現状を踏まえ、テーマの焦点を「コミュニティのあり方」に移してきました。

このような経緯を踏まえて、第 7 次となる 2016・17 年度の 2 カ年については、そのトータルテーマを「神奈川のコミュニティとグローバル化」と設定して取り組んできました。特に 2017 年度は神奈川県内で活動している実務家、研究者などの参加を得て、県内の現状を踏まえながら、対話型プログラムを通して、多様な参加者同士が意見を交換しネットワークを蓄積することを目指して、3 回にわたるシリーズで開催しました。具体的には、格差と分断をどのように乗り越えるか、より深く議論することを目的として、シリーズの第 1 回は講演会とパネルディスカッションを、第 2 回は事例をもとに勉強会を、第 3 回目は前 2 回の議論を踏まえたシンポジウムを開催しました。

①6 月に実施した講演会とパネルディスカッションでは、基調講演として慶應義塾大学の井手英策さんに現在の日本が自己責任社会となっていること、それによって多くの人たちが転落の不安を抱えている状況を踏まえて、「頼り合える社会」を目指した社会保障の重要性についてお話いただきました。そしてそれを広めるために必要となる「私たち」という共感の領域をいかに広げていくのか、県内における障害者福祉（社会福祉法人訪問の家の名里晴美さん）、多文化共生（社会福祉法人青丘社の三浦知人さん）の取り組みも踏まえて議論しました。

②7 月に実施した勉強会では、講演会で出された問題提起を深めていくために、コミュニティの視点から私たち一人ひとりができることは何か、地域に開いた高齢者福祉（社会福祉法人愛川舜寿会ミノウホームの馬場拓也さん）、地域資源を活用した多世代の集う居場所づくり（地域のお茶の間研究所さろんどの早川仁美さん）の取り組みを参考にしながら意見交換をしました。

③11 月に開催したシリーズを締めくくるシンポジウムでは、講演会の基調講演にて井手英策さんが提唱された「頼り合える社会」をいかに実現していくのか、そのために求められる共感の領域をいかに広げていくのか、多様なボランティアの人たちに支えられた子育て支援の活動（NPO 法人ビーのビーの原美紀さん）の事例も参照しながら、県内で活動するさまざまな分野の実務家の方との議論を展開しました。

この報告書は、以上の 3 回シリーズ各回の講演の内容を集録したものです。各回にご登壇いただいた講師の皆さまに深く感謝いたしますとともに、今後のコミュニティづくりに向けて、ご関心のある皆さまのご参考となれば幸いです。

また開催にあたりましては、多くの団体から共催、協力あるいは後援をいただきました。具体的には共催団体として、神奈川県、一般社団法人インクルージョンネットかながわ、NPO 法人ココロまち、NPO 法人外国人すまいサポートセンター、NPO 法人びーのびーの皆さまにお世話になりました。また協力団体として、神奈川県立保健福祉大学（地域貢献研究センター）、NPO 法人まちづくり情報センターかながわ、七里が丘こども若者支援研究所、そして後援団体として、社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会、公益社団法人神奈川県社会福祉士会、公益社団法人かながわ福祉サービス振興会、一般社団法人神奈川県介護支援専門員協会、神奈川新聞社、神奈川県弁護士会の皆さまにご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

そして円卓会議シリーズ全体の構成、企画立案にあたりましては、運営委員の方々に大変お世話になりました。ここに記して心から感謝申し上げます。

【21 世紀かながわ円卓会議運営委員会】（五十音順）

- ・小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長）
- ・樺山 紘一（印刷博物館館長／東京大学名誉教授）
- ・黒田 玲子（東京理科大学研究推進機構総合研究院教授／東京大学名誉教授）
- ・高島 肇久（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長）
- ・林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹）

2018 年 3 月

公益財団法人かながわ国際交流財団

はじめに 2

2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議 全 3 回シリーズ概要 5

①【講演会】 6/17 (土) @横浜市技能文化会館 (関内) 9

私たちはいかにして分断を超えられるのか～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える

- ・開会挨拶 高橋 忠生 (公益財団法人かながわ国際交流財団理事長) 10
- ・基調講演「人間の顔をした財政を取りもどす～『頼り合える社会』をめざして～」
井手 英策 (慶應義塾大学経済学部教授) 11
- ・パネルディスカッション「分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ」
司会／林 義亮 (神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹)
- パネリスト報告① 名里 晴美 (社会福祉法人訪問の家 理事長) 37
- パネリスト報告② 三浦 知人 (社会福祉法人青丘社 事務局長) 43
- 質疑応答 49
- ・閉会挨拶 高島 肇久 (株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長) 58

②【勉強会】 7/30 (日) @横浜情報文化センター (日本大通り) 59

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

- 司会／小川泰子 (社会福祉法人いきいき福祉会理事長)
- ・報告① 馬場 拓也 (社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事) 61
- ・報告② 早川 仁美 (地域のお茶の間研究所さろんどて代表) 69
- ・グループディスカッション 77

③【シンポジウム】 11/11 (土) @湘南国際村センター (葉山町) 81

かながわから『頼り合える社会』をつくるために

- ・開会挨拶 樺山 紘一 (印刷博物館館長／東京大学名誉教授) 82
- ・問題提起「『経済』の視点から見た地域社会～自己責任社会を超えて～」
井手 英策 (慶應義塾大学経済学部教授) 83
- ・報告「地域の共感を創り出すために～子育て支援の場から広がる当事者意識～」
原 美紀 (NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぷ施設長) 99
- ・2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議 / 討議者・運営委員プロフィール 115
- ・21 世紀かながわ円卓会議これまでのトータルテーマとプログラム 121

①【講演会】

私たちはいかにして分断を超えられるのか～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える

◆基調講演／人間の顔をした財政を取りもどす～「頼り合える社会」をめざして～◆

当日は、財政社会学がご専門の井手英策さんの基調講演から始まりました。

まず今の社会について、中間層の没落による転落の不安を抱える人たちが、さらなる弱者を傷つける異常な社会となっており、また、現役世代は何もかもが自己責任となっている社会であるとデータを示しながら指摘。

このような自己責任社会が破たんしているからこそ、私たちは不安になっているとして、小田原ジャンパー問題や相模原事件についても触れ、弱者が弱者を叩き、留飲を下げる社会となっていること、そこには、承認欲求が満たされない個人がいて、だからこそ「等しく取りあつかう」という視点が大切になっていると分析。

そして、そこから脱し、個人の尊厳を保障してだれもが堂々と生きられる「頼り合える社会」、「国民みんなが受益者になる社会」とするために、まず「税とは負担軽減である」という発想の大転換が必要となることを、データを示しながら提唱。さらに、OECD などのデータにもとづいて（現金ではなくサービスによる）現物給付を増やすことで、格差は縮小する→結果的に 1 人あたり GDP 成長率アップ（成長を下支え）→結果的に財政を再建することになると論理展開された。

このように「奪い合い・自己責任」から「分かち合い・満たし合い」へ転換することで、私たち一人ひとりの人生にあるいくつかの負担急増期に「頼り合える」社会をつくることを提唱されました。



◆パネルディスカッション／分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ◆

続いてのパネルディスカッションでは、県内で活動されている 2 つの団体にご報告していただきました。井手さんの『財政から読みとく日本社会―君たちの未来のために』（岩波ジュニア新書・2017 年発行）でも次のように書かれています（212 ページより）。

~~~~~

人間の顔と顔が見えやすい社会で痛みと喜びをわかちあい、おたがいが共感しあう領域をつくっていくのです・・・地域社会のなかに共感の領域をつくりだし、その延長線上へと「私たち」の領域を押しひろげていくことが大切です。国の税金を使って困っている人たちをささえるやさしさは、身近な社会での共感の先にあると思いませんか。

~~~~~

そこで、2 つの団体には、地域社会の多様な人たちの共感や協力を得ながら、その活動を展開してきた経緯などについて話していただきました。

社会福祉法人「訪問の家」理事長の名里（なり）晴美さんは、横浜市栄区で地域との交流を続ける、重度心身障害者の通所施設「朋（とも）」での取り組みを紹介。30 年前の法人開設当初には、障害者施設をつくることに対して地域の反対もあったけれども、それを乗り越え、今では、近隣の小学校とは年間を通して子どもたちとの交流があり、また地域の人たちとの運動会や成人を祝う餅つきなどで、長年、交流しているとのこと。

また空き缶回収で民家をまわる活動をしている中で、それと併せて防犯パトロールもするようになったこと（そして、そのことを通して、この地域の人たちは障害者が自分の家に訪ねてきてもすんなりと受け入れてくれる人たちだと感じたこと）などのエピソードもお話していただきました。

社会福祉法人「青丘社」事務局長の三浦知人さんは、川崎市川崎区で差別のないまちづくりの取り組みについて紹介。40 年以上前から民族差別に向き合い、コリアンへの差別と排除に対する闘いから始まり、そしてコリアン



ン以外の外国人への支援、日本人も含めた障害者や高齢者の施設の運営など徐々に活動の分野も広がっていきながら、助け合いの地域活動、共に生きる活動の担い手を育てる取り組みを紹介。

またヘイトデモとの闘いについては、市民を守るべき政治家や公人が差別を正面から否定しない社会の現状を憂い、そうした中では、国や自治体を動かしていくには地域から訴えていくことの重要性も訴えていました。

この勉強会は、6月の講演会で出されたさまざまな問題提起を深めていく場としつつ、第3回となる11月のシンポジウムにつなげていく、という位置づけとなっています。6月講演会のパネルディスカッション後半ではさまざまなトピックが出されました（①講演会「パネルディスカッション／質疑応答」参照）

- ・県内で次々と起こっている問題 / 自分の中にある差別 / 支え合う仕事を担う人材の育成
- ・みんなが幸せになったらいいよねという想い / 人はそれぞれ人格がある
- ・「俺たちが守るぞ」というたくさんの人たちの想い / 人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさ
- ・正義が複数存在している / 彼らを包み込んでいくためには何が必要か
- ・なぜみんなが同じように苦しみを感じるのか / 思想と現場（という車の両輪）で会話を積み重ねる
- ・この社会を生きる人々の寛容さの問題 / 寛容さを育む基礎としての生活の保障 などなど

◆講演／分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち◆

7月の勉強会には二人の講師をお招きしました。

- ・社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム（愛川町）常務理事の馬場拓也さん
- ・地域のお茶の間研究所さろんて（茅ヶ崎市）の早川仁美さん



馬場さんからは、入所者さんと日常的な地域とのつながりを育みながら介護をすることや、場を作って対話を通し、支援する側と介護される側という境界を超えた文化を育てることの大切さについてのお話がありました。施設の壁を壊すという、いわばパフォーマンスもそのことの延長線にあり、それを一つのきっかけにして地域のさまざまな人たちとの日常的な交流も盛んになっています。

早川さんからは、“地域のお茶の間”として高齢者の人たちの居場所を始めたところから、赤ちゃん連れのお母さんたちも来るようになったことや、子どもや若者の居場所として子ども食堂を始めたことなどで、そこに来る人たちがそれぞれつながり自己肯定感、あるいは支援ではなく共に生きる仲間としての姿勢を持つことの大切さを感じたというお話がありました。また地域にいるさまざまな専門家がつながる場ともなっています。



◆グループディスカッション／分断を超えるために◆

講師お二人のお話を受けて、討議者としてお呼びした方々からもご意見をいただきました。討議者は次の5人の方々です。



- ・社会福祉法人訪問の家理事長の名里晴美さん
- ・社会福祉法人青丘社事務局長の三浦知人さん
- ・NPO 法人外国人すまいサポートセンター理事長の裴安（ぺい・あん）さん
- ・NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっふ施設長の原美紀さん
- ・株式会社あおいけ代表取締役／NPO 法人ココロまち代表の加藤忠相さん

名里さん、三浦さんは6月講演会のパネリストを務めていただき、裴さん、原さん、加藤さんはこれまでの円卓会議で講師や討議者としてご参加もいただいています。参加者の方々も入ったグループディスカッションも含めて、討議者の方々からもさまざまなご意見を出していただき、多様な角度から議論を深めていくことができました。そして、次のようなキーワードも出てきました。（②勉強会「グループディスカッション」参照）

- ・マジョリティ社会に対するトレーニングの必要性
- ・専門性がもたらす自らのマイノリティ化
- ・学べる地域をつくっていく
- ・時間をかけた合意形成
- ・個人の問題をみんなの問題に
- ・マイノリティへの眼差し
- ・専門職における市民感覚の大切さ などなど

シリーズを締めくくる、このシンポジウムでは、シリーズ①の講演会で基調講演として「人間の顔をした財政を取りもどす～『頼り合える社会』をめざして～」というテーマで話していただいた井手さんをモデレーターに迎えて、県内で活動されているさまざまな分野の討議者の方々、そして参加者のみなさんとともに、「『頼り合える社会』とは？そのために地域社会において共感の領域をつくりだすには？」について議論しました。



◆問題提起／「経済」の視点から見た地域社会—自己責任社会を超えて—◆

当日は、モデレーターの井手さんによる問題提起から始まりました。それは、生存・生活のニーズをみたとする目的のために「財政がなにをどこまでやるのか」「地域社会がなにをどこまでやるのか」「双方の関係、とりわけ財政から地域社会への責任転嫁とならないためにはどうすべきか」という点について、歴史的転換点における経済のあり方という視点からの問題提起でした。

そして、財政と地域社会での取組みはいわば“車の両輪”の関係にある、という認識のもと、地域で活動されている多様な分野の討議者の方々と討議を展開しました。討議に参加いただいたのは、6月・7月のシリーズで講師や討議者として参加された、名里さん、三浦さん、馬場さん、早川さん、裏（べい）さん、原さん、加藤さんに加え、小田原市市民部地域政策課長の府川悟志さんです。府川さんには、昨年度の円卓会議シリーズで、小田原市における地域コミュニティ組織の取り組みについて報告いただいています。

◆事例報告／地域の共感を創り出すために～子育て支援の場から広がる当事者意識～◆

そして午後のプログラムでは、「頼り合える社会」について、より具体的に身近な地域の視点から考えるために、ぴーのぴーのの原さんに話していただきました。地域の共感を得ながら活動していくことの大切さとともに「全部を自分たちでやらないし、当然やれない」「障壁（驚きや憤り）を感じて包摂となる」「役に立ってもらう前に役に立つ鉄則（Win-Win）」など、日常的な心得などもお話していただきました。



一般参加で来ていただいた50名ほどのみなさんも、テーブルごとに討議者あるいは参加者同士で、井手さんへの質問や「頼り合える」関係をつくるためにできることは何か、などについて話し合いました。

モデレーターの井手さんが投げかけた以下の課題は、私たち一人ひとりにとっては今後も考え続けていくことになるのではないかと思います。



～～～

どこかで境界線を引いて、あちら側とこちら側に分断して、あちら側を貶めることで自分を含めたこちら側の結束を強める——

そうした人間の持つ意識や思考は変えることができないものなのではないか——

でも、変えることができないのなら、そうした分断をしても意味のないような、互いにとって実りのある仕組みを、みんなで考えていきましょう——

①【講演会】

私たちはいかにして分断を超えられるのか
～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える

6/17（土）@横浜市技能文化会館（関内）

開会挨拶

高橋 忠生（公益財団法人かながわ国際交流財団理事長）



かながわ国際交流財団の理事長を務めております高橋と申します。主催者を代表して開会の挨拶を述べさせていただきます。

今日は週末の貴重な時間に、私どもの講演会にこれほど大勢の方にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。社会福祉の団体や施設の最前線でご尽力されている方々、あるいは地域社会で活躍されている皆さま、そして行政や司法の関係者の皆さまなど、さまざまな方にご参集いただきました。心より御礼申し上げます。

この21世紀かながわ円卓会議は、21世紀の幕開けである2001年に始め、当初はグローバリゼーションによって私たちの生活や地域にどのような変化が起こるだろうかとといったことに焦点をあてておりました。そして、今まさに欧米で政治的課題として問われているグローバリゼーションの負の側面として、その潮流に押し流され、地域の主体性や多様性が失われてきているのではないかと、そのような危機感と問題意識が浮上し、その対応としてコミュニティの問題について考えてまいりました。

昨年度から「神奈川のコミュニティとグローバリゼーション」をトータルテーマに挙げて、地域、あるいは現場により密着した議論を展開してまいりましたが、本日は、「私たちはいかにして分断を超えられるか」をテーマといたしました。日本の失われた20年の中で、格差が広がり、やせ細った中間層が貧しい人たちを批判する、あるいは外国籍の人たちを排斥する動きなど、さまざまな形で分断が進んでいます。なかんずく昨年は、この神奈川で障害者の存在そのものを否定する悲惨な事件まで起きてしまいました。どのようにしたらこうした分断を超えられるのでしょうか。

本日、基調講演をいただく井手英策さんは、財政社会学の立場から、どうしたら日本社会が分断を終わらせることができるのか、全ての人が受益者となることによって信頼し合える社会をつくるにはどうしたらよいか、積極的な発言を続けていらっしゃいます。今年4月には小田原市の生活保護行政の問題をめぐる、「あり方検討会」の座長として提言もまとめられています。昨年に引き続き井手さんのお力をお借りして、どのようにしたら分断を乗り越えることができるのか、ご一緒に考えてまいりたいと思います。

また、社会福祉法人訪問の家の名里晴美理事長、社会福祉法人青丘社の三浦知人事務局長から、それぞれのお立場で日本社会の中で分断を乗り越えて来られたご経験についてお話しいたします。

最後に、共催、協力、後援をいただいた神奈川県をはじめ、神奈川県社会福祉協議会、神奈川新聞社ほか皆様、また円卓会議の運営委員の方々に御礼を申し上げ、開会にあたっての一言のご挨拶といたします。今日はよろしくお願い申し上げます。

基調講演

人間の顔をした財政を取りもどす～『頼り合える社会』をめざして～

井手英策（慶應義塾大学経済学部教授）

はじめに / 不安の解剖学～生活はこれからどうなっていくか？～ / 勤労の義務を課す自己責任の社会 / 貧しさや、将来不安は日本の大部分の人びとに共有されている問題 / 家計の貯蓄率が落ち、非正規雇用化も進み自殺率も高い国 / 日本の経済はかつてのように成長できるのか / 最後の駄目押しとしてのアベノミクス / モデル自体の破綻が招いた貧困とそれを意識しない人々

弱者救済、反貧困がもたらすもの / 誰もが日々の生活にもがき苦しんでいる社会 / 小田原ジャンパー問題の背後にあるもの / 弱者がさらなる弱者を虐げている / 「あんなやつら、しばきあげろ、もっと働かせろ」 / 弱者がさらなる弱者を殺傷した相模原の事件 / 大勢の人々が被害者にも加害者にもなり得る社会

ルサンチマン：強者への憎悪・嫉妬 / 社会的弱者を特権階級と見なすゆがんだルサンチマン / 「仲間」のいない分断社会 / 自己責任が広がっている知らんがな社会 / 財政：人間の暮らしや命を守るために、人間の英知がつくり出したシステム / 「誰もが安心して生きていける社会」の姿とは？

頼り合える社会をめざして～お金で人間を区別しない～ / All for All という分配革命 / 痛みと喜びをみんなで分かち合っていくための財政 / 運が悪いただけで不幸な目に遭うことが許せない / 助けられることで心に屈辱が刻み込まれるかもしれない / なぜ恥ずかしい領域に追いついてないといけなののか

人々の生活を保障していくことで頼り合える社会を / 増税で自己負担分を軽減するための一つのモデル / 税によって個人の貯蓄を社会の貯蓄に変えている / 過剰貯蓄が招く非効率なお金の使われ方 / 税金は、負担を軽くするためのもの / 税をいったい何のために使うかを徹底的に監視する / みんなの暮らしを保障しても格差は小さくなる

格差がいけない理由は、子どもが学ぶ機会がなくなるから / 成長のために子どもに投資するのではない～結果的に経済が成長していく～ / 経済を成長させるために小さな政府をとという証拠はどこにもない / 成長のみを支えにするのではなく、新しい希望の灯をともし社会を

井手 英策（いで・えいさく） 慶應義塾大学経済学部教授

1972 年福岡県久留米市生まれ。95 年東京大学経済学部卒業。2000 年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。日本銀行金融研究所、東北学院大学、横浜国立大学を経て現職。専門は財政社会学。著書に『経済の時代の終焉』（岩波書店）、『18 歳からの格差論』（東洋経済新報社）、『分断社会ニッポン』（佐藤優・前原誠司との共著、朝日新聞出版）ほか。

最新刊は『財政から読みとく日本社会―君たちの未来のために』（岩波ジュニア新書）。2015 年度大佛次郎論壇賞、2016 年度慶應義塾賞を受賞。



基調講演

人間の顔をした財政を取りもどす～『頼り合える社会』をめざして～

井手英策（慶応義塾大学経済学部教授）

はじめに

今回の講演テーマとして、「頼り合える社会」と書いています。頼るということの意味を僕たちはもう少し真面目に考えないといけないのではないのでしょうか。どうしても日本人は、「もっと大変なやつがいるのだから我慢しろ」とか「おまえだけじゃない、みんな苦しいんだ」といったことを口にしてしまいます。

今日のプログラム後半でパネルディスカッションのテーマの中に「成熟した市民社会」という言葉がありますね。正直に言うと、市民社会という言葉は、僕はいまいち好きではありませんが、ただ「成熟した社会」を考えると、僕にとって大切なポイントが一つある。それは何かというと「自分はここまではできる。ここまではできるのだから、そのことができることについては徹底的にやろう。しかしながら、ここから先は自分にはできない。そのできない領域のことをきちんと自分なりに理解をして、そして、そのできない領域のことはお互い頼り合ってもいいという状況をつくれるかどうか」というのが、僕にとっては“成熟する”、“成熟した社会”という言葉の意味ですね。

不安の解剖学～生活はこれからどうなっていくか？～

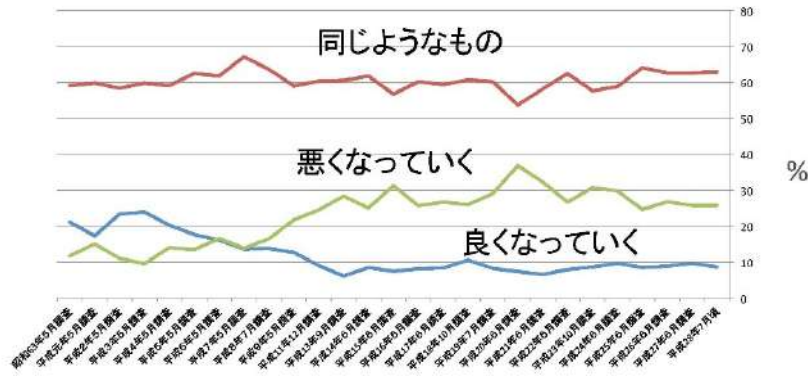
では本題に入ります。まず「不安の解剖学」というタイトルを付けています。この意味ですが、何で多くの日本人が今不安を感じているのかということについて、限られた時間ですけど、簡単に見ていこうと思います。

これは内閣府の調査です。みなさん、自分自身に置き換えて考えてください。みなさんの生活、暮らしはこれから将来にわたって良くなっていくのでしょうか。1990 年代の後半ぐらいから明確に「良くなっていく」という回答と「悪くなっていく」という回答の開きが出てきて、現在では自分たちの生活がこれから良くなっていくと感じる人の割合はもう 1 割を切っています。

あるいは、次に、老後の見通しはどうでしょう。明るい見通しを老後に持てますか。この質問で、「全くそうである」「どちらかといえばそうである」と答えた人の割合がやはり 90 年代の後半からガクンと落ちてしまう。そして、一番直近のデータでは、反対に「全くそうではない」「どちらかといえばそうではない」という老後に対して不安を抱える人が全体の 85%を超えている社会になっています。

みなさん、冷静に考えてください。自分たちの暮らしが良くなっていくと思える人が 1 割に満たない。そして老後が不安だと答える人がほぼ 9 割いる社会はいったいどういう社会なのでしょう。

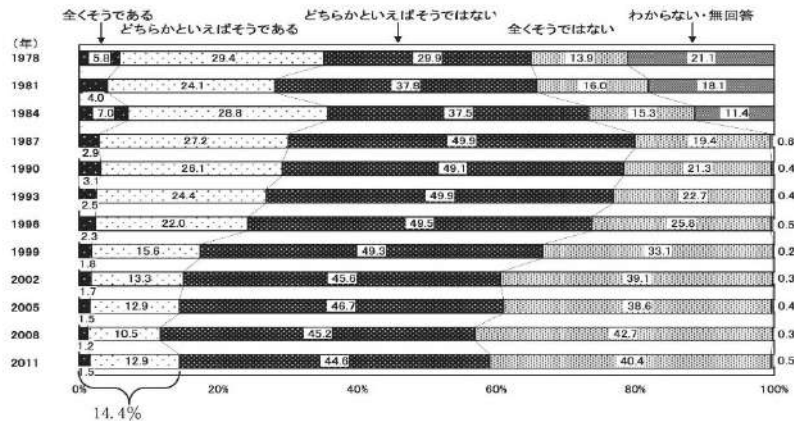
生活はこれからどうなっていくか？



内閣府「国民生活に関する調査」より作成。

3

老後に明るい見通しを持てるか？



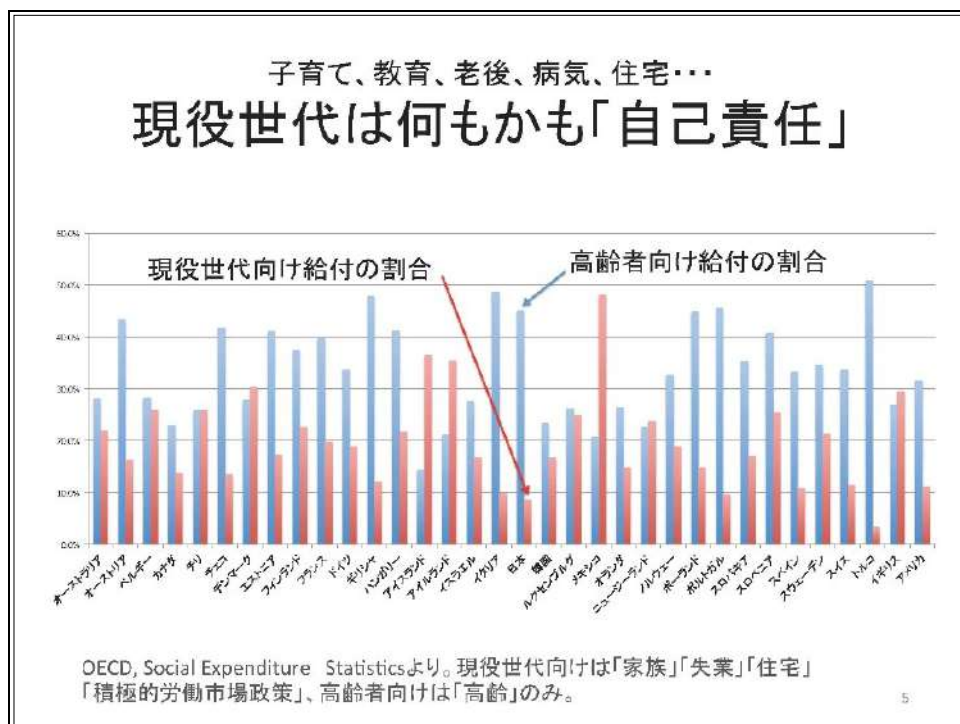
内閣府「国民生活選好度調査」より。

4

勤労の義務を課す自己責任の社会

このグラフの中では、2本並んだ線がありますが、これは何を示しているかというと、国の社会保障の中で高齢者に向かっている割合が左側、そして現役世代、働いている人たちに向かっているものが右側を指しています。その中で、右から3番目にトルコがあって、トルコはやたらと現役世代に向かって社会保障が行っていないのですけど、トルコの次に現役世代の取り分が少ない国が日本なのです。今日は年配の方もいらっしゃるし、若い方もいらっしゃるけども、日本というのは、例えば子どもを塾に行かすでしょう。学校に、大学に行かすでしょう。老後の備えをするでしょう。病気になったときの備えをするでしょう。

あるいは家を買うでしょう。全部日本人は貯金でやります。



要するに私たちの社会は自己責任の社会なのです。自分で働きなさい。知っていますか。憲法の 27 条に勤労の義務であるでしょう。就労や働くことが義務だと言っている国は確かにありますよ。でも、憲法の中で勤労が義務だと言っている国はおそらく先進国の中にはない。あるいは広い意味での先進国で言うならば韓国だけだと思います。そういう義務を私たちは憲法によって課されている。ただ働くだけでは駄目なのです。真面目に労働にいいししないと、勤労しないとイケないのです。その国の民は自ら働き、自ら蓄え、そして子育てであれ、教育であれ、老後であれ、病気であれ、住宅であれ、全部自己責任でやる。ですから、その裏返しとして、政府は働く人たちの暮らしを助けようとはしない。あえて挑発的に言えば、貯金ができなくなった瞬間に人間が人間らしく生きていけない社会がやってくるということです。

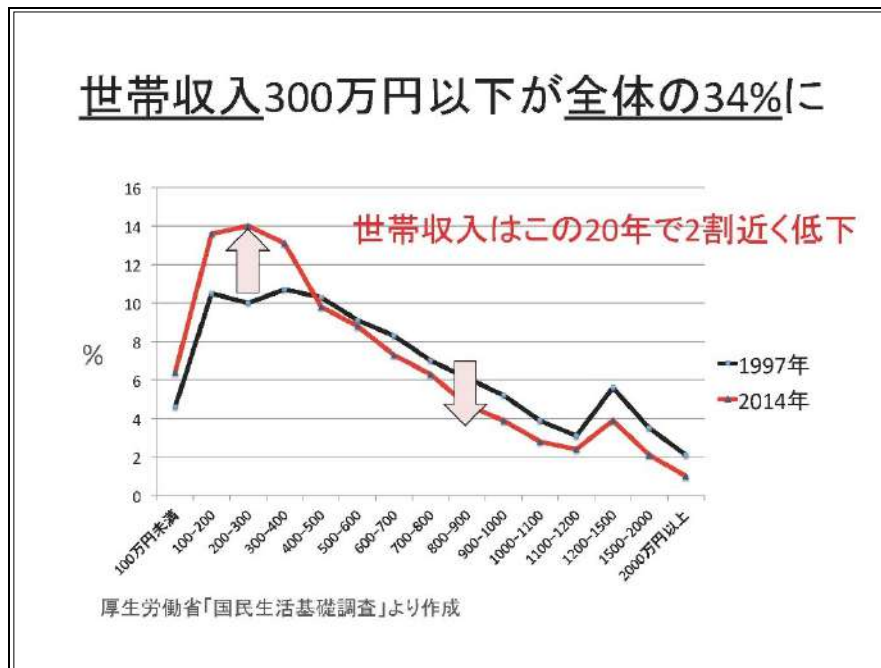
貧しさや、将来不安は日本の大部分の人びとに共有されている問題

続いてこのグラフを見てください、色の濃い折れ線が 97 年で、薄い方が 2014 年です。何で僕が 97 年を選んだのか。理由は簡単です。実質可処分所得、要するに税金を引いた後の所得、手取り所得が一番多かったのは 1997 年なのです。だから、子どもたちがみなさんに、ねえねえ、日本人が一番豊かなのはいつだったの？ともし聞かれたとしたら、僕たちは、それは 20 年前だよと答えないとイケない。

そして、この 20 年間の間に何が起きているか。これはそれぞれの収入の人たちが何%いるかを見えています。2 つの線が交わっているのがだいたい収入でいうと 400 万円ぐらいです。みなさん、気を付けてくださいね。これは世帯収入です。90 年代の半ばから専業主婦世帯と共働き世帯の数が完全にひっくり返って、今は明らかに共稼ぎの方が多いいのです。ですから、ここで言っている世帯収入は、父ちゃんだけが働いたという昔の話ではなくて、お父さんとお母さんが働いて得ている収入だと考えた方が近いわけです。

その中で見てください。世帯収入 400 万円以上の人たちが、お金持ちも含めてみんな減っている。反対に 400 万円以下の人たちは明確に増えている。今、日本では世帯収入 300 万円以下の人たちが全体の 34% を占

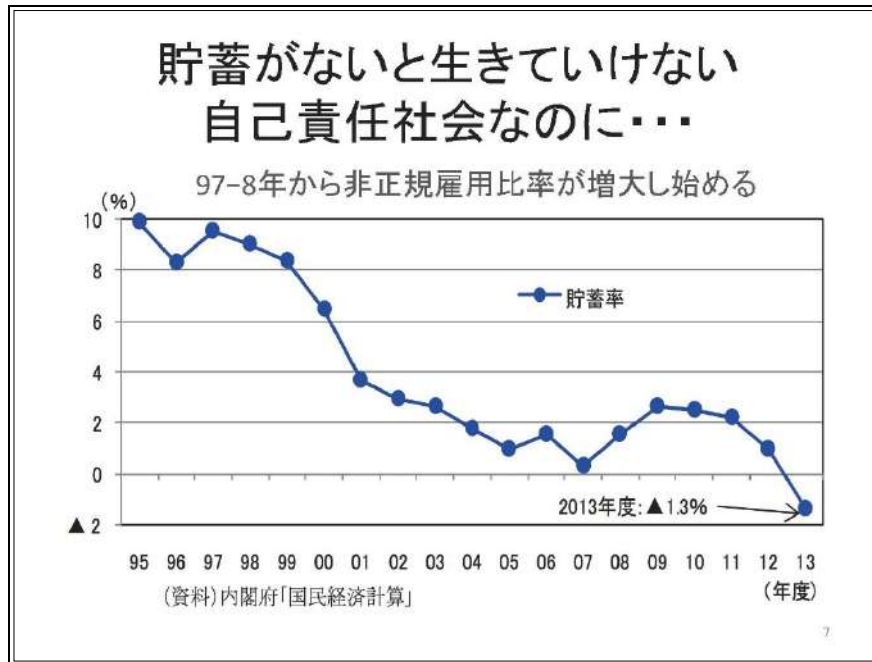
めています。みなさん、考えてください。子どもを2人産む、3人産む。そして、その子どもたちを大学に行かせる。それが世帯収入300万円できるとおもいますか。いや、300万じゃなくてもいい。400万でも500万でもいい。できますか。世帯収入400万だったら、全体の約47、8%になります。世帯収入500万だったら、全体の6割ぐらゐを占めることになります。その世帯収入300、400、500万の人たちが子どもを3人持ってみんな大学に行かせようともし思ったとして、できますか。無理ですよ。



これはすごく重要なポイントです。つまり、「貧困」って僕たちは語りますよね。「貧困」と言った瞬間に、何か一部の人びとが生活に苦しんでいるんだろうと、ぱっとイメージしますよね。違う。貧しさや、将来不安は日本の大部分の人びとに共有されている問題であること。ここがまず一番大事だと思う。決してごく一部の人の問題ではないということです。

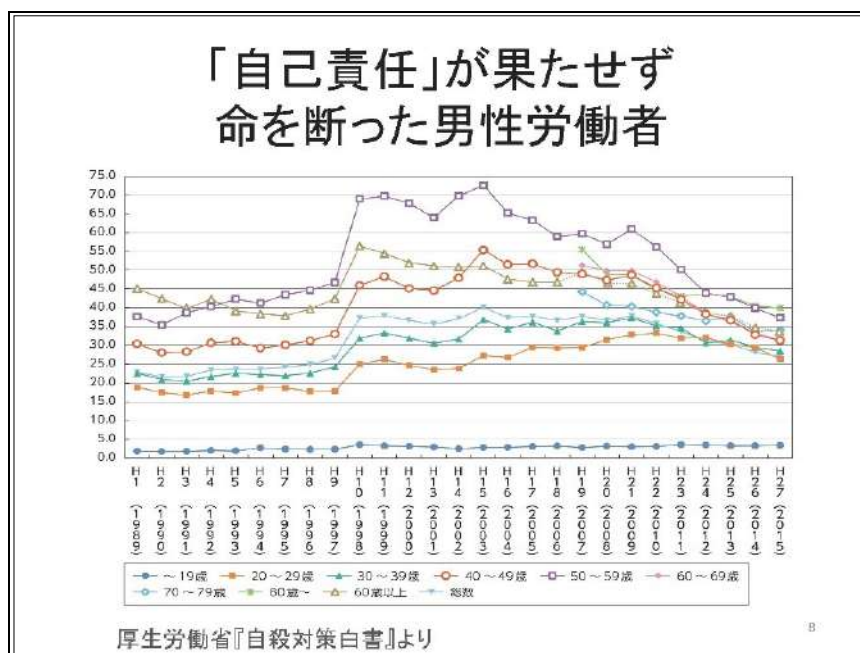
家計の貯蓄率が落ち、非正規雇用化も進み自殺率も高い国

僕はみなさんに貯金ができないと人間らしく生きていけない社会をつくったと言いましたが、こちらのグラフを見てください。96年から97年にひょいっと上がって、97年からつるべ落としに減っていつているわけですね。そして、とうとう2013年にはマイナスになった。直近で少し上がったけど、それでもまだ0.7、ほぼ0%。何か。家計の貯蓄率です。マクロで見た貯蓄率です。みなさんに貯金ができないと人間らしく生きていけない社会ですよと言った。しかし、日本社会の全体で見ると、貯蓄率はもうマイナスになっています。



ちなみに、この 97 年から 98 年にかけて非正規雇用化が急速に進んでいき、そしてさっき見たように収入が、年収がどんどん落ち始め、そして貯蓄率もだーっと落ちていっている。97 年（平成 9 年）から 10 年。この時期は日本の経済が、日本の社会が大きく変わった時期なのです。そのときに何が起きたか。今見た 97 年から 98 年にこの数字がびよーんと上の方に急上昇しているのがわかりますよね。これは何か知っていますか。わかりますか。これね、自殺率。実は女性の自殺率はほとんど変化しないのです。じゃあ誰が死んだか。40 代、50 代、60 代の働く男性が死んでいます。

みなさんね、雇用が不安定化し、収入が減り始め、貯蓄も減り始める。将来の不安、少しずつ人々を襲っていく中で、働く男性は愛する家族の元に帰るのではなく、自らの命を絶つという選択をしている。これは率で見ているけれども、数で言うならば、2 万 4,000 人足らずから、たったの 1 年間で 3 万 3,000 人、8,000 人以上の数が増えています。たった 1 年です。そして、その数字がずっと続いたんです。



最近になって自殺率が下がっているから良かったねと言う人がいるのだけど、それは全く間違っている。なぜならば、若い人の自殺率が上がってしまっていることと同時に、いまだにこれでも世界の中で6番目に自殺率は高い。先進国というなら一番高いと言っていいと思います。しかも、なぜ自殺率が下がったかという、思い切った表現を使ってよければ、人間が死に尽くしたからです。要するに年金をもらえる世代に突入したので、もう死ななくて良くなったということです。恐ろしい社会を僕たちはつくっている。自己責任が果たせなかった男性労働者は死ぬことを選ぶという社会を僕たちはつくっているわけです。

日本の経済はかつてのように成長できるのか

さあ、どうしますか。この社会をどうやって変えていくのか。どうすれば人々が将来の不安から自由になれるのか。考えないといけないですね。しかしながら、与党のアベノミクスはもちろんのこと、野党も含めて、みんなが一つの答えしか示していない。どういう答えか。経済をもっと成長させて、所得をもっと増やして、そして貯金をもっと増やして、将来が安心できるような状況をつくろうという、この選択肢しか示していない。わかりました。じゃあ、それでいいです。でもね、本当に日本の経済はかつてのように成長できるのでしょうか。今から客観的なデータを幾つかお示ししていきます。いいですか。

まず1人当たりのGDPは昔、日本は世界で1位でした。ところが、今では、データによりますけど、27位から33位。33位、どんな順位か。OECDが今、34か35カ国くらいでしょう。ですから、先進国の中で1人当たりのGDPはビリつけつということです。

あるいはバブルが崩壊して、1991年から去年の2016年までの間にどれぐらい経済が成長したか。平均で見ると、0.9%成長。バブルがはじけて、日本経済は1%の成長すらできていない。

それだけではありません。オリンピックが2020年にあります。オリンピックが2020年にあって、それが終わって5年間の間の平均成長率は0.5%といわれています。これは日本経済研究センターの推計です。そしてオリンピックが終わって6年後から10年後の成長は0%。オリンピックが終わって10年後にはピーク時から人口が1割近く減っています。

日本銀行が、中長期的に見て日本の経済はどれぐらい成長するのかという潜在成長率を試算します。みなさん、知っていますか。GDPは安倍政権において基準を改定していますから、昔に比べてGDPは増えています。経済が成長したのではなく、同じ経済でも基準を変えたからGDPは大きくなったのです。それでもなお日本の中長期的に見て、経済成長率は0%台の半ばから後半程度、つまり0.7%、0.8%、0.9%ぐらいしか最大でも成長しないといわれている。

最後の駄目押しとしてのアベノミクス

そして、最後の駄目押しでアベノミクスでしょう。僕はみんなにね、アベノミクスの批判もいい加減やめてくれと言っているんですよ。効果がなかった。いやいやアベノミクスに効果があるとかないじゃなく、あんたたちが政権を執って経済政策をすれば、本当にアベノミクス以上に経済成長させられるの？ 無理でしょう。そうじゃない。安倍さんを褒めなきゃ駄目なのですよ。素晴らしい、良くやってくれたと。あんたは体を張って、もうこれ以上、日本の経済が成長しないことを証明してくれたと言わなければならない。現実、あの空前かつ絶後のおそらくもうこれ以上ない経済実験をやって、しかもオリンピック需要でしょう。それが重なっても、昨年度の成長率はわずか1.2%。そして、今から10年ぐらい前にリーマンショックがありましたが、それ以前の設備投資の水準すら、アベノミクスとオリンピック需要が重なっても、いまだに回復でき

ていない。

この状況の中で、みなさんね、日本の経済はまだ成長すると。かつてのような実質 2%、3% 成長を取り戻す。そして貯金ができ、将来の不安から人間が解き放たれる。もしそんなことを言っている政治家がいるとしたら、みなさん、その人たちを信じますか。僕は絶対に信じない。もしこれ以上、かつてのように、今以上にかつてのような経済成長を日本が取り戻すということをもし言う人がいるとするならば、僕は断言する。その人たちは嘘つきだ。絶対に日本の経済はかつてのように成長しません。これは理論的に言っても本当は説明ができます。

モデル自体の破綻が招いた貧困とそれを意識しない人々

時間がないので簡単に説明にとどめますが、経済が成長するためには一番重要なのは労働力人口です。しかし働く人の人口は間違いなく減ります。次に大事なものは設備投資。多くの企業が海外に移った今、かつてのような設備投資を国内で行うことは不可能です。結局、最後、私たちが頼るしかないのはイノベーションです。ですから、経済学の本を読んでください。すべて最後はイノベーションが拠り所になっている。イノベーションが日本経済を復活させるとみんな言います。イノベーションは起きるかもしれないし、起きないかもしれない。しかしながら、起きるかどうかわからないものに国民の運命を託すようないい加減な政治を許すわけには絶対にいかない。論点はそこではなく重要なことは、自己責任で生き、自分でお金をため、自分で将来の不安に備えるという、このモデル自体が破綻してしまっているということです。そこで、ではどうするのか？ということをおもたちは考えなければいけない。

僕はみなさんに申し上げたい。苦しんでいるのは一部の誰かではなく、大勢の人々が苦しんでいるという認識を持たないといけな。い。その中で、しかしながら、野党の人たちがどういう議論をするかということ、全く人々の心に寄り添わない議論をしてしまう。どういうことか。すごいですよ。みなさんね、日本人にね、みなさんの所得階層はどこですかと聞くのですよ。上流ですか、中流ですか、下流ですかと聞くのですよ。そしたらね、自分は下流階級だ、低所得層だと答える人ね、4.8%しかいない。一方で、私は平均です、中間層です、中流ですと答える人の割合は 92.1%です。

弱者救済、反貧困がもたらすもの

おかしいでしょう。だって、さっき言ったじゃないですか。世帯収入 300 万以下は 34% いるんですって。世帯収入 400 万円以下の人たちは 47% いるんですって。しかしながら、自分は低所得層だと認める人は、わずか 4.8% しかいない。じゃあ、例えば、この 34% と 4.8% の差、あるいは 47% とこの 4.8% の間の差っていったい何なんですか。もうわかるでしょう。現実の暮らしは低所得層で、本当に厳しい毎日を送っているにもかかわらず、自分はまだ中の下ぎりぎり中間層で踏ん張っていると信じたい人たちがこの社会には大勢いるということです。

その人たちに対して、困った人を助けてあげよう、格差を小さくしてあげよう、弱者救済だ、反貧困だと言ったら、何が起きるか。俺たちの生活の方がもっと苦しいよ。何であんな働きもしないやつらのために金を払わなきゃいけないの。本当は働けるんじゃないのか、不正受給だろう。もっときちんとしばけという話になるでしょう。自分の生活がこんなに苦しいのに何であいつらが。働かせろとなってしまう。現実の暮らしが低所得層なのに、自分は中間層だと信じたい、この人たちの気持ち。この気持ちを日本の左派もリベラルも全くわかっていない。だから、格差是正、反貧困、弱者救済を繰り返す。そして、選挙で負け続けるわけで

すよ。ここに本質がある。

誰もが日々の生活にもがき苦しんでいる社会

今日は時間も限られているので、本当はおしゃべりしちゃいけないのだけど、僕 NHK に呼ばれたのですよ。健康格差というテーマの NHK スペシャルに呼ばれて、収録に行ったら、NHK の人がわらわらっと僕のところにやって来て、「先生、お願いですから、今日は黙っていてください」と言うのです。黙るわけじゃないですか。ぶわーっとしゃべりますよね。そしたら、もうね、98%ぐらいカットされているんですよ、映像を見たら。もうばかみたいです。ただ座ってうなずいているはげおやじなんです。何のために来ているんだ、あんなしゃべったのにと思いましたよ。一方で、黙れと言ったくせに、舌の根も乾かないうちに、すぐ同じ NHK スペシャルで僕を呼ぶのです。それで今度は爆笑問題と一緒に出ました（こうして、だんだん学者の域を超えていくんですけどね）。

何で、最初の時に黙れと言われたかという、その健康格差の N スペは、貧困女子高生という N スペの次だったのです。暮らしが貧しい女子高校生が顔出して、モザイク掛けしないで、自分の暮らしがいかに大変かということを生懸命語ったら、ネット上で大炎上して、しかも NHK には非難と苦情の電話が大殺到して、NHK はひっくり返りました。それで、僕にこう言った。「先生、あの貧困女子高生の次の N スペですから、今、ネトウヨが目を皿のようにして見えています。先生がそこでリベラルな発言をしちゃうと、ネトウヨの人たちが怒り狂うから、お願いですから、今回黙ってください」と。

次に僕が N スペに呼ばれて行ったら、今度はまた NHK の人がわーっとやって来て、「先生、すみませんでした。勘違いしていました。あの貧困女子高生問題はネトウヨの仕業ではありませんでした」と言うのです。じゃあ誰が犯人かと言うとみんなです。要するに言っていることは一つしかない。「自分たちの暮らしの方が大変だ。あんなものは貧困ではない。もっと大変なやつは世の中にたくさんいるのだから、あんな女はもっと我慢させろ」と。ネット上も、電話でも、インターネットのメールでも。びっくりしますよね。

この、歯を食いしばって頑張っている中間層だと信じていた人々の怒りというのは、ものすごいものが今あります。このことをきちんと見ておかないと、実は今から話す小田原の問題も、あるいは相模原の問題も本質が見えてこない。重要なことは、僕たちはすぐに勝ち組と負け組と分けるでしょう。加害者と被害者と分けるでしょう。それが間違っている。前提として、誰もが被害者になるかもしれない社会。誰もが日々の生活にもがき苦しんでいる社会。大部分が弱者が占めている社会。僕はこの発想が決定的に大事だと思っています。

小田原ジャンパー問題の背後にあるもの

小田原の問題、ご存じですね。市の職員が、生活保護なめんな、不正受給は人間のくずだと書いたジャンパーを着て、生活保護利用者宅を 10 年にわたって訪問していた、という話です。そのきっかけは、2007 年、10 年前に起きた殺傷事件です。生活保護の利用を打ち切ったところ、その元利用者が怒って、結局は市の職員にナイフで切りつけたという事件が起きる。そのときに、職員の人たち、ケースワーカーの人たちは一生懸命利用者に寄り添っていたつもりだったのに、その自分の中では寄り添ったはずの、助けたはずの人から刺されるわけですね。このことで、小田原市の生活保護係は、もう心が折れて、みんなばらばらになろうとするわけです。

ところが、同じ市役所の仲間たちは全く救いの手を差し伸べてくれない。その結果、市が何をやったかと

言えば、人をグッととり押さえるときに使うさすまたを2本設置しただけです。全く仲間たちが助けてくれず、孤立を深める。しかも、叫び声を上げようにも、組合が小田原市にはなく、その声を聴いてくれる人たちもいない。彼らは内向きになり、仲間同士が肩を組んで励まし合って生きていくしかなかったわけですね。

その仲間みんなが戦うときに一つのユニフォームを着る。あのジャンパーを着て、気持ちの中で生活保護利用者を侮辱する気はない。むしろ、俺たちは不正受給と戦っている、生活保護のために体を張っている、ということを知ってほしいという気持ちだったというわけです。

弱者がさらなる弱者を虐げている

この問題について市の検討会議が設置され、僕は座長を務めましたが、非常に詳細なアンケート調査を行いました。あのアンケート調査を見てびっくりしました。1,000 人近い回答者の中で、生活保護係に異動してもいいと答えた人の数はたったの 19 名。残りは嫌だと言うわけです。そういう職場なのです。みんなが行くのは嫌だ。だから、もう、そこに配属が決まっちゃうと、仲間からは、ああ、お気の毒に、かわいそうに、あそこなんだ、大変だね。職員さんのメンタリティとしても、ちょっとあそこをじろじろ見るのは気の毒だよ、かわいそうだよ、というように、組織の中でますます孤立していくわけです。その組織の中で孤立した人たちが組織の外に出て行ったときに利用者を差別するのです。

NHK が実はニュースウオッチ9で、小田原問題を取り上げてくれて僕も出ただけで、あの番組はあまりにも行政のケースワーカーが被害者だという面が強く出過ぎていた。だから、僕は最初にこの番組はアンフェアだと言ってちょっと怒りました。一番被害者だったのは利用者だということを確認しないといけないとはっきり言いました。しかしながら、何で NHK がそういう番組づくりになったかという、知れば知るほど、ケースワーカーの置かれている処遇があまりにもひどいのですよ。仕事は大変だし、刺されちゃうし、組織の仲間は助けてくれないし。みんなからさげすまれるとは言わないけれども、ああ、あそこに行ったんだ、かわいそうにという職場なのです。

その中で内向きになり、ジャンパーを着て団結した人たちが、何の自覚もないままに組織の外に行って、同じように差別された人間が他者を差別しているわけですよ。僕には、弱者がさらなる弱者を虐げているようにしか見えなかった。もちろん、これは言うておきます。ケースワーカーが加害者です。ケースワーカーが犯人です。しかしながら、僕にはその加害者が、犯人が弱者にしか見えないのです。その弱者がさらに弱い者をたたくという、この問題を僕たちはきちっと考えるべきです。

「あんなやつら、しばきあげろ、もっと働かせろ」

なめんな、不正受給は人間のくず、と書かれたこのジャンパーを着て 10 年間、利用者のところに行っていたわけです。この会場の中で、そのことは素晴らしいことだと思う人はどのくらいいますか。正直に手を挙げてください。いいことをやったと思う人、どのくらいいますか。本当にいない？ ここには一人もいませんね。

小田原市に全国から、あるいは小田原市民から苦情やメッセージが寄せられるじゃないですか。「公務員、ふざけんな」「人権を何だと思っているのだ」「利用者のことをもっとちゃんと考えろ」と言った人の割合は全体の 55%です。残り 45%は何だったか。「よくやった、素晴らしい」「もっと不正受給を取り締まれ」と言っているのです。

この会場にいるみなさんの中の基準が、国民の多くの人々の基準とずれていることは絶対自覚しないとい

けない。僕は国家公務員のキャリア官僚の初任研修として4月に研修をやるのですが（何で僕なんかを呼んで基調講演をさせるのか。この国家、大丈夫かとも思いましたが）、彼らにも同じことを言いました。この会場のみなさんと同じ意識を持っていて、でも、それは世の中の3割、4割、5割の人たちの感性とずれているのです。

これは重要でしょう。彼らにとって生活保護を使っている人たちは、働きもせずに金をもらっている特権階級なんです。自分の生活はこんなに必死に働いても苦しい、つらい、大変だ。子どもを産むのをあきらめて、結婚をあきらめて、必死になって働いているのに、何であいつらだけ金をもらって結婚して子どもがいて、しかも公営住宅に住んでいるんだ。「あんなやつら、しばきあげろ、もっと働かせろ」と思っている人間が山のようにいます。そうすると、生活保護をなめるな、不正受給は人間のくずだというメッセージが、その人たちにとっては素晴らしいメッセージに聞こえるのです。これが今の日本社会。これがすごく重要なポイントだと思います。

弱者がさらなる弱者を殺傷した相模原の事件

そこに気付くと、相模原の事件も全く同じです。戦後最悪の事件の一つであることは間違いない。加害者はとんでもないやつですよ。しかしながら、これをもし殺傷事件、殺人事件から切り離して、その人だけに目を向けたら、どう見たって社会的弱者ですよ。要するに、仕事をしていて辞めて、生活保護利用者になって、生活保護を打ち切られて、そして最後、鑑定をした結果、パーソナリティ障害があったと言われた人ですよ。どう見たって社会的弱者です。でも百歩譲って、いやいや大麻とか薬物使っていたからねという意見もあるでしょう。でも、それはさまざまな統計が明らかにするように、薬物に陥っていく人たちは、社会的に見るとほぼ下層階級です。

ですから薬物が理由であれ何であれ、明らかにこの加害者は社会的弱者です。その社会的弱者がさらに弱い人たちをたたく。しかも、身体、精神、知的などさまざまな障害がある中で、最も抵抗しにくい知的障害者あるいは複数の障害を抱えている重複障害者をターゲットにして、しかも、殺す直前に、その人が話せるか、話せないかをきちんと確認した上で、話せない人間だけを選んで殺している。

恐ろしい事件ではあるけれど、何が起きているかという、社会的な弱者が、さらに自分よりも弱い者を傷つけ、そしてその人たちを皆殺しにすることがこの世の中にとっていいことだと平気で言っている社会が生まれているということです。しかも、この事件について少なくない人びとが、ネット上で「何だかんだ言っても、家族はホッとしたよね」なんていう書き込みを散々やっている。異常です。狂っています。

大勢の人々が被害者にも加害者にもなり得る社会

でもね、僕たちはもう一回、ここで踏ん張らないといけない。異常で狂っている状況でありながらも、そのような人々が決して少数派ではない社会が生まれていることを僕たちは考えないといけない。「俺たちが多数派で、あんなものは少数派だ」「一部のおかしいやつがいたんだ」という話ではもはやなくなっているのです。自分の苦しさに耐えかねた人がさらに弱い者をたたく、傷つける、あるいは殺すことによって、自分の居場所を確かめ、自分の精神的な安らぎを得なければいけない社会がもうできあがっています。

今日は、やまゆり園の問題であれ、小田原のジャンパー問題であれ、現場の人たちが参加されており、その鋭いまなざしが、この後、次々加えられていくのだと思いますが、僕はまず入口の段階として、とても深刻な大きな社会問題があることを言っておきたい。大勢の人々が被害者にも加害者にもなり得る。そして大勢

の人々が生活に苦しみ、他者の幸福ではなく、他者の不幸や失敗を願うような社会ができあがっていることをまず確認したい。

ルサンチマン：強者への憎悪・嫉妬

ニーチェという哲学者がいますよね。僕、大学に行くのが嫌いでね、授業はほとんど1回も出たこと……（この会場には学生がいるのかな。僕のまねをしたら駄目よ）。それでも、うちは母子家庭で、おふくろに申し訳ない思いもあって、授業はまったく出なかったけど、哲学の本をずっと部屋で読んでいました。それがよかったなど、今、思います。

ルサンチマンって聞いたことがありますか。ニーチェが言っているルサンチマンとは、強者に対するねたみ、嫉妬、憎悪の気持ちです。強い者、たとえば公務員の給料高すぎる、議員定数多すぎるというのは明らかなルサンチマンです。みなさんも、知っていると思いますが、自分の子どもに就かせたい職業の1位は公務員です。なのに公務員のことを、人件費が高いとか、満足に働きもしないとかボロクソに言うでしょう。でもね、子どもにならせたい職業の1位は公務員。これがまさにルサンチマンです。憧れる故の嫉妬の感情、妬みの感情です。

ルサンチマンとはいったい何なのか。ニーチェは人間に対する恐怖だとして、つぎのように言っています。「人間に対する恐怖とともに、われわれは人間に対する愛、人間に対する畏敬、人間に対する希望、否、人間に対する意志をさえ失ってしまった」と。まさに今、日本にはこの状況が生まれている。人間に対する愛、人間に対する尊敬の気持ち、人間に対する希望、否、人間に対する状況を変えよう、何とかしてあげようという意思さえも失いつつある。

社会的弱者を特権階級と見なすゆがんだルサンチマン

しかし、みなさん、気を付けてください。ルサンチマンは、本来、強い者への憎悪や嫉妬です。しかし、今日僕たちが気づいたことは何か。社会的弱者に対して人間がルサンチマンを持っている社会だということです。要するに、生活保護を利用している人は誰がどう見たって弱者です。しかしながら、その人に対して、働きもせずに、いいところに低い家賃で住んでいる、金をもらっている特権階級だという意識が国民の中に芽生えている。だから、その特権階級をたたく。弱者を強者と捉え、そして、その人たちを憎み、攻撃する社会、ニーチェですら予想しなかった社会が生まれているのです。社会的弱者を特権階級と見なす社会、明らかにゆがんだルサンチマンです。では、かといってルサンチマンはなくなったかといったら、僕に言わせれば、なくなっていない。いわゆる金持ちや何かに対する妬みの気持ちもある。いわば、どこもかしこもルサンチマンの社会になっているということです。恐ろしい社会ができあがっていると僕は思います。

「仲間」のいない分断社会

今日は参考資料をいろいろ付けていますが 26 ページ（「仲間」のいない分断社会）をご覧ください。今のルサンチマンの話について統計を使って説明します。平等、自由、愛国心、人権。これらは普遍的価値といわれています。つまり、どの国に行っても大切だと考えられる価値観です。日本人に「所得をもっと公平にすべきだと思いますか」と聞くと、イエスと答える人の割合は 58 カ国中 39 番目です。さっき言ったように先進国は 34～35 カ国しかないのです。先進国の中で一番平等に対する関心が薄い国だということです。

次に「どのくらい自由を感じるか」と聞くと、「かなり感じる」「ある程度感じる」と答える日本人の割合は

58 カ国中 51 番目です。また自由には、自分の人生は自分で決められるという別の定義もあります。今日、若い人も来てくれていますが「自分の人生は自分で決められる社会であるか」に対してイエスと答える人は 60 カ国中 59 番目です。あるいは、「自国の戦争のために喜んで戦えますか」と聞いて、イエスと答える人は 58 カ国中でビリです。そして、最後に、これが意外なのだけど「自国に人権への敬意があるか」に対してはイエスと答える人の割合が 34 番目となっています。

「仲間」のいない分断社会

1. 平等:「所得はもっと公平にされるべきだ」58ヶ国中39番目
2. 自由:「どのくらい自由を感じるか」58カ国中51番目
3. 愛国:「自国の戦争のために喜んで闘うか」58ヶ国中58番目
4. 人権:「自国に人権への敬意があるか」 52カ国中34番目
（“World Values Survey”より）

- 価値を分かち合えない、仲間意識を持ってない「人間の群れ」
- 「共感」ではなく「自己責任」
- だれもが弱者になりうる社会で疑心暗鬼に襲われる人びと

26

いずれにしても、先進国の中で、この普遍的価値を最も分かち合っていない国民が日本人だということです。これが今日のテーマである「分断」を意味する最も重要なものと僕は思います。いいですか、みなさん。人間が集まっただけで社会はできない。ある価値を分かち合って、価値観を共有して初めて人間の集まりが社会へと変わるのです。

自己責任が広がっている知らんがな社会

たとえばものすごく差別的な発言を繰り返しているヘイトスピーチをやっている人がいるとしましょう。その向かいには、左翼の人たちが反対するデモをやっているとしましょう。その二つが出会う。YouTube でよくありますよね。殴り合いのケンカを始めるじゃないですか。ここで左翼と右翼が殴り合ってケンカをしている人たちを見て、みなさんは、「彼らは仲間だ」とは絶対言わないですよ。なぜか。何にも価値観を分かち合っていないからです。相手の言っていることを理解しようとしないうし、相手の言っていることが理解できもしない。なぜならば、価値を分かち合っていないからです。価値を分かち合わない人間の集合は、仲間とか同胞、あるいは日本社会だと本当に言えるのかというギリギリのところまで来始めています。

だから考えてほしい。もしそこに誰かがいて、その人が困っている。困っている人がいて、貧しい人がいて、その人が仲間だったら、大丈夫ですか、お気の毒に、お助けしましょうかと、声を掛けるでしょう、仲間なんだから。しかし、もしその人を仲間とっていない社会だったら、何て言いますか。本当は働けるんだろう。自助努力だろう。怠けたんだろう。自己責任じゃないか。俺、関係ねえ。おまえ、自分で何とかしろよと言うんじゃないですか。この問題ですよ。今、小田原の問題であれ、相模原の問題であれ、あるいは日本全体

であれ、構わないけれども、同じ日本人の苦しみを自分の苦しみだと感じられない社会がやってきている。そして、それは仲間の被害ではなく、見知らぬ誰かの自己責任の問題としてしか捉えられないような社会ができ始めているわけじゃないですか。

TKO というお笑いコンビがいて、その木本さんという人と対談したときに、木本さんからものすごく面白いことを聞かせてもらった。「井手さんね、今、お笑いの世界で一番はやっている言葉、知ってる？」と聞かれて「わかんない、知らん」と言ったら、「それよ、それ、知らんがなよ。言われてみたらそうでしょう。テレビを見ると、すぐ芸人が知らんがなと言っているでしょう。でも、おかしいんだって、あれって。俺、関係ねえ、おまえのせいだろう。自分で何とかしろよ。俺、無関係だって。知らんがなってそういうことですよ。知らんがな、おまえのせいだ。知らんがなと言ったら、客が勝手に共感して笑い出すんですよ。いったい日本はどんな社会なんですか」と。「先生の言っていること、本当によくわかります」って言われました。そういう問題です。知らんがなですよ。そういう社会になり始めている。

財政：人間の暮らしや命を守るために、人間の英知がつくり出したシステム

その中で多くの人々が社会的弱者に救いの手を差し伸べるのではなく、自分の生活を守ることに一生懸命になり、その人たちに関心を持たないばかりか、その人たちを嫉妬して、攻撃する状況が生まれている。僕は、そのことを小田原や相模原の問題から見いだしていかないといけないと思います。

本当の危機なんです。みなさんね、僕、財政学者でね、日本の政党ね、どの政党もマニフェストとか政権の公約を見ると、必ず借金まみれのこの財政を次の世代には残さないとか言うのですよ。みんな言うのですよ。どうせみなさんもそう思っているでしょう。「こんなみっともない財政を次の世代の子どもたちには残すわけにいかない。借金のツケを回すな」とか言うじゃないですか。本当にむかつくんですよ。

あのね、財政というのは、人間の暮らしや人間の命を守るために、人間の英知がつくり出したシステムが財政ですからね、絶対忘れないでください。借金が多いからといって、借金減らして、ちょっと見栄えのいい財政をつくるために、人間の命や、人間の暮らしや、人間の生活を犠牲にするなんていうことがあっていいわけは絶対ないんですよ。人間の暮らしや命を犠牲にして財政の見栄えを良くするなんていう議論はとんでもない。そんな問題ではなくて、こんなみっともない社会を次の世代の子どもたちに残そうとしているということを一番真面目に考えないといけないはずなのです。

「誰もが安心して生きていける社会」の姿とは？

そのために僕たちは何をできるか、何をやるべきなのかということを考えないといけない。誰が無駄遣いしているとか、誰が不正な受給をやっているとか、誰が仕事をさぼっているとか、そんなくだらない犯人捜しに人間の知恵を使うのではなく、どうすれば全ての人々が不安から解き放たれ、誰もが幸福に安心して生きていける社会をつくるのか。このことに知恵を使わなかったら、何のために人間に生まれてきたのかわからないじゃないですか。財政の問題ではない、社会の問題なのです。だから僕はみなさんにこれから僕の考える誰もが安心して生きていける社会の姿を示そうと思います。

今日、一番後ろに参考資料に付けています。民進党の中に尊厳ある生活保障総合調査会という、前原誠司さんをトップとする通称前原調査会というのが立ち上がって、その前原調査会の中間報告が出たのです。これは後でお暇な折にでもぜひ読んでおいてください。

この中で、この All for All という哲学と同時にみなさんに税負担を求めるという提案が盛り込まれていま

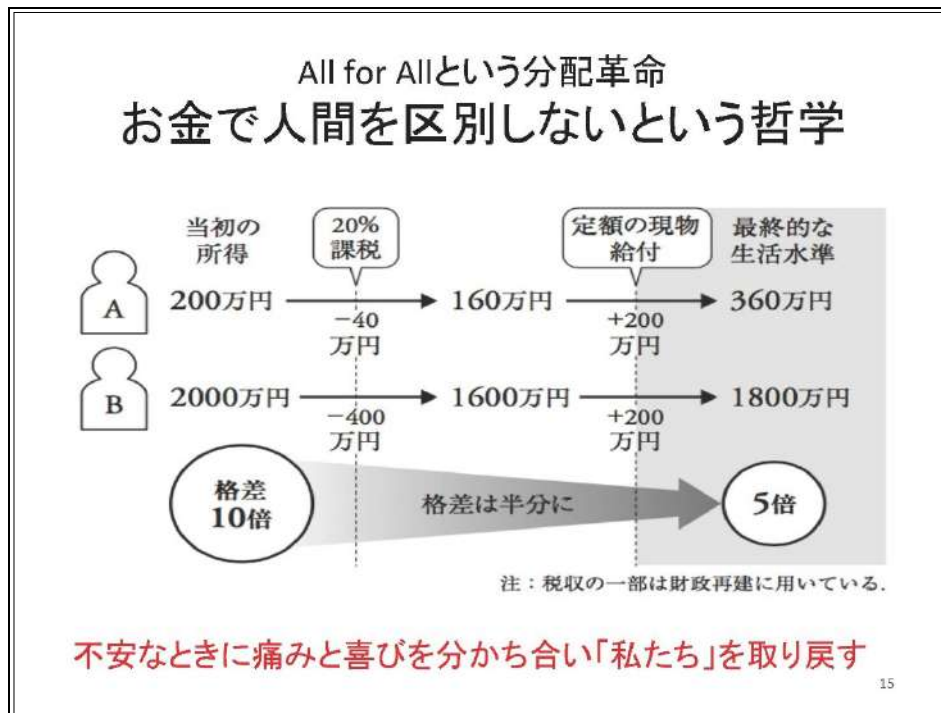
す。まずみなさんは増税と言われた瞬間にふざけんなと思うと思う。政府なんて信頼できない。何でそんなやつのために金を払わなきゃいけないんだと思うと思う。それはまた後でゆっくり話しましょう。しかしね、とうとう、おそらく戦後初めてと言っていいと思う。財源論から逃げることなく人間の幸福について考える政党が生まれようとしているという、このことだけはしっかりわかっていたいただきたいと思う。

みなさんね、政治家にとって増税という言葉は生きるか死ぬかの運命の分かれ道なのです。選挙で増税なんて言った瞬間に首取られちゃうんですよ。しかしながら、このままじゃ、もう駄目だ。何とかしないと、この社会は終わってしまう。より良い社会をつくるためにどうしても金が要る。その金を国民のみなさんにきちんとお願いするのが政治の責任だということまでやってきたのです、やっと民進党が。僕も相当苦労しました。中ですっと議論をして、それぞれの人を説得して回って、毎年毎年、僕は1万人以上、1万人以上じゃ全然きかないと思うけど、こうやって講演をして、多くの人々に話しています。今日もそうです。みなさんにあるべき社会の姿を語ります。そして、そのときに増税という言葉は絶対に落とすことができない。だから、みなさんの増税を嫌う気持ちを、今日、この瞬間に払拭する。みなさんを説得して帰る。やるか、やられるかの戦いが毎回この壇上で僕はあるわけです。その話を今からしようと思っています。

頼り合える社会をめざして～お金で人間を区別しない～

この図は、報道ステーションでも取り上げられたことがあるので、見たことがある人はいるかもしれませんね。報道ステーションに呼ばれて、座っているとね、机で、膝から下は、ここ、見えないのですよ。だから、もう何でもいいやと思ってジーパンをはいて行ったのですよね。そしたら、古舘さんも何か興奮していて、これに感動しちゃったんです。興奮して、それでは井手先生、お立ちくださいとか言って、僕、立たされて、古舘さん、しかもね、これを全部、僕、これを説明するために呼ばれたのに、全部説明しきっちゃったんですよ、1人で。さっき、ほら、NHKの話で、俺、座ってうなずいているはげおやじって言いましたけど、報道ステーションでは立ってうなずくはげおやじなのです。ずっと古舘さんの言うことを聞いているの。

さて、Aさん、Bさんが収入200万、2,000万だとします。格差10倍あります。これは別に2,000万じゃなくても、800万でも600万でも何でも構わないのです。そして、この貧しいAさんにも税金を掛けます。20%じゃなく、これも40でも50でも60でも構いません。今、AさんとBさん、格差10倍、税金20%掛けて、税引き後の収入が160と1,600、格差10倍のままですよね。今、440万円税金が入ってきたから、これは全部割っても本当はいいのだけど、数字がちょっと荒れちゃうから、40万を国の借金の返済に例えば使います。そして、今残った400万を200万円分のサービスを、医療とか教育とか介護とかね、これをAさんにもBさんにも両方にこのサービスを提供していきます。そうするとどうなるか。格差が最終的には5倍になっているということがわかりますよね。



All for All という分配革命

人間は既得権があるからムカつくわけです。「俺、こんなに大変なのに、何であいつだけもらうんだ」といって、日本人は怒っているわけです。だったら既得権をなくせばいい。みんなもらえる社会をつくれればいい。そうすれば「あいつだけがもらってけしからん」にならないでしょう。それがこのモデルです。しかも、それだけではない。誰もが受益者になるだけでなく、負担面でも誰もが傷みを分かち合う社会を目指す。みんながみんなのために助け合う社会を目指そうという提案が、この All for All に込められた意味です。

狐につままれたような気持ちになるでしょう。でもね、Aさん、40万円しか取られず200万円もらうわけでしょう。Bさん、400万円も取られて200万円しかもらえないわけでしょう。格差は縮むに決まっているのです。そうすると、頭のいいみなさんは「Bさんはじゃあ反対するじゃないですか」と言ってくる。しかし、それに対して僕はたくさん反論したいと思う。

まず、そもそもの話、今回消費税が8%に上がって「こんないいことありました」「自分の暮らし、こう変わりました」と具体的に言える人は手を挙げてください。今日はゼロかな。ほとんどいないでしょう。要するにぼったくりなのです。今の税は取られる一方で何ももらえないという状況になっているわけです。しかし、このモデルはそうではない。これからBさんは確かに税を取られるけれども、自分が病気やケガをしても、失業しても、あるいは思いのほか長生きして120歳まで生きても、安心して生きていける社会がやってくるということなのです。それがBさんにとってのメリットです。

さらにさっき言ったように、サービス給付（医療、介護、障害者福祉、子育て、教育など）を政府が提供していく。みなさん、お子さんが幼稚園や保育園に行って、そこでサービスを受けて「あ、これ、5万円分のサービスね」とはわかりません。税金は確かに取られるけど、具体的な数字として目には見えないサービスとして、例えば幼稚園や保育園が無料になっている、というモデルです。

痛みと喜びをみんなで分かち合っていくための財政

みなさん、保険に入って、絶対自分が得をするという確信はありますか。保険は取られればなしの可能性が高く、全体で見たら損していると思っているにもかかわらず入るでしょう。それと同じことです。みんなが税を払い、みんなが痛みを分かち合う。もしかしたら、自分は生涯で見たら取られるほうが多いかもしれない。しかし、安心して生きていく社会のために痛みと喜びをみんなで分かち合っていくというモデルです。財政は困った人を助けるためにあると勘違いしている人が多すぎる。

例えば、僕の子どもが大学に行くとするでしょう。僕は大学教授だから、そこそこ年収があります（ごめんなさいね、感じ悪いかもしれません）。でもね、うちは子どもが3人いて、1人目が医学部行きたいと言ったら、もうてんやわんやの大騒ぎです。子どもが私学行きたいと言ったらどうしよう、留年したらどうしよう、大学院行きたいと言ったらどうしよう（しかも博士課程に行ったら全部で9年かよ、おい）、となります。もう不安で僕だって仕方がないです。

そうした時に、僕の仲間である日本国民が、僕のために税金を払ってくれば、僕はこの教育費という不安から解放される。そして、その代わり、自分の子どもが卒業して穏やかな時間を取り戻したときに、僕は仲間と同じ苦しみに苦しんでいる人たちのために税を払うのです。そして、その仲間が苦しみから解放される。みんなにとって必要なもの、みんなが感じる不安を、みんなで傷みを分かち合いながらなくしていく、というのが財政の仕組みです。だから＜私たち＞という発想が生まれるのです。「自己責任だ。おまえのせいだ」ではなく、「あ、困っているんですか。払いますよ、私。だって、私も困ったときに助けてもらいましたから」という関係を社会全体に広げていこうと僕は言っているわけです。

はっきり言います。お金なんかで人間を区別するようなみっともない財政はもう変える。金持ちだから税を取る、貧乏だから助けてやる、施してやる。そんな財政ではもうダメだということを言いたい。しかも、それは理念的に、哲学的にどうだという話以上に、そもそも日本国民が納得せんということです。多くの人々が生活に苦しんでいる中で、「何であいつだけ助けられるんだ」という罵り合いがどれだけ醜い社会を生み出しましたか。そんな社会ではなく、誰もが安心して生きていける社会をつくろうというわけです。

運が悪いだけで不幸な目に遭うことが許せない

自分の身の上話を少ししますが、うちは福岡の久留米で母子家庭でした。僕は、おふくろが41歳のときに生まれた子どもだったけど、おふくろが僕を身ごもったときに、親友たちは泣きながら堕ろせ堕ろせと言ったらしいです。「もう無理って。あんた、生活保護もらわんと生きていけんよ」と言って、みんなが止めたそうです。だけど、うちの母は幸いにして僕を産んでくれたわけですね。僕は本当に運がいいから、3回死にかけている。1回目はそなんですよ。生まれるか、生まれないかの分かれ道が1回目あったんですよ。2回目は、おふくろが多額の借金をつくり、それを僕が、働いて全部返しましたが、返済を巡ってヤミ金融の人たちと口論になり、車で連れていかれました。

3回目は、今から6年前の2011年4月に脳内出血で倒れて、死ぬか生きるかの境目をさまよいました。こうやって障害がまったく残っていないのは本当に奇跡的なことです。今この瞬間、みなさんの前で話していること自体、本当に僕は運がいいと身に染みて感じています。だからこそ、運が悪いだけで不幸な目に遭うということが絶対に許せないのです。僕なんて運がいいだけで、今こうやってみなさんと話ができますからね。

子どものころ、うちにはおふくろの兄貴である伯父がいて、戦争中に勤労奉仕で機械に右手を巻き込まれ

て右腕がない障害者でした。だから、国とブリヂストンから障害年金をもらっていて、その一部をうちに寄付してくれていました。そしておふくろの妹である叔母がいて（いまだに独身です）、朝から晩までずっと働いて、うちにお金を入れてくれていた。だから、僕にとっての家族には、障害者もいたし、働く女性もいたし、シングルマザーもいて、そして貧困の問題も身近にあった。だけど、みんながただ一つ、僕の健やかな成長だけを願いながら、みんなが助け合いながら一生懸命生きてくれたのです。

だから、僕は自分が生きてきた家族——家族っていろいろあるから、単に家族って素晴らしいと言いたいわけではないのだけど——は本当にいい家族だったので、この社会も、僕の家族のような社会になるといいと思っています。たとえ障害があろう、たとえシングルマザーであろうと、貧しかろうと、働く女性であろうと、みんながお互い助け合いながら、何か一つの思いを分かち合いながら、みんなが生きていく社会がいいとやはり思うのです。

助けられることで心に屈辱が刻み込まれるかもしれない

ただ、そのときに僕はみんながお金をくれているのを知らなかったから不思議で仕方なかった。いつも母ちゃんは僕のそばにおってくれて、なのにうちはお金がある。不思議でしょうがない。でも小学校3年生のときに、僕は初めて生活保護という仕組みを知って、「ああ、これだ。だからうちには金があるんだ」と思いました。そこで、学校から帰ってきて、ガラガラガラッと扉を開けて、ランドセルをぽんとその畳のところに投げて、「お母さん、お母さん、うち、生活保護もらいよっちゃろ」と大きい声で言ったんですよ。そして、おふくろが血相変えて飛び出してきて「何ば言いよっとね」と。

今思うと、あれは僕に言ったのではなく、絶対ご近所さんに聞こえるように言っていたのだと思います。「そげんか恥ずかしかもんはうちは一銭ももろうとらん。そんなもんもろとったら、あんたが恥かこうが。絶対そげんかこと人様に言いなさんな」と、ものすごく怒り狂ったんですよ。僕は怖くて、わかんなくて、何でこんなに怒られなきゃいけないんだろうと思って「ごめんなさい、ごめんなさい」って泣きましたけどね。もう忘れもしない光景です。

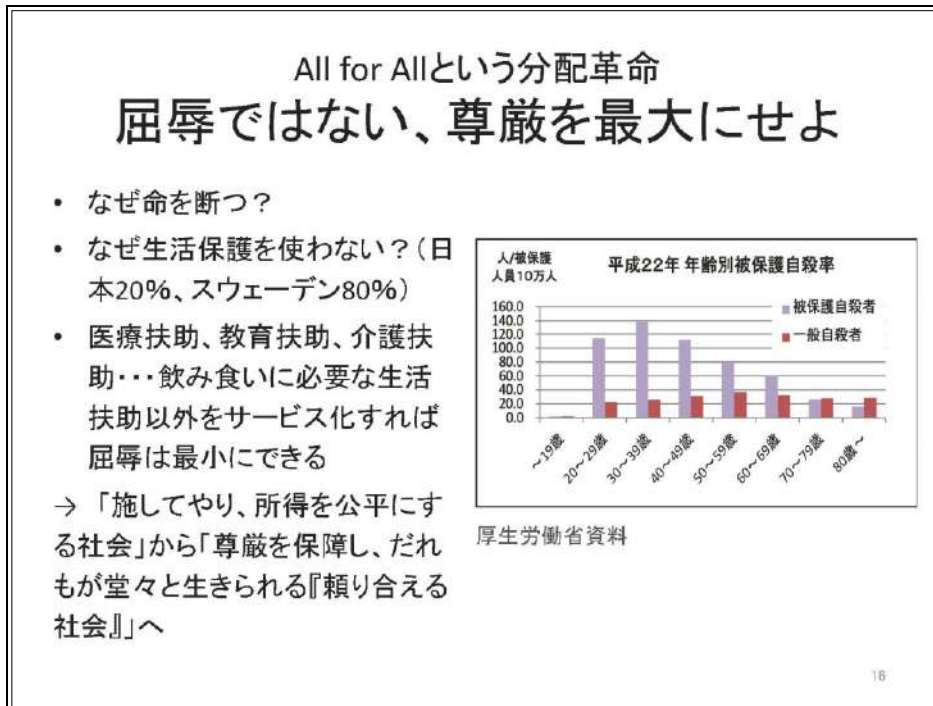
だけど、そのときのことが僕の頭からこびりついて離れないわけですよ。どういうことかということ、人間を助けることを悪いことって言う人はいないですよ。人を助けるのはいいことです。でもね、助けられる人間の心には屈辱が刻み込まれるかもしれないということです。このことは、誰かを助けることがどんなにいいことだったとしても、必ず一步引いて考えておかないといけない問題だと、自分の経験からして思う。

その後、叔父に子どもができて途中からうちに仕送りができなくなって、おふくろはスナックを始めました。僕は小学校4年生ぐらいから、ずっとスナックのカウンターで勉強していましたね。そのときにね、ホステスさんが酔っぱらった客の相手をしている。酔っ払った男なんか、さもない痴漢みたいなもんで、お姉ちゃんのケツとか、触っているわけですよ。でも女の子はキャッキヤと楽しそうにはしゃいでいる。カウンターで勉強しながら見ていましたが、その酔っ払いがトイレに行こうとして席を立った瞬間に、まったく別人の表情になった、あのホステスさんの顔を僕は今でも忘れられない。

そういう思いを抱えながら、ああ、あの人たちは働いているんだなと感じとった。そうすると、うまく言えないけど、何か物事すべてがそうしたのに見えてくる。生活保護で人を助けるって、これはいいことだよ。ホステスの人たちが自立して高いお金を稼いで、男の人たちと楽しそうにお酒を飲んで、これはいいことだよ。でも、全然そこに真実はないんだな。うまく言えないんですけど。

なぜ恥ずかしい領域に追い立てないといけないのか

僕はだから、何かそういう思いをしなくていい社会がいいなと、ずっと思ってきたのです。このグラフは、左の線が生活保護を利用している人の自殺率で、右の線は生活保護を利用していない人の自殺率です。もし人間を助けることがいいことだったら、何で生活保護を利用する人は自殺するのでしょうか。あるいは、秋田や山形に行くと「人様のご厄介になるのは申し訳ない」「生活保護をもらうぐらいだったら」といってお年寄りですんでしまう人はたくさんいます。あるいは、生活保護を使う権利はあって使っているのに、日本人では15～6%の人しか生活保護を使わない。それに対して北欧では8割の人が使う。



なぜか。恥ずかしいからでしょう。では、なぜ人間をそんなに恥ずかしい領域に追い立てていけないのかと、僕たちは考えた方がいい。「生活保護を増やせ」「足りない、もっと上げろ」というのも一つの考え方として正しいです。でも、それはやはり成長志向がベースとなっていて、その人の収入を増やすことがいいことだと思っている。そうではない。もし、みなさんが税を払って、安い値段で医療をみんなが受けられるようになったら、今3割となっている自己負担をどんどん低くすることができたら、生活保護の中の医療扶助はなくなります。だって、生活保護の4割以上を占めるのが医療扶助です。つまり貧しい人が病院に行くときの生活保護です。みんなが税金を払って、みんなが医療を受けられる社会をつくっていけば、この4割は一瞬でなくなります。

教育も介護も住宅など人間が生きていくために必要なものは同じです。どういうことか。この中で、生まれたときに1カ月ほったらかしにされて生き延びた人はいますか。この中で一生病気をしないと云える人がいますか。この中で自分は一生、教育も介護も必要ない、あるいは障害者になる確率も絶対にないと断言できる人がいますか。いない。だったら、みんながその必要があるのであれば、みんなに提供していいじゃないですか。そして、そのためにみんなが痛みを分かち合う。

人々の生活を保障していくことで頼り合える社会を

そうすると、この屈辱を感じながら、誰かに施してもらい助けてもらう領域をなくしていくことができる

んですよ。最後に残るのは飲み食いに必要な生活扶助の部分、この部分は、僕の言葉で言うとディーセント・ミニマム、品位ある最低保障、品のある最低保障を絶対にしてもらわないといけない。

なぜならば、この貧しい、働くことのできない、あるいは年老いた人々にとっての最後の自由は、このお金を自分で使いたいように使うという、その自由だけなんです。この自由を人間から奪うということが僕には信じられない。酒を飲んだって、ギャンブルしたっていいじゃないですか。食べたいものを我慢して、そのお金を酒に使う、何がいけないんですか。最後の人間の自由じゃないですか。どんなに貧しくても、たとえどんなに働く力がなかったとしても、その最後の自由は絶対に守ってあげないといけない。

だからこそ、生活扶助の部分だけは何があっても最低限度じゃいかんのです。品位ある最低保障をしないといけないのです。しかし、それ以外の部分は、僕は全部サービスに置き換えていくべきだと思っています。誰もが恥ずかしい思いをしなくていい社会をつくる。施してやって、金を公平にして、格差を小さくして、いい社会だね。冗談じゃない。誰もが病気になるのが、教育が必要になるのが、介護が必要になるのが、年取とも年齢とも性別とも関係なく、誰もが堂々と生きていける社会を目指すべきだ。金を保障するんじゃない。人間の尊厳を保障する社会を目指していくべきだ。そのためには、金をやるんじゃない。助けてやるんじゃない。あらゆる人々の生活を保障していく。そのことが僕にとっては大事だと思う。これが僕の頼り合える社会という言葉に込めている意味です。みんなが頼り合っている社会。それは全ての人々が不安を抱えるときに安心できる社会だということです。

増税で自己負担分を軽減するための一つのモデル

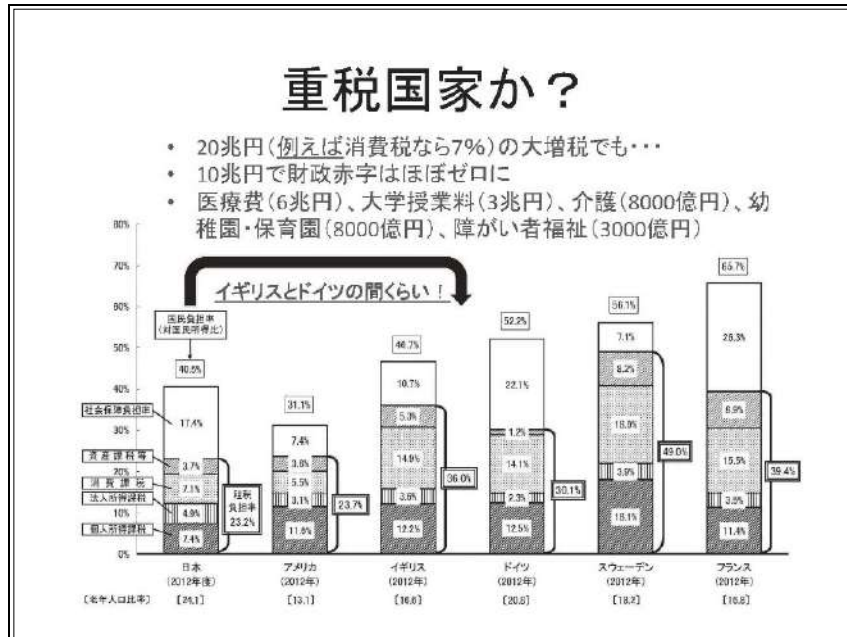
そうすると、みなさんは、何となくわかってきた。井手さん、要するに税金みんなにかけて、そのお金でみんなの生活を保障していく、そういうことね。でも大增税でしょう。どんだけ金かかるの。スウェーデンみたいになっちゃうの、という話が次に来るんですよ。

だから、ここでみなさんに一つのモデルをお示しします。提案します。これは国民が決めることで、みなさんが決めることだから、正しい答えはない。ただ、僕はこういうふうな社会がやってきますよということをみなさんにお示しします。もしみなさん、消費税が、これも例えばですよ、消費税じゃなくてもいいんですからね。例えば消費税を7%上げるとしたらどうですか。大增税ですよ。消費税15%。ぞっとしますか。高すぎだと怒りますか。でもね、国民負担率、つまり税の負担率を見たときに、フランスほどの重税国家になるかって、なりません。スウェーデンのような重税国家になるかといったらなりません。ヨーロッパの中で平均的な大きさのドイツぐらいの税負担になるかといったらなりません。ヨーロッパの中で、小さな政府であるイギリスと、平均的な大きさであるドイツの間ぐらいの負担になります。

要するに今の日本は税金は安すぎるのです。もし重税国家なのという意地悪な質問をみなさんが僕になさりたいのであれば、ヨーロッパの中の平均以下の大きさという意味で軽負担国家じゃありませんかと答えます。しかしながら、じゃあ、その7%の消費税、7%のお金でどれぐらい税金が入るか。20兆円入る。20兆あったら、何ができるか。もし半分を、これもみなさんの好みですよ。半分使わなくてもいいですよ。でも、もし半분을財政赤字の解消に使えば、いわゆるプライマリーバランス、毎年毎年赤字部分を黒字にすることができ。ですから、少なくとも日本の財政が危ない、危ないと不安におびえることはもうなくなる。

そして、それでもまだ10兆円残る。みなさんにしてみれば、え？ もう10兆円しかないのという感じかもしれないけど、でもね、医療でみなさん、これは全部自己負担。みなさん、病院に行くときに自己負担しますね。2割、3割払いますね。その自己負担が今6兆円。子どもが大学に行ったときの授業料の自己負担が3

兆円。介護のみなさん、自己負担が8,000 億円。幼稚園、保育園のみなさんの自己負担が8,000 億円。そして障害者自立支援法以降の負担が発生した障害者福祉の自己負担分が約 3,000 億円。これを全部足してください。10.9 兆円。



もちろんこれをただにすることはできません。なぜならば、ただにしまうと、みんなが使うようになるから、要するに今まで使っていなかった人もみんな一斉に使い始めるから、ものすごいコストが膨らんでいきます。しかしながら、それでもなお 10 兆円のお金で 10.9 兆円分の自己負担のところに使うことができれば、みなさんの自己負担は驚くほど軽くなります。驚くほど軽くなります。わかりますか。自分がけがをしようと、病気をしようと、何歳まで生きようと、介護が必要になろうと、子どもが何人いようと、みなさん、病気も教育も介護も子育ても障害者福祉も心配しないでいい社会がぐっと近づいてくる。

税によって個人の貯蓄を社会の貯蓄に変えている

そして、財政だって今までみたいなみつともない財政ではなくなる。そのお金がこの 100 円のジュースが 107 円になるということの意味なのです。確かに 7 円分、税金は上がります。しかしながら、みなさんが今まで払っていたさまざまな自己負担がなくなっていくということなのです。これが税なのです。

よろしいですか。みなさんには、今日必ずこのことを理解して帰っていただきたいと思う。みなさんはものすごい勘違いをしている。どういう勘違いをしているかというと、まず、みなさんは税金を嫌がる。嫌がりますよね。DM な人、います？ 税払うの大好きという人、いますか。普通は嫌がる。なぜかという、収入が減って欲しいものが買えなくなるから。そういうことでしょう。

でもね、それは間違っている。僕らが目指す社会では、確かに税を取ります。だから収入が減り、消費に回せる部分が減っています。これをみなさん、嫌だとおっしゃる。そういうことですよ。でもね、この税は何に使うかというと、子育てであれ、教育であれ、医療であれ、介護であれ、さまざまなサービスのために使っているわけでしょう。もし、じゃあみなさんが税金を取られなかったら、どうなりますか。確かに税金を取られなければ、一見、この上の部分、全部消費に回せるように見えるかもしれない。しかし、違うでしょう。もうおわかりでしょう。この暮らしていくため、生きていくためのニーズのためにみなさんは自己責任で貯金

しているのですって。ということは、この下ろせない貯金の部分を引いたら、消費できる部分、変わらないじゃないですか。わかりますか。税というのは要するに個人の貯蓄を社会の貯蓄に変えているだけなのですって。

過剰貯蓄が招く非効率なお金の使われ方

しかも、それだけじゃない。みなさん、個人個人で貯金すると、何歳まで生きるかわからないでしょう。だから絶対に過剰貯蓄になる。100 まで生きたらどうしよう、90 まで生きたらどうしようと思って貯金するから、必ず過剰貯蓄になる。だから、必ず実は現実には必要以上に貯蓄をして消費が減っているのですって。

ところが政府がやるときには、50 で死ぬ人がいて、100 で死ぬ人がいて、じゃあ、間で 75 でいいねと計算すればいいだけだから。みんなでやるときには平均値でやればいいから。だから必要最小限の税だけ取ればよいことができるわけです。個人では絶対無理です。何歳で死ぬかわからないから。だから、必ず過剰貯蓄になって消費が小さくなる。

しかも、それだけじゃない。昔はみなさんが貯金していたお金で何をやってたか。銀行は企業にお金を貸して、企業は設備投資をして、景気がどんどんどんどん良くなって、所得が増えて、みなさんの貯金が増えていたのです。でしょう。ある程度の年齢の人はわかると思う。ところが、今は企業の借金がガタガタに減っているのですよ。そうすると、銀行はお金を貸すところがないじゃないですか。どこに貸すって、国の国債買っている。ばっかみたい。そのおかげで毎年 10 兆円近い利払い費が発生しています。そうすると、おそらく、これはちゃんと見たことがないけど、5、6 兆円ぐらい銀行に流れているでしょう。おかしくないですか。みなさん、金利をもらっていますか。もらっていないでしょう。なのに 5、6 兆といたら、消費税で 2% 近いお金、2% 近いお金が利払い費として銀行に行っている。ばかじゃないですか。こんなばかげた話、ありますか。

そうじゃないんですよ。この利払い費もなくなる。おまけに残ったお金は好きなだけ使ってもらって構わない。そして税で払って、これで子育て、教育、医療、介護を政府は必ず雇用を生んでサービスを提供してくれる。必ず経済が良くなる。しかも、さっき言ったように、格差は小さくなるから、お金を使いたくしてしょうがない貧しい人たちに現実にお金が流れる。だから、もっと消費が刺激される。

税金は、負担を軽くするためのもの

みなさん、いいですか。はっきり言います。税金というのは、負担を軽くするためにあるんです。みなさんは税を負担だと勘違いしている。違う。税というのはむしろみなさんが今まで自己負担していたものをなくすのと同時に、雇用を生み、消費を刺激し、そしてみなさんが安心して生きていける社会のための存在なのであって、トータルで見ると、税は負担を軽くするためのものなんです。

ヨーロッパ人ってばかですか。ばかですかって失礼ですけど。ヨーロッパの国々ほどの国を見ても日本より税金は高いんですよ。みなさんが思っているほど税が嫌なものだったら、ヨーロッパ人はばかとしか思えないじゃないですか。違うでしょう。そっちのほう消費も刺激され、景気も支えられ、そして将来の不安から人間が解き放たれるからみんな税を払っているだけです。当たり前ですよ。

このことに日本人は気付いていない。すぐに消費税を上げたら景気が悪くなるからと言うでしょう。確かに 2014 年、消費税を上げたときにマイナス 0.5% 成長、景気は悪くなった。ほら見ろ、先生、駄目じゃないですか。景気が悪くなるじゃないですか。違うって。その前の成長率を見ろよ。2013 年の成長率を見ろよ。

2.6%成長、かつてない高成長ですよ。足して2で割ってくださいよ。1%成長じゃないですか。税ってそういうことなんですって。確かに取ったときには一瞬消費が控えられるように見える。でも何でかという、税が上がる前にみんな買っているからですよ。それだけの話です。

税をいったい何のために使うかを徹底的に監視する

結局は個人個人で将来不安におびえながらためている貯金を、税を通じた社会の貯蓄に変え、私たちが私たちのために使っていく、このことが大事。そうすると、みなさん、発想が変わる。増税反対ではない。大切なことは、取った税をいったい何のために使うかということをもみなさんたちは徹底的に監視しないといけないということなのです。税は駄目だと逆らうということは、逆らえば逆らうほど、みなさん1人1人が将来不安に包まれていくということです。そうじゃない。取られることが悪いのじゃない。この5%、今回5%上げる予定でした。そのうちの4%は国の借金の返済です。たった1%が社会保障の充実。そしてその1%の大部分は貧困対策。だからみなさんには来ない。取られっぱなしの5%。だから税が嫌なのでしょう。

でもね、税が悪いんじゃないですよ。その取った5%の8割を借金返済に使い、そして残り2割を低所得層にしか使わなかったこの増税の仕方が、使い道が悪いのです。そしてみなさんにはっきり言う。その使い道をチェックしなかったのはあなたたちですよ。政府は全部この情報をオープンにして議論していますから。それをチェックせず、監視せず、反対の声を上げなかったみなさんの責任だということです。政府が信頼できないからではない。政治家が無能だからではない。みなさんがチェックしないから、監視しないから、こんなばかみみたいなことが起きる。

いいですか、みなさん。もうあと2年後に消費税を10%に上げるという話がやってくるのですよ。この2%を何に使うのかということ徹底的に私たちは監視しないといけない。2%取られると景気が悪くなるから嫌だ。欲しいものを買えなくなるから嫌だ。それがいかに間違った考えであるかということは、今日この瞬間にわかっていたいただきたいなと思っています。

みんなの暮らしを保障しても格差は小さくなる

最後に、僕が申し上げている社会がどんな社会になるか、簡単なデータでお示しします。いいですか。横軸を見てください。現物給付の規模の変化。つまり、さっき言ったサービス、医療とか、介護とか、教育とか、子育てとか、さまざまなサービスの規模をどんどんどんどん大きくします。要するにみんながもらえるようになっているということです。明確な右上がりの関係がある。何が増えているか。所得格差の縮小効果です。

要するに、みんなに配っていけば配っていくほど格差が小さくなることは、これは実は常識なのです。すぐ僕たちは貧乏な人にだけあげればいい。え？ 金持ちにもあげるの？と思っちゃうでしょう。みんなに配っても格差は小さくなるんですって。わかりやすい例で言いましょうか。じゃあ、1億円の収入の人に、金持ちに100万円分の医療サービスを出してください。1%の意味しかないでしょう。年収100万円の貧しい人に100万円分の医療サービスを出してあげてください。100%の効果があるから。同じサービスを出しても、貧しい人と豊かな人では、貧しい人のほうが絶対得する。それが統計的にも表れている。でも、みなさんね、そのことに日本人は気付いていない。みんなが受益者になっても、みんなの暮らしを保障しても格差は小さくなるということを日本人は気付いていないのです。これがAll for Allの本質なのです。

でも、みなさん、勘違いしないでください。かわいそうな人を助けるためにやっているんじゃない。人間の尊厳ある生活を保障していけば、結果的に貧しい人も助けられているだけの話です。あくまでも結果に過ぎ

ない。

格差がいけない理由は、子どもが学ぶ機会がなくなるから

今、格差が小さくなることを言いました。ジニ係数といいます。左側に行くと格差が小さい。右に行くと格差が大きい。格差がどんどんどんどん大きくなる。どうなっていますか。右下がりの関係。格差が広がれば広がるほど、1人当たりの GDP 成長率が落ちていくのです。

2014 年、印象的だったのが、IMF と OECD が同時に非常に影響力のあるレポートを出しました。その中で共通して言われていたのは、格差が成長率を落とすということです。でも、そうすると、じゃあ貧しい人にお金をあげれば経済が成長するのね、みたいな話になっちゃうじゃないですか。全然違う。一番の問題は、実は子どもの貧困なのです。子どもの幼稚園、保育園の教育の機会が決定的に重要であるというのがその答えなのです。格差がいけない理由は、子どもが学ぶ機会がなくなるからいけないと言っているのです。

子どもの教育、なぜ大事か。今、みんな大学授業料無償化と言うけどね、大事なのは幼稚園、保育園なのですよ。しかもね、無償化じゃなくて、質の充実が本当は一番大事なのですよ。本当はね。

幼稚園、保育園のサービスを提供すると何が起きるか。まずね、子どものときに頑張って大人から褒められた成功体験を持つ子どもたちは、大きくなって、高校、大学で退学しなくなるのです。踏ん張るのです。頑張って褒められるという経験するってものすごく重要なのです。もしお子さん、お孫さんいらしたら、ぜひ覚えておいてください。そして、これは統計があるのですが犯罪発生率は下がります。そのことで刑務所や警察のためのコストが安くなるのです。

しかも、生活保護利用者ではなく、むしろ高校、大学をドロップアウトせず踏ん張っていくと、非正規雇用でもなく、質の高い労働に就いていくのです。そうすると、そのことが経済成長の源泉になるのです。そして、子どもたちが皆、学びの場に出て行けるようになったときに、力のある、才能のある女性のお母さんたちが労働市場に出て行けるようになるからこそ経済が成長していくのです。だから、格差が小さくなれば経済が成長する。一番大事なのは、あくまでも子どもの教育です。

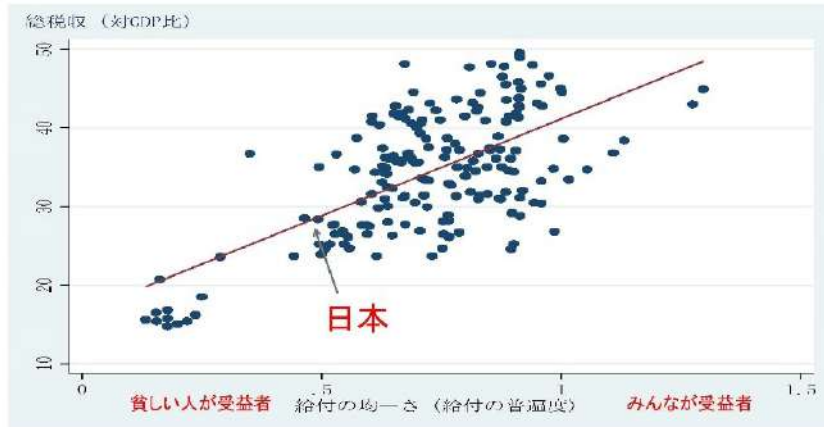
成長のために子どもに投資するのではない～結果的に経済が成長していく～

でも、このことで二つ言いたいことがあります。一つは、あくまでもこれは成長が目的ではなくて、人間の暮らし、子どもの教育を保障していけば、結果的に成長するというだけの話です。ここは間違えないでほしい。

それと、もう一つは、今、政党の議論の中で子どもに投資をすれば成長するみたいなことを平気で言う人たちが多すぎる。成長というのは金儲けですからね。子どもを金儲けの道具にするというのは言語道断の発想です。子ども保険とか言われていますが、保険ってリスクヘッジでしょう。いつ、どの瞬間から子どもがリスクになったのですか。根本的に思想的に間違っている。そうではない。我々は子どもの健やかな成長を願い、あらゆる子どもの教育の機会を保障していこうと言っているだけです。そうすれば結果的に経済が成長していくだけです。成長のために子どもに投資するのではない。

そして、貧しい人にだけお金を出している社会はどんな社会か。図で言えば日本はここですが、税金が取れない社会になっている。さっき言ったでしょう。貧しい人だけを助ける社会は中間層や富裕層が納税に反対するのです。嫌がるのです。だから税が取れない。しかしながら、みんなが受益者になる社会、みんながもらえる社会では、自分の暮らしが楽になるためにといってみんなが税を払うから、税収が上がる。

結果的に財政を再建



井手・古市・宮崎「分断社会を終わらせる」筑摩書房、より。

21

みなさん、もし本気で財政を再建したいのであれば、それは支出を削るだけでは無理です。95年に財政危機宣言を出して、20年以上、必死に支出を削っているけれど、借金は増える一方じゃないですか。借金をもし本当に減らしたいのなら増税以外に道はない。断言します。しかし、増税をしたいのであれば、支出を削っては駄目だ。みんなが必要としているものをみんなに出していかない限り。むしろ支出を増やさないと、税収は増えません。そのことを日本の経験は示しています。しかし、これも勘違いしないでください。あくまでも結果として経済が成長するというだけです。

経済を成長させるために小さな政府をという証拠はどこにもない

最後に、要するに僕たちの本当の目的は何かというと、未来の不安をなくすることだということです。いいですか、みなさん。何で成長がこんなに大事なのですか。何でこんなにお金が大変なのですか。何でこんなに貯金が大変なのですか。未来の不安から自由になりたいからでしょう。目的は不安を解き放つことなのです。だったら、経済は手段に過ぎない。僕たちはもう成長はしないと考えている。であれば、成長とは違う方法でみなさんの不安を解き放てばいい。

では、どうすればいい。それが個人の貯蓄を社会の貯蓄に変えながら、みんなが安心して生きていける社会をつくるという提案なのです。貧しい人を助けるという発想から、あらゆる人々を不安から解き放つという発想に正義の基準をひっくり返す。人間の全ての人々の尊厳ある暮らしを保障し、誰も後ろめたい、誰も特別扱いされない、誰も恥ずかしい思いをすることのない社会をつくり上げていけば、今よりも力強い経済が、今よりも小さな格差が、今よりも頑健で健全な財政が実現できるということを今日お話ししたわけです。

新自由主義の人たちはこう言います。既得権が気に入らない。政府の裁量が気に入らない。政府の非効率性が気に入らない。小さな政府にして、経済成長だと言ってきたじゃないですか。でたらめですよ。経済を成長させるために政府を小さくしなければいけない。そのような証拠はどこにもない。しかも、その支出を削るために、政府をたたき政府の役人をぼろくそに言って、誰が無駄遣いをしているのか、誰が不正

な受給をしているかを暴き立て、その犯人を袋だたきにするようなことを 20 年以上やってきている。

成長のみを支えにするのではなく、新しい希望の灯をともし社会を

私たちは違う。あらゆる人間の幸せを考える。痛みと喜びを分かち合う。どうなるか。既得権者のいない社会がやってくる。みんなが受益者ですから。既得権者なんていない。私たちのモデル以上に行政の裁量性が小さくなることはない。なぜならば、所得制限をなくしていこうと言っているわけです。みんなが受益者になるということです。所得審査が要らなくなる。行政はものすごく効率的になりますよ。行政はものすごく裁量を失いますよ。だって、機械的にサービスを出していくだけですから。

新自由主義の人たちが言ってきたことをそっくり逆手に取りながら、私たちは犯人捜しではなく、人間の幸福を考える中で、痛みと喜びの分かち合いを考える中で、新自由主義の人たちが言ってきたことを全て実現する。しかし、そのためには、僕の関わる民進党のみなさんには、受益の全くない増税をやったことへの徹底的な反省、マニフェストに書かなかった増税をやったことに対する徹底的な自己批判をやってもらわないといけない。その先に、次は必ず、この増税をみなさんの暮らしのためにこのように使いますという具体的な提案をすべきだ。そしてみなさんは本当に民進党がそのような増税をやり、そのような支出を、みなさんの暮らしのための支出をやっているのかどうかをみなさんにはどうぞ徹底的に監視をしていただきたいと思っています。

格差を憎む社会ではない。僕らはあらゆる人々の幸福を考え、結果的に格差を縮める。しかしながら、公正な社会、誰もがどんな家庭に生まれようと安心して生きていける社会ができてしまえば、みんなが競争に参加できる社会がやってくれば、その結果、生じる格差は仕方のない格差なのです。勝者が敗者のことをきちんとおもんばかり、敗者が勝者に対して惜しみない賞賛の拍手を送れるような社会を僕は目指したい。格差をゼロにしろというなら、それは共産社会、共産主義しかない。僕らは違う。常に存在する格差に対して人々が寛容でいられるような社会を目指したいと思う。それが、本当の意味で分断をなくしていく唯一の道ではないのかと思っています。

どうか私たちは、家族のようにみんながみんなと苦楽を分かち合いながら、そして、成長のみを心の支えにするのではない、新しい希望の灯をともしような社会を目指そうじゃありませんかということを申し上げたかったわけです。これで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございます。

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

名里晴美（社会福祉法人訪問の家理事長）

はじめに

多くの人たちの関心のもとにつくられた障害者施設

ここをくみ取りながら地域の人たちと交流を

学校との日常的な交流が、障害を持つ人たちを受け入れる土壌を耕す

温かく見守ってくれる地域の人たち

頼りにしてくれる地域の人たち

グループホームで家族のように暮らす

たくさんの人の輪の中で

名里 晴美（なり・はるみ） 社会福祉法人訪問の家理事長

社会福祉法人訪問の家は、法人設立以来 30 年を迎える。重症心身障害者といわれる重い障害のある人たちの通所施設が、まだ法律にない時代に、学校卒業後も通える場、集える場として、最初の施設「朋」を開設。横浜市栄区を中心に、磯子区・旭区においても障害者施設や障害者グループホーム、高齢者デイサービス事業等を展開し、現在 27 の事業所を運営。

朋開設当時の「目の前の人々が望んでいるであろうことを実現させよう」や「文化施設としての社会福祉施設」（創設者・日浦美智江の言葉）という精神は、今の訪問の家の理念である「一人ひとりを大事に」や「誰もが暮らしやすい社会づくり」につながっている。



パネルディスカッション／パネリスト報告①

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

報告者／社会福祉法人訪問の家理事長 名里晴美

はじめに

横浜市栄区に法人本部がある社会福祉法人訪問の家です。本日は、その実践を主にお話しさせていただこうと思います。今回は障害福祉だけにとどまらない大きなテーマが設定されている、このような場でお話しさせていただく機会をいただき、本当にありがたいなと思っており、私自身も勉強して帰るつもりでおります。

昨年 7 月 26 日の相模原のやまゆり園での事件のことは、本当に私たちにとっては言葉にしようもないほどの衝撃的なことでした。あの事件の後に、私どもの法人にテレビや新聞社などさまざまな取材の依頼が来るようになっていきます。その中で神奈川新聞からも依頼があり、昨年 12 月 6・7 日の記事にて大変よくまとめていただいております。

多くの人たちの関心のもとにつくられた障害者施設

これが私どもの法人として最初の施設である「朋（とも）」です。重症心身障害者といわれる大変重い障害の方の通所施設です。施設ができたのは昭和 61（1986）年で、場所は横浜市栄区桂台ですが、そのさらに 10 年ほど前に、山だったところを高級住宅街に造成した地域です。

当初、施設ができるときに地域の反対がありました。横浜の田園調布とも言われる高級住宅街に、文化施設ならいざ知らず、障害者施設はなじまないということで反対に遭いました。ただ住民の中には、自分たちが住んでいるまちにどういう人たちが何を求めて来たいと思っているのか、よく知りもしないで反対しているのかと思ってくださった人たちもあり、結果的には反対と言っていた人も受け入れていただき開設に至っています。後年になって意味があったなとしみじみ思うこととしては、当時、何だか知らないうちにいつの間にか施設ができていたというのではなく、本当に多くの人たちが関心を持ってくださって、その関心の下で施設ができたことが大事だったのではないかなと思っています。

こころをくみ取りながら地域の人たちと交流を

重症心身障害の方は、知的にも身体的にも重い障害があり、胃瘻をされていたり、あるいは気管切開をされて人工呼吸器が付いているなどで、ほとんどの方が医療的なケアを必要とします。また言葉でのコミュニケーションは、お一人を除いて、今どなたもお話することはできません。

私たちが新卒で法人に就職したときに、この人たちは笑ったり泣いたりするのかなと疑問に思うくらいに、最初会ったときには表情はわからなかったのですが、お付き合いしていくうちに、こういうときはうれしいんだとか、あ、今うれしかったんだなということがだんだんわかるようになってきました。そして、好きそうなもの、何かやりたそうにしているものを取り入れた活動をしようということで、現在は、ハーブを作

ったり、クッキーを作ったり、また近所を空き缶回収で回ったり、あるいはお買い物に行ったりしています。

このような活動を通して、職員や家族とのやりとりだけでなく、地域の人と実際に触れ合い、交流しようと取り組んでまいりました。ハーブを作ってハーブソルトにして売っていたり、クッキーも作って、最初は学童保育へ、子どもたちに食べてくださいと持って行ったのですが「お金を払います」と言っていたいて、それ以来、ずっと食べていただいています。このように、地域の人たちと交流しています。

学校との日常的な交流が、障害を持つ人たちを受け入れる土壌を耕す

「朋」には、小学校、中学校、保育園が隣接しており、桂台小学校とは1年生から6年生まで交流の機会をもっています。1年生とは近くの特別養護老人ホームとともに交流し、2年生は、私どもの法人が運営しているケアプラザのデイサービスを利用しているお年寄りと交流します。そして3・4年生が「朋」と交流して、5・6年生が「朋」の隣にある、同じく障害の方の通所施設「径（みち）」と交流します。

それも年に1回、交流会をやりますというのではなく、年中施設に来ます。1年がかりで、劇をやりましょうというもあるので、そうすると、年度末に発表会をして、お母さんたちなども来てくれたりしています。それからまた、「朋」の人たちがボウリングのゲームをできるように、ちょっとした力でも転がっていくようなグッズの制作を小学生にお願いをして——グッズを作るのはあなたとあなたとあなたね、というように決めて——学校でいろいろ試行錯誤しながら段ボールなどで作ってくれたものを試してみたりということで交流しています。

このような交流を30年続けているので、その間、ざっと数えても2,000人近い子どもたちが卒業していき、中にはうちの職員になっている人も何人かいます。聞いてみると、障害の重い人が地域にいるのは普通のことだったと言ってきており、そういう子どもたちが育ってくれているのはとてもうれしく思っています。



温かく見守ってくれる地域の人たち

法人設立以来30年間、地域の方とお付き合いしていますが地域の運動会にも参加しています。パン食い競争では、職員が車イスを押していますが、さーっと行ってパンをくわえてしまうとすぐ終わってしまうのでもう工夫して、目が見えない方の場合には、パンの袋を一緒に触ってカシャカシャという感触も感じながらパンを選んでいきます。また法人で開催する成人式の餅つきには、かれこれ30年、地域の人たちが餅つきに来てくれています。餅つきでは職員と一緒に利用者の方も餅つきをしていますが、そうした様子（職員が「行くよ」と声をかけた後、ニヤッとしていました）を見て、本人がどういうふう楽し



んでいるのか職員も一生懸命受け止めようとするし、そうやって一緒に感じようとしていることをひっくり返して地域の人たちも見守ってくださっているのかなと思っています。

また栄区の区民祭りでは、地域のいろいろなサークルの人たちが出ているパレードに、「朋」の人も出ませんかと誘っていただいて参加しています。みのりバンドというグループで、神奈川新聞にも紹介いただいたのですが、自分一人で何か楽器ができるとか、歌がうたえる人はいないのですが、ギターをちょっと、弦をポロンポロンとできる人とか、マラカスを持ったら、のってきたらカシャカシャやる人とか、ボーカルとして声を出す人などがいます。そういう人たちでパレードをして、沿道の人たちも温かく見守ってくれています。

みんな、最初からニコニコして音楽にのっているわけではなく、だんだんのってくる感じです。職員は、この人たちがこの場を何かしら感じているはずだ、味わっているはずだ、さあ声が出てくるはずだということを感じて疑わずに一緒にやっているのです。新聞にも紹介された、ボーカルを担当した彼はずっと声が出ていました。彼には1年目の新人の職員が一緒についていましたが、終わった後に、この職員は仮面を取ったらぼろぼろ泣いていましたね。地域の人たちは、そうした職員を含めたみんなの様子を見てくださっているのだと思います。



頼りにしてくれる地域の人たち

「朋」から出た「朋第2」というグループでは空き缶回収をしています。桂台というまち自体が昼間はお年寄りばかりになってきているということもあって、その姿を見た地域の人たちが、昼間にこうした空き缶回収でまちを歩くことは防犯にもつながるのではないかと伝えてくれました。そこで、防犯協会に行き腕章をもらって、自分たちでベストやのぼりも作り防犯パトロールも兼ねながら空き缶回収をしています。いつも応援してもらいばかり、助けてもらいばかり、ということが多いけれども、地域の人たち、地域のためにできることがあることを、地域の人たちから教えていただいたのはとてもうれしいことでした。

また、その後には地域の消費生活推進委員さんから、一軒一軒のお宅にピンポンと押して、出てきた方に、オレオレ詐欺、気を付けてくださいという注意を喚起するチラシを渡す仕事があるので、それを「朋」の人たちにやってくれませんかというお話をいただきました。普通に考えたら、ピンポンって誰かが来て、それが障害を持つ人だったら、ちょっと嫌だなと思う人がいてもおかしくないと思います。でもこの地域の人たちは、そうしたことは思わないんだなというのが本当にすごいことだと思いました。障害の人でも何かできることがあるのではないかとということで、こうした活動にも取り組んでいる次第です。



グループホームで家族のように暮らす

私たちの法人では、神奈川新聞の記事でも紹介いただいておりますがグループホームも運営しており、4人の方たちで暮らしています。ほぼ全介助の人たちで言葉でのやりとりも難しいのですが、ヘルパーさんが一軒のグループホームで14、5人の方が交代で入ります。もちろん職員もおりますがヘルパーさんだけ泊まる日もあります。現在、13カ所ほどのグループホームを持っており100人以上のヘルパーさんに入ってもらっています。ヘルパーさんには、福祉の勉強あるいは仕事を長い間していましたという方だけではなく、この間まで一般企業に勤めていました、あるいは主婦でしたという方々もおります。そして、この4人のことをわかってきて、とても親身になって新しい家族のように暮らしております。そうしたかたちが広がっていくのがとてもうれしく思っています。

もちろんいっぱい課題もあるのですよ。順調にこうしたグループホームを増やしてきたようにも見えるでしょうが、一つ作るのもなかなか大変なことですし、課題もいっぱいあります。ヘルパーさんとのやりとりについても課題がいっぱいあるけれども、いろいろな人たちに支えられながらグループホームでの生活を謳歌していることを知っていただけたらと思います。



たくさんの人の輪の中で

最後にご紹介するのはお祝い事です。成人式も大事ですけど、40歳を迎える人が出てきて（40歳と言うのも表現が直接的なので）ダブルトゥエンティということでお祝いをするようになりました。当日はたくさんの人たちでお祝いをするのですが、若いころにボランティアで送迎をしてくれた方や、食事介助をしてくださった方もいらっしゃいます。グループホームに住んでいる人が40歳を迎えるときは、ヘルパーさんたちが身内のようにビデオを撮りに来たりしています。本当にこういう人たちを囲む人の輪ができていて、さらに、いろいろな人たちがつながって輪がひろげていけたらいいなと思っています。

以上です。

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

三浦知人（社会福祉法人青丘社事務局長）

青丘社が抱える問題意識：地域社会の劣化

差別に対する行政の働きかけが青丘社の始まり

社会的公平性を目指す先駆的な取り組み

自分たちの問題を自分たちで：地域での取り組み

「共に生きる」社会をヘイトスピーチが襲った

白昼堂々行われる人権侵害

当事者を中心とした市民のつながりの重要性

三浦 知人（みうら・ともひと） 社会福祉法人青丘社 事務局長

社会福祉法人青丘社は、関東では屈指の在日コリアン集住地域・川崎市川崎区桜本で、40 年以上前から在日 2 世のコリアン住民が中心になって、民族差別に向き合う地域活動を推進。地域の具体的な生活の中で差別をなくし、ともに生きる地域社会を掲げて歩み、多様な生活課題に向き合う自発的活動が生まれてきた。

子育てを中心に教育、高齢者・障害者問題など、多様な分野の活動をにない、人権活動、文化活動、外国人支援活動、街づくり事業などを住民参加型事業として展開している。こうした取り組みを踏まえ、ともに生きる地域づくりをまもり、在日コリアンに対する民族差別をあおるヘイトスピーチを解消する運動の中心となって、取り組んできている。



パネルディスカッション／パネリスト報告②

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

三浦知人（社会福祉法人青丘社事務局長）

青丘社が抱える問題意識：地域社会の劣化

こんにちは。社会福祉法人青丘社事務局長の三浦と申します。皆さんのお手元に青丘社の活動案内と、これから設立を目指している新しいセンターに向けてという資料がございます。今日はヘイトスピーチに狙われた在日韓国・朝鮮人の集住地域からの報告者として選ばれたのだと思いますが、地域活動、とりわけ当事者の人たちが中心となって進めてきたまちづくりの活動と、ヘイトスピーチをめぐる川崎の現状について話し始めると結構な報告時間になります。そのため、どのように話をするのかということは来てから考えようと思っていたので、まずこのような資料を持ってまいりました。

私からは地域でどのような活動が行われてきたのかということと、近年地域社会が劣化しているという現状について報告したいなと思っていたのですが、全体的な社会状況の中で地域社会が劣化しているという状況について基調講演の井手さんの話を聞き、心の中でストンと落ちて大変勉強になりました。

私たちの地域社会では、とりわけ在日韓国・朝鮮人の民族差別の問題に関して言うと、昔は差別は陰でそこそ言うものだったのに、いきなり路上で「朝鮮人殺せ」と言われるような社会になって、いったいこれはどういうことなのかについて、私たち自身もどのように理解していいのかわからない状況にあります。2015 年に私たちのまちをヘイターたちが襲って来て、頭をトンカチで殴られるがごとく、改めて社会の中で私たちの立ち位置について考えさせられる経験をしました。私たちのまちの活動が、ある意味、箱庭づくりに終わっていたのではないかと考えるようになったのです。私たちのまちだけが、まちの人たちだけが幸せになるということはありません。いろいろな意味で社会の人たちとつながりながら、地域から発信することの重要性についてずっと考えてきましたので、この点において少し考える素材を提供できたらと思います。

差別に対する行政の働きかけが青丘社の始まり

全く青丘社のことをご存じない方も多いと思いますので、簡単に流れだけをお話しします。私たちは 1970 年代から、社会福祉法人青丘社という福祉の冠を背負って活動しています。しかしながら、福祉に関する専門的な知識はあまりなく、むしろ、日本の社会から排除された在日二世の人たちに対する民族差別問題について地域社会からの投げかけで始まった市民活動・地域運動だという理解をしてください。

私たちのまちは、川崎市の南部にあるコンビナートの煙突の下を想像して頂ければわかりやすいと思うのですが、日本鋼管という大きな会社に象徴されるように、戦争中の様々な差別の歴史の中で作り上げられたまちです。そこでは差別の裏返しとして、共に助け合いながら生きざるを得なかったという事実があり、その集住地域での生活の積み重ねは私たちのまちの財産でもあります。いわば社会から排除された在日韓国・朝鮮人による「差別はやめてほしい、差別するのはおかしい」という投げ掛けの中から始まったのが私たち

の活動です。

私たちのパンフレットでも紹介していますが、保育園があります。この保育園の活動を始めたのは在日二世の母親たちでした。「朝鮮人、朝鮮へ帰れ」と差別を受けながら日本の学校教育の中で大変惨めな少年期を送ってきた二世の人たちが、「自分の子どもにだけはそんな惨めな思いはさせたくない」という、非常にわかりやすい叫び声を上げました。私はその当時学生だったのですが、それをどう支えるのかということについて様々な人たちが集まって考え、子どもを支え、差別の不当性を訴えるという形で活動が始まりました。

当時は全ての社会保障制度に国籍条項があった時代なので、戦争政策の中で日本に来ざるを得なかった人たちが、完全に日本社会の枠外として置かれた人たちの課題をどのように考えるのかということについて、当事者の人たちは必死に訴えていました。その訴えの真実性につながりながら、地域の中からきちんと活動していこうという流れだったと思います。

そして、同じように税金を払っていても、社会保障が受けられなかった70年代から80年代始めの当事者の思いを踏まえながら、「ちゃんと社会の一員として、公平な市民として私たちのことを考えているのか。このような民族差別に対する行政の立場・責任をきちんと明らかにして、差別をなくす取り組みを行政がしっかりやってくれ」と要求し、当時の川崎市は「行政が社会不公正をなくさなければならない」ということをしっかり位置付けて、ふれあい館を設立しました。これは川崎市がつくった公設民営の施設で（今は指定管理という枠組みに入っています）、市民と行政がパートナーシップを結んでつくられた会館だと言っていいと思います。

社会的公平性を目指す先駆的な取り組み

これは結構画期的なことで、後にも先にも沢山の見学者が来ました。しかし、結局どこの自治体も「民族差別の問題で社会的公平性を達成すべきだ」という考えに基づいた事業や条例を作ったことはなかったと私たちは考えています。例えば、障がい者差別や女性差別、部落差別、アイヌ民族やハンセン病患者差別など様々な社会的な不公正に対して、行政がその不公正を正すのは当たり前のことです。ただ、在日韓国・朝鮮人などに対する民族差別の問題に対処するために設立された川崎市のふれあい館以外では、そのような施設が作られたとは聞いたことがありません。この事実が日本社会の考え方を表していると私たちは考えています。

私たち自身はふれあい館を得て、様々な社会的少数者の人たちがその場を使って、地域社会の中で誰も解決してくれない問題について「やはりそれはおかしい問題だね」とみんなの問題として扱いながら、市民参加の事業を行い、一つひとつ取り組んできました。高齢者事業や翻訳通訳バンク、学習サポートなど、高齢者や障がい者の取り組みという形で活動が広がってきました。こんなに沢山あると何かすごい法人のように思われるのですが、実際は本当に小さな地域の法人です。私はその活動スケールも気に入っているのですが、中学校区ぐらいの規模のまちに商店街があり、放っておけない様々な生活課題をみんなの力で解決しようと活動を続けてきたというのが実際のところですが、来て頂くとわかるのですが、一つひとつは本当に小さな活動の寄せ集めです。ただ、高齢者や障がい者の抱える課題や教育の問題、福祉の問題全般、まちづくりの課題などについて、ジャンルにとらわれずに、地域での生活課題という観点から見つづ活動を広げてきました。

自分たちの問題を自分たちで：地域での取り組み

基本的には、当事者たちが頑張ることが出来るフィールドをつくって、背中をちょっと押すことによって

みんな元気になろうよという気持ちを持ちながら活動しています。私たちは、在日韓国・朝鮮人の運動が、高齢者や障がい者、様々な困難を抱えている人たちの「私も頑張ろう」という気持ちにつながり、少しずつ共感の輪が広がってきたといつも表現をしています。そのような当事者の人たちとの関わりについて、地域の劣化という文脈の中で素材として提供したいと思います。

先ほど、名里さんのお話で「朋」建設にあたっても反対運動があったと聞きましたが、ふれあい館をつくる時にも反対運動はありました。「私たちのまちにふれあい館をつくるという行為は、まちが差別をしているみたいじゃないか」という市民の動きがあり、つくるのであれば川崎駅前につくってくれという話があったのですが、差別をなくす会館ですので、ここになれば話にならないということで1年遅れで開館にこぎつけました。

2000 年代に入ると、良い悪いは別にして市民活動がしやすい状況になってきました。私たちは行政の責任をずっと追及してきたのですが、行政の側も「言うことはわかるのだが金はない」という時代でした。そして、小さな市民活動が沢山生まれ、課題に自分たちで対処出来るという環境が整ってきました。何度も言いますが、これが良かったかどうかはわかりません。

ただ、そのような活動が全体の中でお互いに連関するような形で機能したことで上手く物事が進んだと思います。例えば、私たちが民族差別をなくすという活動一本で続けていたら、きっと日本の社会はもう少し冷たかっただろうと思います。しかし、青丘社が様々な形で、例えば、障害のある人たちと共に、一人暮らしの高齢者のところに弁当を配達する事業を始めると、私たちの活動は「あ、いいことをやっているね」といって定着していき、「共に生きる」や「それぞれが認め合う」、「みんなが多様性を認め合う」ことが、理屈ではなくて目の前の活動の中で実績として認識されるようになってきたのです。

「共に生きる」社会をヘイトスピーチが襲った

そのような地域づくりに少し自信を持ち始めた最中にヘイトスピーチがやってきました。ヘイトスピーチが行われた直接の原因は、ハルモニたち、おばあちゃんたちの戦争反対デモでした。

2015 年の夏に国会で大きな戦争反対のうねりがあった時に、私はその写真を見せながら、デイサービスに通っている普段は大人しいおばあちゃんに、「こんなことが起こっているんだよ、戦争に関するこんな法案ができるんだよ」と話したら、普段は全く話さないおばあちゃんが言葉を絞り出すように、「戦争だけはもうやめてほしい」と訴えたのです。それを聞いて、私も改めて差別と戦争の時代を生きたこの人たちと共に、戦争法案の問題や平和の問題を考えていかなければならないのだということに気付かされました。

その後、「今こういうことが起こっているんですよ」と伝えるために勉強会を開いたり、寄せ書きを持って私が国会に届けようかと考えていたのですが、おばあちゃんたちが「私を国会に連れて行け」と言い、すごいエネルギーで発信したのです。足も痛いし腰も痛い、車いすの人たちをこれだけ連れて行くことは出来ないけど、代わりに商店街で 800 メートルデモを計画し、2015 年の 9 月に 200 人ぐらいでデモを行いました。私たちにとって涙が出るほど嬉しい実践でした。特に一世の人たちは、地域社会の中でひどい差別をする当事者のおっさんたちのいる空間で日常生活を重ねてきているので、彼女たちは地域社会の中でチマチョゴリを着て自らを表現することはなかなか出来ませんでした。むしろ、私たちが実践の中で子どもたちや若者とそのような場を作ってきたのです。そのようなつながり・積み重ねの中で、一世の人たちが二度と戦争はやめてほしい、平和であってほしいという願いをチマチョゴリを着て、字の読み書きが出来ないながらも一生懸命横断幕を書き、コールを考え、演説をし、200 メートルのデモをしたことで、集まってくれた若い人た

ちも含めて、「これはなかなかいいな、すげえな」という声を沢山頂きました。インターネット上でも、「こんなすげえデモがあったよ」と評価されました。

白昼堂々行われる人権侵害

それに対して、インターネット上で、「ここは日本だ、嫌なら出ていけ」というヘイトスピーチが書かれ、私たちのまちでもヘイトデモが行われました。平和であってほしいという自己表現、経験に基づく表現を日本人がしても大した問題にはならないのに、韓国・朝鮮人のお年寄りが車いすに乗りながら 200 メートル行進しただけで、「川崎を浄化してやる。800 メートルの商店街を俺たちが朝鮮人殺せ、死ねと言って行進をするんだ」と、襲撃をかけられたのが 2015 年の 11 月でした。

白昼堂々「殺せ、死ね」と言われると本当に衝撃的で、とりわけ子どもたちやお年寄りといった当事者の人権被害は非常に大きく、その傷は今も癒されていません。子どもたちは、私たちの取り組みを通して、学校でも「自分のおばあちゃんは朝鮮人なんだよ」と普通に言うことが出来るし、フィリピンや中国から来た子たちや、様々な民族の人たちが自分を表現することにためらいもありません。また、学校の授業でうちのおばあちゃんたちがキムチの漬け方を教えたり、朝鮮学校と交流をしたり、あるいは運動会でプンムルという韓国・朝鮮の踊りを踊ったりといった実践を毎年積み重ねて、それらに対して「普通」である感覚は地域の中では非常に高まっていました。

そのような中ヘイトデモが起きたのですから、子どもたちにとって大変ショッキングでした。改めてそれと戦っている私たちを見て、「社会というものはこんなに怖いものなのか。あいつら何よ」と子どもたちも怒りを表現しました。とりわけ当事者の人たちは、私たちのまちでは良いけれども、このまちを出て高校に行った時に、自分のおばあちゃんが朝鮮人なんて言えるのかということを漠然とした不安ではなく、はっきりとした危機感として認識する機会をヘイトデモによって得てしまったのです。ヘイトスピーチけしからんといったことを達観して言うのではなくて、コリアンルーツの市民がどれだけ心を傷つけられたのかということ、もう少しリアルにわかってほしいのです。

戦後 70 年を過ぎて、在日のおばあちゃんたちの子や孫はほとんど日本籍です。家族が正月に集まると、半分以上が日本人です。当たり前ですよ。生活を積み重ねる中で韓国・朝鮮人が日本社会と別個になって生きているわけではないので、自分の孫も日本の学校で、日本国籍として、日本の名前で通っているのです。ヘイトデモを体験したおばあちゃんたちは、「私は死ぬからいいけれども、自分が韓国人だからうちの孫がいじめられるのではないかな」といったことについて、これからの日本社会に対して大変な不安感を持って過ごしています。これが、コリアンルーツの市民に対するヘイトスピーチによる人権侵害の実態なのだいつも思っています。

当事者を中心とした市民のつながりの重要性

改めて私たちは、ヘイトスピーチの襲撃を受けて、私たちの実践がどれだけ箱庭づくりだったのかということ、ことを認識させられます。社会の中で韓国・朝鮮人のコリアンルーツの市民がどのような生活を営み、今を生きているのかということ、日本社会がきちんと認識しているかといったら、あまりそうではないですよ。うちのおばあちゃんたちが、毎週一回、50 人程の規模で会食に集まり、飲めや歌えやの場を作っていることも、来た人たちにとってはカルチャーショックです。私たちは普通のことだと思っていたのですが、実はそういうことさえ日本社会全体の中ではあまり明らかにされていません。情報としても交わることがないよう

な別々な社会として積み重ねられてきたことを感じ、僕らは実践する立場の中でのほほんと箱庭づくりをしていたのだなと思われています。だからこそ、川崎市の南部という地から様々な意味で具体的な生活の積み重ねを発信していかなければいけないと考えています。

そのような意味で、今日のテーマである「分断を乗り越える」ということに関して言えば、私らの地域の中で当事者と言われる韓国・朝鮮人のコリアンルーツの市民や障害のある人たち、高齢者の人たちが日常の活動の実践を担っていることを多くの人たちに知って欲しいです。若い人たちはどこかに働きに行っており、地域社会に帰ってくるのは土日ですが、私たちの活動の多くの担い手は高齢者や障がい者です。この人たちが近所の会話を楽しみ、毎日の暮らしの中で共に生きていその姿は、地域社会の中での助け合いがとても大切であることを教えてください。私たちはその実践力に依拠して活動しているところがあります。むしろ、共に生きる地域社会において、このような当事者の人たちの大変な思いの中から発信されていることから、私たちが学び、受けとるものが沢山あるだろうと思っています。

そのような意味で、ヘイトスピーチによって大きく歴史が動いたということではありますが、歴史を動かしたのもコリアンルーツの当事者の人たちが、具体的に私はこんな被害を受けた、私を誰が助けてくれるのかということを顔をさらして叫び上げたからです。それが国会でのヘイトスピーチ解消法案作成をめぐる市民運動につながり、世の中を大きく一歩前進させ、「殺せ」、「死ね」といった類の言葉を言いにくい社会をこの一年で築きました。このように、「人権」や「共に生きる」、「多様性」といったキーワードで、当事者を中心としてそれに連なる市民の人たちがつながりを回復しながら、もう一回、地域をつくり直していく作業が必要ではないかと思っています。

以上です。

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

パネリスト

名里晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）

三浦知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

井手英策（慶応義塾大学経済学部教授）

小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

司 会

林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

県内で次々と起こっている問題 ／ 自分の中にある差別 ／ 支え合う仕事を担う人材の育成

みんなが幸せになったらいいよねという想い ／ 人はそれぞれ人格がある

「俺たちが守るぞ」というたくさんの人たちの想い ／ 人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさ

正義が複数存在している ／ 彼らを包み込んでいくためには何が必要か

なぜみんなが同じように苦しみをを感じるのか ／ 思想と現場（という車の両輪）で会話を積み重ねる

この社会を生きる人々の寛容さの問題 ／ 寛容さを育む基礎としての生活の保障

自己責任でできる領域とできない領域 ／ 一人ひとりの人間が共に在る感覚

“中の下”の人たちは転落の恐怖におびえている ／ 人間らしい選択をするための生活保障

パネルディスカッション／質疑応答

分断を超え、ともに生きる成熟した市民社会へ

パネリスト

名里晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）／ 三浦知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

井手英策（慶応義塾大学経済学部教授）

小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）



司 会

林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

県内で次々と起こっている問題 ／ 自分の中にある差別 ／ 支え合う仕事を担う人材の育成

<林>

まず社会福祉法人理事長であり、円卓会議の運営委員でもある小川さんから、分断を乗り越えるということについてどのようにお考えになるかお話しいただけますか。

<小川>

私は昨年度の一年間、神奈川新聞に「紙面拝見」というコラム記事を書かせていただきました。この一年の間にやまゆり園の問題、ヘイトスピーチの問題、川崎の有料ホームでの高齢者の殺人問題、それから皆さんには、あまり記憶にないかもしれませんが、鎌倉で生活保護の人がパチンコをするのはけしからんというのが議会で通りそうになっていたと新聞に小さく掲載されていたが、それを見たとき、ぞっとしました。そういった問題がこの神奈川の中で次々起こっていて、これは「知らんがな」とは言えないなと。全部もしかしたら自分の中にある差別や区別ではないだろうかと思いつめていました。

とりわけ私は特別養護老人ホームを運営していますので、特にやまゆり園や有料ホームの問題などは人ごとではありませんでした。一番つらいと思うのは、いつでもうちの事業所でも起こり得ると思ったことです。それと同時に、なぜこれほど人が人を支え合う、助け合うことが必要とされているのに、それに携わる仕事は何と浮かばれない社会なんだろうと。

先ほど井手さんのパワポの 16 ページのところ、税を増やすことで、子育て・教育、医療、介護といったサービスを受けられる社会にしようよというお話がありましたが、これらは実際の担い手が必要になります。ロボットがするわけでもない、人を支え合うという仕事を担う人材をどう育てるかということが、国では全然議論されていません。資格を取得するための講座やテキストばかりができるので、そちらでは儲かっているのね、といった状況です。

資格だけではとても仕事はできない。しかし、人材を育てる環境をつくっていくためには、3K、4Kともいわれるこの仕事を、「あの仕事に就きたい」と思われるような、誇りを持てる仕事（私自身は、こんな面白い仕事はないと思っていますが）となるよう、より多くの人たちが共感できるようにしていかななくてはならない。

もう一つは、ヘイトスピーチもそうですけれども、三浦さんにお尋ねしたいなと思ったのは、今回、首長が福田さんだったことが、そのことで結果が出たのか。それから、小田原でもそうですけれども、やはり首長というのはとてもこれから重要だなと思っています。もう国ではなくて、やはり分権の中で、その自分の住んでいるまちのトップがどうであった、どうなのかというのかなり影響するだろうなと思っています。

みんなが幸せになったらいいよねという想い / 人はそれぞれ人格がある

<林>

名里さんにお聞きします。施設が地域にできるということは、ちょっと触れられましたけれども、非常にあつれきも生じることがあるといわれております。それを乗り越えるには何が経験から必要だと実感されていますか。

<名里>

30年以上前のことですが、開設にあたっての地元説明会では、反対している人たちが並んでいて、説明する側に法人の代表や横浜市の職員がいました。説明の後に質問の中で、明らかに反対している人からの質問で「散歩に出ますか」という質問があったのです。私は会場の隅にいて、「これって、明らかに散歩に出ないでほしいという質問だったわけなので、何て答えるのだろう」と思っていました。

私の前の理事長の日浦さんが立って、非常に迷いながらも「出たいと思います」と言いましたら、会場に「どんどん出てきてください」と言ってくれた人がいて、私の当時の記憶では、それで何となく空気が変わっていった、何かいいんじゃないかという感じになっていったと記憶しています。「この人たちの何を大事にして、この人たちがどういう人生を送ってもらいたいからこの場所が必要なんだ」という思いを語り、そのことを受けとってくれる人がいた、ということだと思います。

さっき井手さんもおっしゃられていましたが、人って、みんなでわかり合って、みんなが幸せになったらいいよねという想いを持っているのではないのでしょうか。何かどこかで掛け違えてしまったり、何かどこか自分がある居場所の生きにくさがあったりして変な方向に出てしまったりするのだろうとは思いますが。

私は、相手の気持ちがわかったときとか、わかり合ったときに、人は喜びのようなものを感じることがあるのだと思っています。そして、そういうものを感じるのは、この人がどんな人で、どんなことがうれしくて、どんなふうに暮らすことができたらいいと思っているということを周りの人が伝えることでわかり合えたらと思っています。

<林>

取材にも答えていらっしゃるようですが、人はそれぞれ人格があるんだということをお互いにわかり合え

ることが、まずそういった分断を乗り越えていく、一つ大きな手立てになるんじゃないかと、今私は話を聞いて思いました。

「俺たちが守るぞ」というたくさんの人たちの想い / 人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさ

<林>

次に三浦さん、先ほどもお話がありましたヘイトの問題について、川崎市がガイドラインを作ったということが今日大きなニュースで報じられていますが、まだまだ不十分であるという点はお感ではないかと思います。いろいろと活動されてきた立場から、これから社会に求められることはどういうことなのか、教えていただければと思います。

<三浦>

ヘイトスピーチのことについては、最も傷ついたのは「殺せ」「死ね」と叫ぶ人間に大変怒りを感じました。私たちは2回襲撃を受けましたが、そのときに警察官や自治体は何もできない。じゃあ、いったい誰がうちのハルモニ、おばあちゃんたちや子どもを守ってくれるのか。そこで「俺たちが守るぞ」ということで、大変な悲壮感を持ってたくさんの人たちが集まってくれました。その背景には、市民が本当に「殺せ」「死ね」と言われているのだから、やはり市民を守るべき立場の人間たちが何で「そんなのけしからん、守るぞ」という一言が言えないのかという思いがありました。

同じまなざしで見るときに、言うべき人がまずちゃんと言えよというのを僕は感じる事が非常に多いですね。相模原の事件も同様です。事件があったときに言うべき人が「これはけしからん」と適切に言えているのかといたら、この社会、ずいぶんと言えていないことが多すぎると思います。そういう意味では、公の立場のある人たちの人権感覚や多様性を認める社会感覚のなさに僕はうんざりするほど失望を持っています。

社会をつくるために、もちろん全般的に社会は変わっていかなくちゃいけないことは大きな思いとしてあります。とりわけ発進力のある政治家や長といわれる人たちが、地域社会の多様性とか、多文化共生とか、国際社会とか言っているのにこういう人権の問題が起きているのは何なんだと非常に強く思います。そういう意味では、近未来の中で、言うべき人がちゃんと適切に対応できるというところから始めてほしいという思いが強くあります。

また僕らの立場から見ると、川崎市長を動かしてきたのは市民であり、大きな流れの中での市長が差別に反対できるような環境をつくってきたということであって、市長の決断を迫ってきた活動ができたと考えています。

<林>

市民が動かしてきたということですね。

井手さん、これまでの話を含めて、お考えを聞かせていただければと思います（→次ページ）。

正義が複数存在している / 彼らを包み込んでいくためには何が必要か

<井手>

まず感じたのが、人種差別であれ、あるいは障害者差別であれ、差別は今だけあるものではなく、ずっとあるものだと思うのです。昔の悪しき共同体主義ではありませんが、要は村八分的に敵をつくる、差別をすることによって残りの人たちが連帯するという、その繰り返しがあります。そういった常にある差別としての障害者差別や人種差別に対して、人権という立場からそれはおかしいと言う。これが一つのかたちだと思います。

ただ、とは言いながらも、僕が今日すごく感じるのは、今の差別は、昔からある差別と同じなのか、違うのかを考えないといけない気がします。それはヘイトスピーチのお話も、まさかこんなことがということが今起きている。これはいわゆる昔からある人種差別と同じなのか、違うのかということをきちんと考えないといけないと僕は思います。

僕が今日、講演の中で一番言いたかったことは、差別がいけないということは誰だってわかっているし、人権が大事ということは、一応表面的にはみんなわかっている話なはずですね。しかしながら、また形を変えた差別が今起きているという現象をつかまえた場合に、相模原の事件であれ、ヘイトスピーチであれ、それは差別をする側には差別をする側の独自のロジックがやはりあって、あるいは差別をせざるを得ないような寛容さのなさや苦しい状況が彼らの側にもあるという意識をプラスアルファしないと、どうしても人権は大事で、差別はいけないという枠を超えていけないような気がするのです。いけないことはいけない。でも、じゃあなぜいけないことをするのかというところに切り込んでいくことがとても大事な気がします。

今日僕が申し上げたかったことは、だから、弱者が弱者を攻撃するという視点を大事にしましょうというふうに申し上げたわけですけども、ヘイトスピーチであれ、障害者差別であれ、差別をする側が社会的に極めて追い詰められた状況にあるんじゃないかという意識を、これはお二人がとか、皆さんが持つべきだというよりも、重要なポイントとして、僕自身が受け止めていかないといけないなと、すごく感じている部分です。

それと、今のと関連して言うと、今日は運動をやっておられる方もたくさんおられるんじゃないかと思うので、アリストテレスという古代のギリシャ哲学者ですよ。彼が言っていることで正義が複数存在しているということは考えておいていいと思います。つまり、僕たちは自分がそれぞれの立場で正義を語りますよね。それが唯一無二の絶対的正義だとして語りがちですよ。これが要するに違う立場の人たちに対する怒りになって表れるわけですけど。

だから、例えば格差のことを林さん、僕におっしゃったけれども、例えば、じゃあ、格差はいけないから小さくしようというのはこれは一つの正義ですよ。でもね、2倍頑張った人が2倍の給料をもらうって、これは不正義ですか。違うでしょう。2倍努力した人が2倍給料をもらうって、これは正義なんです。これは配分的正義というんですけど。要するに格差が存在する正義もあるんですよ。古代ギリシャの時代から、正義は一つではない、複数存在するということははっきりしている。そうすると、我々が正義だといったって、反対の人には何の意味もなく、相手の人々がまた違った正義を語るときに、じゃあ、彼らを包み込んでいくためには何が必要かということを常に考えないといけない。

なぜみんなが同じように苦しみを感じるのか / 思想と現場（という車の両輪）で会話を積み重ねる

それはおそらく違いではなく、共通性に目を向けるということだと思います。これは先ほどアリストテレスと言いましたが、ルソーであれ、トマス・ペインであれ、あるいは悪魔のようにいわれるミルトン・フリードマンであれ、多くの思想家が共通して言っていることです。何が違うかをやり始めると社会は分裂する。何が同じかということを徹底的に考えたときに、社会は一つになる。

これが僕の今日一番申し上げたかったことで、それぞれの立場、それぞれの正義がある中でぶつかり合う。しかしながら、反対の立場に立つ人は反対の立場に立つ理由がある。とするならば、何が違うかで対立し合うだけではなく、これは大事なんですよ。だけではなく、何が共通で、なぜみんなが同じように苦しみを感じるのかという視点を入れていかないといけない。僕は少なくともこの問題を財政の領域からやっていきたいと思うわけです。全ての人間の利益、あらゆる人々が非人間的な、非道徳的な行動を取るときに、その人自身が未来への不安でおびえているということをきちんと受け止めながら、多くの人々が不安から解放されたときに、あるいは障害者差別であれ、あるいはヘイトスピーチであれ、今のようものはなくなっていくかもしれないという希望を僕は持っています。人々が安心できるようになったとき、弱者が弱者をたたかなくてもいい状況が生まれたときに、また状況というのは変わっていくのかなと思います。

その意味で、僕のような思想家が国のマクロのレベルで思想を変えていこうと思うことと、現場でミクロの世界で目の前にいる人々の幸福のために何ができるかということを一生涯懸命考える、お二人のように考えておられる方と、これは車の両輪であると、僕は思っています。お互いが会話を、今日のように積み重ねていきながら、攻撃する側の人たちがなぜ攻撃するのか。彼らが攻撃しなくていい状況をつくるために何ができるのか。私たちと彼らは何が共通しているのか。それは不安におびえているということではないのか。こういう視点が重要なのかなと思いました。

あと、いただいた質問でいうと、例えば、ケースワーカーであれ、介護士であれ、何でも構わないのですが、専門性を高めていくことの重要性はよくいわれますよね。それは確かにそうだと思うけれども、では社会福祉士の専門の資格を持っているからといって、その人がケースワーカーになって本当にいいケースワーカーの仕事ができるかという、ちょっと違う感じがします。

重要なことは、まず根本的に税で人を増やすことが大事だと。と同時に、本来、障害者の問題であれ、生活保護の問題であれ、介護の問題であれ、全部そうなのだけれども、本来やるべき業務に専念できる状況をつくってあげることが僕は一番大事だと思っています。その中で、むしろ専門的な資格を持っている人たち（社会福祉士でも、精神保健福祉士でも構いませんが）は、むしろソーシャルワーカー的に、本来であればケースワーカーや介護士がやるべきでないことをたくさんやらされている人たちの負担軽減のための人たちであると。今日お二人とも、人々を地域に開いていくということをおっしゃっていて、それは大事なことで、目の前にいる人の生活を支えることと、この人たちを地域に開くことって、一緒のようで本当は違うはずなのですよ。もっとその地域に開いていくような仕事を専門的にやっていけるような人々を増やしていくべきだと僕は思うし、その人のための予算というのはきちんとつくっていくべきだと思っています。

この社会を生きる人々の寛容さの問題 / 寛容さを育む基礎としての生活の保障

最後に、林さんがおっしゃった格差の問題を容認する、これは聞こえが悪いことは僕も承知の上ですが、ただ、今日もお示したように、格差は小さくなるんですよ。僕のモデルで、まずね、このことはわかっていただきたい。格差は小さくなる。しかしながら、どこまで小さくすべきかとか、どこまでが大きな格差かというのは主観ですよ。ここまでやったら大丈夫って、絶対言えないのですね。とするならば、問題は結局、寛容さの問題なのですね。ヘイトスピーチの問題もそう、障害者差別もそう、この社会を生きる人々の寛容さの問題なんですよ。

では、私たちが寛容でいられるためにはどうしたらいいか。確かに格差がある。お金持ちがいる。でも、そのお金持ちに寛容でいられるにはどうしたらいいか。貧しい人がいる。格差がある。苦しんでいる。でも、この人たちにみんな苦しいけど寛容でいられるにはどうしたらいいか。この寛容さを育む基礎として、生活の保障や未来への不安からの解き放ちということを僕は申し上げます。

自己責任でできる領域とできない領域 / 一人ひとりの人間が共に在る感覚

<会場から①>

井手さんの今日発言していただいたことを肯定した上で申し上げます。前提条件で、収入が200万と2,000万の話をされましたけれども、収入がない人が多い。私も倒れましてね、収入がなくなりまして、それで何とか復帰したいから支援してくれて、そういう制度がないから生活保護を受けろと言われて、生活保護を受けたくないから働きたいんだということで、私は自己責任を肯定している人間なのです。

井手さんがおっしゃったように違うことに注目しないで、同じことに注目すると。つまり日本語で言うと、心を一つにして、同じ共同体というのですか、そういうものをつくっていけばいいのではないかと。

<井手>

僕は体を張って命がけでやっており、現にもう民進党の政策は変わったのですよ。すごいことだと思います。僕は実働部隊の最前線でやっている覚悟はありますのでね。その上で、自己責任を肯定するというのはおっしゃるとおりなのです。ただね、自己責任でできる領域とできない領域をきちんと区別しろというのが僕の言いたいことです。そして、自己責任でできる領域を自己責任でやるのは当然のことなのです。

しかしながら、人間にはさまざまな不幸や不運があって、自己責任だけではどうしようもない、あらがえないようなことが必ず起きる。例えば脳梗塞とおっしゃって、僕も硬膜下血腫で倒れましたけれども、急性硬膜下血腫でね。ですけど、僕は何の後遺症もない。今おっしゃったように後遺症が出る。これは運じゃないですか。運の問題ですよ。これは誰にもあらがえない。どうしようもない。しかし、そのときにどうしようもない部分まで自己責任と言われる社会はやはりおかしい。それがまず一つ。

それと、もう一つ。心を一つにする。これは英語では a sense of one です。いわゆる一体感なのですね。一体感は、僕に言わせると全体主義の論理だと思います。そうではない。僕は a sense of togetherness と言いますが、共在感、共に在るという気持ち。何かの一つの心にみんなを合わせようとするって、僕は無理だと

思います。しかしながら、共に在る、一人ひとりの人間が共に在る感覚というのは必ずある。例えば、運悪く病気になり障害を持つことになった人に対する人々の気持ち。子どもの無力さ、年を取った人間の無力さに対する人々の気持ち。病に倒れた人々への人間の気持ち。あるいは自然災害に襲われて突然命を失う人々への気持ち。これは一体感や共生とは全く次元の違う、誰もが共に在る以上は必ず感じる気持ちのはずなのです。この部分を僕は財政の視点から、みんなで痛みと喜びを分かち合いながら誰もが安心して暮らしている社会をつくるようにする。これは絶対に、無理に人々の心をつににするのではなく、必ず人々がそれは共通して感じることでできる感覚だと信じています。

だから、その意味で、心をつにすることと、共に在るというこの感覚とを僕ははっきりと区別しておきたいと思っています。

“中の下”の人たちは転落の恐怖におびえている / 人間らしい選択をするための生活保障

<会場から②>

グローバリズムという世界的な潮流はもう止められないのか、どうしようもないのか。その一方で、ヨーロッパでは移民排斥の動きもあります。そうしたときに、一つの処方箋がもしどこかにあるとしたら、それは井手さんがおっしゃったような形なのか、あるいはトランプがグローバリズムを否定すると言いながら、今、実際に何が起きているかということを見たときに、我々はこれをどう考えたらいいのか。あるいは世界的潮流を止められないのだとしたら、そこに井手さんが提案されたこと自体も押し流されていってしまうのか、そのあたりの井手さんの思いをお聞かせ願いたいと思います。

<井手>

例えばアメリカのトランプ政権、イギリスの Brexit がありますね。実は日本もここに近いのですけど、要するにアングロサクソンモデルといわれる小さな政府のモデルです。それら国々においては、小さな政府といった場合、たいていが貧しい人にお金を使う政府になっています（みんなにお金を使うと大きな政府になりますので）。小さな政府というのは、貧しい人にさまざまなサービスを提供する政府であり、多くの人々は自己責任で生きていく社会になります。これはイギリスもアメリカも日本もそうです。

問題なのは、アメリカもイギリスも日本も中間層がどんどん貧しくなっているのです。そうすると、この人たちが、自分たちの生活がどんどん不安定化していくのに、あからさまに一部の特権階級の人々が利益をもらっていることが見えるような社会状況が生まれているわけです。その中で、実はアメリカもイギリスも“中の下”の反乱が起きているのです。Brexit のときに離脱を声高に叫び始めるのは“中の下”の前後の所得階層なのです。そして同時にアメリカで、かつてのオバマのようにヒラリー・クリントンを支持せずにトランプに流れている層は“中の下”の前後の層なのです。

何を言いたいかというと、“中の下”の人たちは転落の恐怖におびえているのです。この人たちがイギリスであれば移民が悪いと、あいつらがおまえらの福祉を食い散らしている。あいつらがおまえの仕事を奪うと、反移民的なロジックで離脱を選ぶわけです。アメリカであれば、同じように移民や、あるいは低所得層がおまえらの福祉を食い散らしている、おまえらの仕事を奪っているといって“中の下”の人たちを脅す

と、彼らがトランプを支持するわけです。

この転落の恐怖をあおることがポピュリズムの本質であり、実は先進国の中で一番“中の下”と考えている国民の割合が高い国は日本です。同じことが日本で起きます。実は安倍さんがやっていることも恐怖心をあおるという意味で、本質的に同じなのです。

ところが一方で北欧を見てもそう、フランスを見てもそう、選挙を見てください。極右勢力が出てくる、反移民が出てくる。ところがギリギリのところで踏ん張る国があるでしょう。生活がきちんと保障されている国ですよ。その人たちは転落の恐怖から解き放たれているのですよ。だから、最後の最後でポピュリズムが効かない、極右が効かない。だから踏ん張るのです。この大きな違いが僕は重要だと思っています。

ですから、今日僕が皆さんに申し上げたのは、転落の恐怖におびえる人々をたきつけて、移民あるいは外国人の労働者や低所得層をたたき世界を目指すのか。そうではなく、そのような動きがグローバリゼーションの中でやむを得ないとしても、なお踏ん張って人間らしい選択をするのかという分岐点にある中で、僕は後者に行けるような道を申し上げたと。

(以上)

閉会挨拶

高島 肇久（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長）



運営委員を仰せつかっております高島と申します。井手さんには、昨年度の円卓会議において、11 月の湘南国際村でのシンポジウムでお話いただき感動いたしました。本日はさらに深い深い感動を覚えました。本当にありがとうございました。

井手さんの冒頭のお話の中で、日本では働き盛りの世代に自殺が増えているというお話をなさいました。私自身は、去年から今年にかけてアメリカのことを調べている中で気づいたこととして、白人の人たちの 45 歳から 65 歳の年齢層の死亡率が急にこのところ高くなっています。アメリカでは白人の人たちの死亡率はこれまで低下し続けており、他の先進国でもおおよそ 45 歳から 65 歳の死亡率は下がってきています。そして、アメリカに住んでいるヒスパニック系、ラテンアメリカ系の白人の死亡率も下がっている中で、45 歳から 65 歳の白人男性、女性ともに死亡率が高くなっています。こうした状況は、井手さんが話された日本の状況とオーバーラップしています。

なぜアメリカでこのようなことが起きているのかというと、それはまさに前途に悲観して、ということのようです。自分の子どもは自分よりいい暮らしをするであろうとこれまでは思っていた。自分は大学に行けなかったけれども、子どもは大学に行けるだろうと思っていた。その人たちの夢がまさについでていることを実感し、その結果、アルコールや麻薬に走り、肝臓病が急に増えた。鎮痛剤を医者に出してもらって、これを倍どころか、何倍も飲んで、鎮痛剤の中毒で死んでいく。さらには自殺も増えた。このような背景があって、死亡率が高くなっているのです。

先ほど井手さんがやせ細った中間層のお話をされていましたが、それと同じような動きがアメリカでも見られ、中の下の人たちがトランプの支持に走ったのはまさにその一例であろうと思いました。そうした兆候は日本でもさまざまなところに現われており、本当に驚いたことに、今まで想像もできなかったような事件が相次いで起きるようになっていきます。

このことは、実はグローバリゼーションと、それによって地域が受けるさまざまな問題を抜きにして考えることができないものだと捉えておりますので、今後、シリーズとして続く 7 月の勉強会、そして 11 月に湘南国際村で開かれるシンポジウムでの議論において、さらに深く切り込んでいきたいと思っております。私たちはコミュニティレベル、国レベル、そして世界レベルでの問題解決を考える際に、どうすれば現状を変えるための方向転換をすることができるのか——。ただ、「できない」となると大変なことになりますので、できる方法を見出すよう努力していきたいと思っております。

本日は、これほどたくさんの皆さまにお集まりいただいて、大変に熱のこもった、しかも深い議論ができたことを運営委員の一人として心から感謝申し上げます。皆さま、ありがとうございました。

②【勉強会】

分断を超えたコミュニティを育む
市民社会のかたち

7/30（日）@横浜情報文化センター（日本大通り）

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

馬場拓也（社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事）

はじめに
酪農家の父が立ち上げた社会福祉法人
虫の目と鳥の目
愛川町に戻ろうと思ったきっかけはお祭り
あおいけあで学んだこと
施設の中で過ごす日常を大切に
分断されている地域と介護施設をつなごう
トップがしっかりと姿勢を示す
壁を壊して介護施設と地域をつなげていきたい想いを発信
庭を開き多角的なコミュニティの装置に
地域の人たちが自然と交わることのできる環境を
座れる場があることの大切さ
壁が取り払われ地域が見守る

馬場 拓也（ばば・たくや） 社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事

大学卒業後、イタリアのファッションブランド「ジョルジオ アルマーニ ジャパン株式会社」入社。トップセールスマンとして活躍した後、2010年に現在の法人に2代目経営者として参画。法人改革に邁進すると同時に、全国20の社会福祉法人と共同で“写真×論考”の書籍「介護男子スタディーズ」を企画・発行。厚生労働省介護人材地域戦略会議にて全国に呼びかける。また、地域との隔たりであった施設を囲う壁を取り払い、特養と地域との“距離”再考プロジェクトを企画。若手建築家・造園家・大学生らと共に誰もがアクセス可能な座れる庭「ミノワ・座・ガーデン」を完成させ、地域に開かれた運営を推進している。大学や他業界への研修講師も務めるなど、内外への情報発信も積極的に行っている。著書に「～職場改革で実現する～介護業界の人材獲得戦略（幻冬舎）」を持つ。



報告 ①

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

馬場拓也（社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事）

はじめに

みなさん、こんにちは。どうもよろしくお願いします。まず自己紹介からさせていただきます。今日の資料にプロフィールも載っておりますが、簡単に紹介しますと、僕は大学まで野球をやっており、高校は東海大甲府で、今年、甲子園大会の予選決勝で山梨学院に負けまして、気分がとても沈んでおります。大学を卒業してからはアパレル業界に就職して、最初は GAP というアメリカのアパレルブランドに入りました。GAP のサービスはたとえて言えばマクドナルドのような画一的な側面がありますので、もっと踏み込んだサービスができないかと思い、アルマーニジャパンというイタリアのブランドに転職しました。20 代から 30 代半ばまではアパレルサービス業界にいましたので、販売やセールス、あるいは対人援助のようなことに関して、まったく違うかたちで僕はキャリアを積み上げてきました。そして法人の 2 代目として、2010 年に地元の愛川町に戻り、今に至っています。

うちの施設は所在地が愛甲郡愛川町という、愛が 2 つもつく愛に貪欲な町の中心地にあります。相模原市、厚木市、清川村と隣接しています。宮ヶ瀬湖や宮ヶ瀬ダムがある山間部というよりも、その山際に位置しています。相模川と中津川に挟まれた、隆起している大地は工業団地となっており外国人も多くいます。

酪農家の父が立ち上げた社会福祉法人

私の家は、社会福祉法人をやる前は酪農家で、牛を 70 頭飼ってまして、70 頭の牛を 3 年間かけて売り払って、70 床のベッドをもつ規模で施設を始めました。70 頭の牛が 70 人のお年寄りに変わったような感じです。僕は 3 人兄弟の長男坊として生まれまして、僕が 8 歳、妹が 5 歳、弟が 3 歳という家族構成で、本家の祖父母と一緒に住んでいました。祖母が 60 歳で脳梗塞になり、当時、介護施設は愛川町に一つもなく、厚木にある神奈川県総合リハビリテーションセンターなどを使いながら、何とか介護しておりました。本家の嫁であるうちの母親としては、まだ若いし、家で看なければいけないという使命感のもと、牛の世話をやり、子どもの世話をし、おばあちゃんの世話をするという、大変な生活を送っていました。

それが動機付けとなりまして、酪農家だった父が一念発起して、1992（平成 4）年に法人を立ち上げて理事長となりました。当時の神奈川新聞でも、両親の病気で福祉の道へ、といった記事で紹介いただいております。そこから現在まで 25 年が経っておりますが、私たちは基本的には事業のさらなる展開といったことにあまり欲がない法人——自虐的に言えば、発展性がなかった法人——でこれまで来ています。

祖父母——理事長からいえば両親——を最終的に家で看たいと思い立ち、代々受け継いできた家業を辞めて、法人を設立するまでに 5 年ほどかかりました。最終的に 1992 年に立ち上がる前の 1991 年に祖母が他界し、また、その間に祖父にはがんが見つかり、法人が立ち上がった時には 2 人ともこの世にはおりませんでした。

虫の目と鳥の目

これまでは本当にほそぼそ——うちの施設長は「ほそぼそとやっていきましょう」が口癖です——とやっていたのですが、僕が戻って非常に感じたのは、介護にかかわる人たちが虫の目で仕事をしているということです。うちで働いている子たちは、みんな非常に純粋で、それぞれの視点から一つのことを凝視し、集中する目をもっています。一人のご利用者をしっかりと見ていくということでは、虫の目は非常に重要で、専門性についてもこの視点があつてこそ深められていくという面はあります。

ただし、私たちは社会福祉の法人であり、社会福祉といった時に、もう少し幅広い視点をもたなければいけないと思っています。まちにお尻を向けて、建物の中でケアをしているのであれば、どうしても視野狭窄を起こしがちになってしまうと感じていました。まちに開かれていなくて、建物の中の人たちは何をやっているのか、まちの人たちには何となくイメージが湧いていない——特に私たちは特養なのでそれが顕著なのかもしれません——のではないかという課題を僕は2代目として感じていました。

現在7年目になりますが、職員に対しては、常に虫の目と鳥の目で、既成概念にとらわれないで広い視野を持ちながら日常的にあらゆるものにアンテナを張っていこう、自分たちを客観的に見て俯瞰していこう、と常々口にしていました。

愛川町に戻ろうと思ったきっかけはお祭り

僕は家電が好きなので、虫の目と鳥の目を家電に例えると、虫の目はルンバです。お部屋をきれいにするのにそんなに俯瞰的に見ていられないですね。目の前のごみをしっかりと吸い込んでいくことが大切です。一方、鳥の目はドローンといえるでしょう。ドローンでうちの周りを見ると、ああ、うちの裏山の竹藪ってこんなにぐちゃぐちゃなんだとか、うちの家の隣の屋根は、瓦が割れているんじゃないかといったようなことが発見できるという、ある意味、笑っちゃうような例え話を介護職員たちとしています。

私たちは年に1回、施設のお祭りをしていますが、そこには、おおよそ延べ800人ぐらいの人たちが来てくれています。これは僕の力ではなく、先代が「馬場牧場の馬場さんが特養を始めた」ということで、地元の人たちからいろいろなサポートも受けながら積み重ねているものです。さまざまな模擬店がありますが、これも職員ではなくて地域の人たちがやっています。また地域とのつながりがあることで、お祭りでは農家の人が自慢のネギを持ってきて、ネギブースや野菜ブースをつくって売っています。ドローンで見ると、そんな関係性がずっと積み上がってきていることの大切さを感じます。

この前ふと思い出したのですが、僕がアルマーニを辞めてここに戻ろうと思ったのは、このお祭りに行ったときでした。「福祉ってこういうこともやっているんだな」とか「こういう空間を住民と共有する活動があるんだな」と、地域に開かれている側面に僕は魅力を感じました。

あおいけあで学んだこと

職員たちは、今まではご利用者に楽しんでもらおうといろいろなことを考えてきました。ご利用者に楽しんでもらうという視点は非常に重要ですが、もしかしたら、もう少し引いた鳥の目で見ると、ご利用者が誰かを楽しませて、ありがたいと言われる立場になることは、自尊心という意味も含めて非常に重要ではないかと思います。

それを僕に教えてくれたのは、藤沢市にあります、あおいけあという介護施設です。そこの加藤さんがそんな話をしているのを聞いたときに、特養でもこれってできるんじゃないのと思ったのです。もちろん全

員ではないですが、幅がある介護度の中で、どこにスタンダードを合わせるのかといったら、スタンダードなんていうのは設定できなくて、その人その人のスタンダードをつくっていくことなんだなということをあおいけあで僕は学ばせていただいたなど、今でも感謝しております。

施設の中で過ごす日常を大切に

虫の目で見るとたとえ素晴らしい空間であったとしても、施設を囲う壁の外にいる人から見れば、ここで行われていることがまったくわからないこと自体が、閉鎖的な雰囲気をもたらしてしまいます。ルンバでやっていると気付かないことが、ドローンによって鳥の目で見ると、この壁の中で行われていることは、果たして地域にきちんと伝わっているのか、また地域に対して魅力を見せることができているのだろうかと考えてしまいます。

アパレルのサービス業にいたときは、ハード的な視点から、まずはいかにお客様が入りやすい空間をつくるかということが第一歩でした。一方、介護は、目の前の人はどう接していくのかといったように、どうしても虫の目で展開されがちです。たとえば「桜をみんなで見に行きました」といって記念撮影したピースサインの写真が載っている広報誌などを地域にばらまいたところで、それを見る人たちは、施設の中で過ごす日常のあり方に関心があって、そちらの方を自分たちも大切にすべきではないか——といったことを僕はずっと考えていました。

これは僕が介護の世界に関わらない一般人としての立ち位置にいるのが長かったことから抱く違和感でしたが、ただそれが法人内において合意形成を得るまでには時間がかかりました。なかなか受け入れられずに、アルマーニでやっていた人間が福祉のことを語るな、変な2代目が来たな、といった雰囲気もありました。

分断されている地域と介護施設をつなごう

そこで、壁を隔てて、地域と介護施設がまさに分断された中で展開されている福祉をもうやめようじゃないかということで考えたのが、壁を取っ払って地域と特養の距離を縮めるためのミノワ Re デザインプロジェクトです。〇〇委員会というよりもプロジェクトと名付けた方が、何となく格好良くなりますし、みんなが何となく前のめりになるような、これは一つのテクニカルな話でもあり、思想的な話でもあります。例えばトイレ改修プロジェクトと名付けることで、改修するといっても、やり方によってはいろいろなかたちができるよという可能性を広げていくものです。

そして、福祉施設の庭を考えるワークショップを、昨年4月にやりました。僕も含めてミノワホームの職員は、既に虫の目になっているということもあり外部の人たちにも入ってもらいました。空間というアプローチから考えて、木陰も含めて緑や花を考えることのできる建築家、それから福祉を学ぶ福祉学部の学生と、建築を学ぶ日本工業大学の学生、東京農業大学に声を掛けましたら、みなさんゼミで参加してくれました。先生たちにとっては、学生に実践の場を与えることは大事なことで、産学連携という形も取れるので、僕からの申し出も受け入れてもらいやすかったようです。また私たち社会福祉法人としての公益性という意味でも、学生たちに対して学びの場を提供することは大切だと考えます。

こうして学生たちとうちの職員たちが、壁の向こうとつながっていくためには？ということを一生涯懸命考えるワークショップをやって、そして最終的にチームごとに入居者、ご利用者に対してプレゼンテーションを行いました。いろいろなアイデアが出されましたが、例えば、池があったらお年寄りや喜ぶんじゃないかという学生らしい発想による提案も、お年寄りから、池は車いすが落ちたら危ないよという駄目出しを食ら

ったという、現実との擦り合わせをしながら庭造りも考えていきました。

トップがしっかりと姿勢を示す

ある程度基本設計も出来上がり、庭を造りましょうという段階になったときに、7月26日に津久井やまゆり園での事件が起きました。防犯安全管理体制強化という指令が出まして、いつもうちに出入りしている業者が急にビデオカメラの話をし始めたりといった風潮になりました。特にうちは津久井やまゆり園から車で20分ほどの距離なので、あの事件のときは私も含めて職員たちも身近なこととして受け止めて、事件から数日後には献花にも行きました。とてもいろいろなことを考えさせられた事件でした。

この事件があって、職員たちには「怖いよね」と不安な気持ちが広がっていたようですが、それは障害者福祉の分野で起きたことで私たちとは別の世界の話というような受け止めもあって、自分事として捉えられていない向きもありました。そうした擦り合わせができていなかったところを僕はすごく危惧して、社内メッセージとして、A4、5枚ぐらいで自分の考えを全員に配布しました。

その中で、こんな状況の中で壁を壊すということ自体にアレルギーを起こしている職員もかなり多くいたので、「防犯上どうなんですか」と詰め寄られたこともあります。でも、これはトップダウンでしっかりと示していくものであり、さらに言えば、庭を造りましょうの前に壁を壊しましょうということを考えました。ほとぼり冷めてからやろうよという意見も出たのですが、強行しましたね。

壁を壊して介護施設と地域をつなげていきたい想いを発信

そして地域からも「ミノワホーム大丈夫か」「今こんなご時世でこんなときに大丈夫なのか」という心配の声が上がりました。そんなときに僕の中には、1989年のベルリンの壁崩壊の風景がふと浮かびました。地域と特養がつながる、西と東がつながる、というのは思想的に合っているなと思ひまして、僕らはパフォーマンスという面もありますが、8月16日に車の通りが激しい道路の脇で職員たちとともにハンマーを振り下ろして壁を壊していきました。25年間ここを守ってきて、一番反対をしていた施設長もしっかりとハンマーを振り下ろしてくれました。

例えば庭を造ることを見える化するのではなくて、壁を壊していくことをしっかりと見える化していくことは、僕たちは介護施設と地域をしっかりとつなげていきたいんですよというメッセージを地域に対して地道に発信していくことでもあったのです。道路を挟んで、施設の前にはガソリンスタンドがあり、そこにはさまざまな人が立ち寄るので、そういった意味でも地域に発信するにはいい環境にあると言えるでしょう。

何かちょっと変わったことをやっていると、そこを通るいろいろな人たちは「これはどうなっちゃうんだ」「建て替えか」といった話が広がったりすることにもなります（結局、壁を壊しているだけだったのですけどね）。そんなことを1カ月近くミノワホームがやっていると、地域の人たちは「どうなるんだ、どうなるんだ」と、興味を持ってくれて、庭を造っている段階では、そうした地域の人たちに花を植えてもらいました。それから苗木も植えてもらったのですが、これは、あの花はどんなになっているかなとかいうことを今後気にしてもらって、散歩のときにでも、ちょっと一歩立ち寄ってもらえるようになるといいな、という想いがあったからです。

庭を開き多角的なコミュニティの装置に

現在は、70メートルほどあった壁を壊して、施設の前はオープンな空間になりました。僕たちの法人はこ

の地域にいますよというメッセージを押しつけがましくなく伝えることにもなるかと思っています。そして、海開きならぬ庭開きをしました。チラシを 500 部ほど近隣地域にポスティングしました。そのチラシには次のようなことを書きました。

私たち福祉施設は壁の向こう側ではありません。この地域の中にいます。そしてみなさんと協働しながらこの地域の新しい福祉を見つけていきたいです。誰もがアクセス可能な空間を造り、地域と特養の精神的距離を縮めたい。私たちは地域の壁、隔たりを取っ払い、庭空間の在り方を再考しました。あらためてよろしくお願いします。

それだけで本当に集まってくれました。中には全然見たこともない人もいました。

壁を取っ払い、ベンチを置いたのですが、座れるということは非常に重要です。今まで、我が愛川町には〇〇酒店、△△商店などといったお店が真っすぐのバス通りで 500 メートル置きぐらいにありました。そこにはコカコーラのプラスチックのベンチとか、ポカリスエットのベンチなどが昔よくあったと思いますが、そのベンチには誰かしら、おじいちゃんや子どもなどが座ってゲーム（今でいえば DS など）をやっていたりしました。

そうしたお店が、多角的なコミュニティの装置になっていましたが、今は商店が弱体化し、商店街も空洞化してきており、座る場所も急激に減りつつあります。人が足を止めるきっかけがなくなっているとも言えるので、（単純な発想でもあるのですが）うちの施設では沿道に沿ってベンチを置いています。

地域の人たちが自然と交わることでできる環境を

施設の周りにあったデッドスペースには芝生を敷いたら、みんなが地べたに座るし、いすを置けばそこにも座る。入居者も勝手にひなたぼっこをしています。道路を挟んで前のガソリンスタンドの人たちにも、介護施設の営みが垣間見えて、それが地域の中の小さな風景になっていくことは、私たちだからこその地域貢献だと考えています。

いずれ私たちも年を取って加齢に伴う障害を体に抱えるようになっていきますが、そういった場を地域の中にちりばめておくことは愛川町全体のためにもなるのかなと考えています。壁を取っ払ったので、施設の前を通る保育園の子どもたちは庭で遊んでいるし、僕自身は犬の散歩で前を通るおじいちゃんとはよく話をするようになりました。実は、そのおじいちゃんが最近、コミュニケーションがとりづらくなっており、ちょっと認知症の症状が表れているかなと心配しているところです。ただ僕がそれに気付くことができるようになったということにも壁を壊した価値があるのではないかと感じていたりします。

また近所の子たちが、らせんの非常用の滑り台を遊びに使うようになっています。先ほどお話しした 800 人を集める大きなお祭りのように、1 年間の中で一発どーんと人を集めることだけでなく、そこで積み上げたカードを横に広げていくようなイメージで、子どもたちやお年寄りが日常的に図らずして自然と交われる環境をつくっていくことが私たちにとってはもっと重要ではないかと思っています。

また沿道に沿って、長さ 9 メートルにわたるプランターを作りました。地上から 75 センチの高さに上げているので、なかなか座位が保てない人でも立ったまま野菜を収穫し、その野菜でカレーを作ったりしています。またジュンベリーという実のなる木も植わっています。僕らはよく小学校の帰りに桑の実を食べましたが、食べると口の中で赤くなるので、互いにうわーっと見せ合ったりしていました。そういう原風景み

たいなものが持てるかどうかは、実は私たちの木の植える位置次第で変わってくるのではないかと思います。小学生たちには「食べられるんだよ」と言うと、つまんで食べているので、こちらとしては、してやったりという思いです。ネットフェンスも設置して、そこには車いすに座った高さで実が採れるようにボイセンベリーというベリーを這わせており、お年寄りと一緒にジャムを作ったりしています。

座れる場があることの大切さ

庭のオープン前のことですが、1人のお年寄りがベンチに腰掛けていて、足元を見ると家のスリッパを履いていました。そして、手にしたゴミ袋にはお札や薬の処方箋が入っており保護しました。実はこの人は3日間徘徊していた人でした。3日間徘徊していた人が、この前を通ったときに、れんがを積み上げて作った座れる花壇に腰を掛けたのです。

僕はアルマーニにいた時によく出張でイタリアに行っていましたが、ヨーロッパには公有地が非常に多い。お城の周りなどには、段があって座ることができるようになっている。新宿駅の前にあるNEWoMan（ニューマン）を見たときに、本を読むとか、寝そべるとか、お互いはたぶん知り合いではないのかもしれませんが、そういう空間を共有する心地よさを感じました。

そして、これが特養だとしたら、車いすで利用者さんが来たときに「こんにちは」というあいさつが偶発的に発生するような仕掛けは、虫の目では考えつくことができない。鳥の目で見て初めて、僕らがどういう機能を果たしていくとまちにとっても有益なのかと考えられる。うちの庭造りは、そんなことを考えながら、誰もが座れる場になるようにという想いで、Minowa座 Garden と名付けました。看板も庭に設置しており、先ほど言ったようにまちには外国人が多いので、英語の表記も並べて書いています。

壁が取り払われ地域が見守る

最後にちょっとエピソードを。施設の畑を作ったとき小松菜を植えたのですが、初めて植えた小松菜だったので、僕は出張帰りの夜中2時ぐらいに、この育ちっぷりが見たくてちょっと立ち寄って写真を撮りました。そこにちょうどおまわりさんが通りまして、近寄ってきてライトを当てて「きみ、そこで何をやっているの?」と言われたのです。それで「小松菜を撮っています」「こんな時間に?」と言われて、携帯をポケットにしまったら、「ちょっと今、何入れた?」と少々怪しまれました。

要するに、壁があったままでは僕が写真を撮っていても、おまわりさんにはおそらく見えなかったと思います。壁を取り払ったことで、怪しい動きをしている男がいるなどと思い、僕に職務質問してくれたことは、僕にとってはとても勇気づけられる出来事で、地域が見守ってくれているのだと改めて感じたエピソードでした。

以上です。ありがとうございます。

司会／小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21世紀かながわ円卓会議運営委員）

ありがとうございました。私は事前にミノワホームに行かせていただいたときに、ものすごく胸にグッとくる話を聞きました。ミノワホームで亡くなられた看取りの方を見送るときに、壁がなくなったことによってその光景が目に残り、道の向かいにあるガソリンスタンドの店員さんが思わず一緒に頭を下げて見送っ

てくれたそうです。これはすごいことだと思います。

特別養護老人ホームには、昔は霊安室の設置が義務付けられていて、私はそれにとっても違和感をもっていました。そこで散々暮らしたのに、亡くなったら裏からそーっと見送るというのが、私もすごく嫌でした。それをミノワホームでは地域の人と一緒に送ることで、その地域に住んでいた市民の一人であることを最期まで保障できています。そして、それは壁を取り払うことでもたらされたのだと実感しました。

それから、ここの庭には有名な桜があります。南足柄の桜だそうです、かわいい桜がたくさんあって咲く時期が少し早い。その桜を壁越しに眺めると、歩きながら道路の横にあるのを見るのとではまったく違う。そして施設の前を通りがかった人たちにとっても、ちょっと腰掛けてもいいスペースがあることで、みんなが楽しめる景色がそこにはあり、地域の拠点になっている。命の最期をオープンにしていくことが高齢者福祉の大切な仕事の一つだと改めて思いました。壁を取り払うことで、オープンになったハードに合わせて地域とのつながりというソフトの部分も充実してきていることがとてもよくわかりました。

お話の中で触れられていましたが、やまゆり園での事件が起こり、防犯安全管理体制強化の通知が施設宛てに厚労省それから県と市から来ました。そこに書いてあったのが、とにかく施錠、それから侵入者を取り押さえるためなのか、さすまたを備えるように、とのこと。「え？ この世の中、何が起るの？」とびっくりしました。本当は開放してオープンにして、これからの少子高齢社会においては福祉も特別なものではないよとガラス張りにする時代に入らなければなりません。それが急激に逆行しそうになり、神奈川の福祉はこんな貧困なものだったのかと思ってがっかりもしましたが、その問題点もしっかり捉えていて素晴らしいなと思いました。馬場さん、ありがとうございました。

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

早川仁美（地域のお茶の間研究所さろんどて代表）

地域の居場所「さいとうさんち」を始めたきっかけ
制度の狭間にいる人たちのニーズに応える
みんなで作り上げる空間
様々な不安、様々なニーズ。みんな誰かとつながりたい。
話を聞いてもらうことによる安心感
傾聴ボランティア養成講座を開催
孤立しない子育ての場：ほんそん子ども食堂「いただきます」
地域の牧師さんの協力を得て活動
色々な人が、色々な活動を
出会い、相談、食育の場
誰もが誰かの役に立ちながら、互いに支えあう居場所の力
日々広がる活動
「居場所」を地域で広める
新しいコミュニティをつくる

早川 仁美（はやかわ・ひとみ） 地域のお茶の間研究所さろんどて代表

地域のお茶の間研究所さろんどてでは、高齢者や赤ちゃん連れの親子が集う地域の居場所である「さいとうさんち」、妊婦と0歳児の赤ちゃんを育てるお母さんを対象に月1回、居場所を開放する「プレママと赤ちゃんの日」、居場所に来る人たちの話を受け止めるための傾聴講座、子ども食堂「いただきます」などの事業に取り組んでいる。

地域のお茶の間は、高齢者が胸の内を吐き出し、また若い世代とのかかわりを持ち、子どもたちを見守るなどの出番をつくる場となり、若い母親たちにとっても、子どもを通じた出会いの場となっており、子育て全般の相談もできるようになる。誰かが誰かの役に立つような、地域にいるさまざまな専門家をつないでいける居場所を目指している。



報告 ②

分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち

早川仁美（地域のお茶の間研究所さろんどて代表）

地域の居場所「さいとうさんち」を始めたきっかけ

皆さん、こんにちは。茅ヶ崎から参りました、地域のお茶の間研究所さろんどての代表をしております早川と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

このさろんどてですが、今年の4月に茅ヶ崎市の市民活動げんき基金を受賞し、その助成金を使って、地域で就労支援を行っている社会福祉法人「翔の会」の就労移行支援事業「PCグランマ」で働いていらっしゃる方にデザインをお願いして、可愛いロゴとホームページを作っていただきました。

私たちさろんどての活動は、さいとうさんちから始まりました。設立当初、まず、さいとうさんち運営委員会を立ち上げました。何故さいとうさんちを始めたかといえば、それは私たちがある問題意識を持っていたからです。

制度の狭間にいる人たちのニーズに応える

私たちと一緒に運営している仲間の中には、介護保険事業に携わっている仲間が沢山いました。訪問、デイサービス、保育、給食、配食サービスに従事している仲間が多かったのですが、日々の仕事の中で、介護保険を利用している/できる人はいるけれども、「利用できないけれども何かしらのニーズを抱えている人が沢山いるよね」と考えていました。そこで、「そのような人たちはどのように暮らしているのかな、彼らが行く場所って意外とないよね」と思い、制度のはざまにいる人たちのために何か居場所を作りたいなど考えるようになりました。

さいとうさんちは、茅ヶ崎駅から徒歩2分か3分ほどの、商店街や雑居ビルに囲まれた民家をお借りして活動しているのですが、そこが借りられるようになった理由として、ある利用者さん（斎藤さんという方）の存在が挙げられます。私たちは元々、生活クラブ・生協の運動を通してつながっていた仲間で、生活クラブの事業、つまりワーカーズコレクティブという枠組みを使って居場所を作ることを目標にしていました。しかしながら、何せ主婦ですし、そしてワーカーズコレクティブなのでお金がありません。みんな貧乏なので、どこか良い場所を借りることが出来れば良いなと思っていたところ、訪問、デイサービス、配食を利用していた斎藤リョウヘイさんという方が怪我をされて施設に入られることになりました。その方は一人暮らしだったので、彼の家には手すりがあり、入り口を入るとすぐにトイレもあり、奥の台所はリニューアルしたばかりですごくきれいで、ここを借りるしかないと思い申し出てみたところ、何と、貸してくれたのです。それが五年前のことです。棚からぼた餅のようなこの話がふっとわいたのはその年の4月頃で、6月には準備委員会を開き、8月にはオープンしてしまいました。現在、毎週水曜日の10時から午後3時、参加費300円でオープン当時からほぼ毎週開催しています。

みんなで作り上げる空間



こちらは、さいとうさんちのお家の中です。古いお宅ですね。二間続きで、手前が6畳の和室で、奥が床暖になっています。すごくいいですね。テーブルやソファもあったので、お年寄りの方で足の悪い方はここに座ります。調度品はほとんどそのまま配置しています。私たちが持ち込んだものは、茶筆筒などの小さい物と、カウンターのようなテーブルを二つ持ち込んだだけで、あとは全てお借りしています。ただ、座布団が少なかったので知人に呼び掛けたところ、10枚ぐらい持ち寄ってくださり、それを使っています。

10時オープンですが、おばあちゃんたちはそれより早く来ています。9時半に私が鍵を開けるために行くつとでに待っていて、早く来たおばあちゃんたちは中に入って準備をしてくれます。毎週カレーを作るのですが、1時間半ぐらいかかるので、カレーを待っている間におばあちゃんたちは世間話をしています。何でもカレーにしたかという、実は最初の頃はいろいろなものを作っていたのですが、「あら、カレーじゃないの？ここはカレーを食べられると聞いて来たんだけど？」と言われたので、「あ、そうなんだ。無理しているいろいろなメニューを考えなくても、毎週カレーでいいんだ。カレーも、カレー粉をいつも同じにしていたら、まず失敗はない。みんなもカレー作れるし」ということに気づき、それ以来毎週カレーです。

このサラダやカレーに使われている野菜は、ほとんどは市内に住んでいる方からのご寄付です。最初は買っていたのですが、ある時からおばあちゃんたちのネットワークを通じて「さいとうさんち」の活動を知ったようで、ご寄付を頂けるようになりました。

様々な不安、様々なニーズ。みんな誰かとつながりたい。

さいとうさんちの活動は高齢者のために始めたのですが、実は赤ちゃん連れの親子のニーズが高いことがわかりました。ある日、支援センターに貼ったチラシを見て、電車に乗って来た親子がいました。そこで、親子もこのような居場所を求めていることを改めて感じたのです。

先程の馬場さんの言葉を借りれば、これまで虫の目で見ていた風景を鳥の目で見てみたら、さいとうさんちの周りは新築のマンションが沢山建設されており、そこには赤ちゃん連れの親子が多いことがわかりました。そこで、「初めての子育てでとても不安」「引っ越したばかりで、お友達もいない」「実家が遠く、親や兄弟など頼れる人もいない」といった彼らのニーズに気が付きました。

そこで始まったのが「プレママと赤ちゃんの日」です。（部屋が狭く、トコトコ歩くような1歳以上の子たちが大勢来ると叱らなければいけないので）不安を抱え、話し相手を求めている妊娠されている方と、ゼロ歳児の赤ちゃんとその母親を対象にした集いを毎月一回、さいとうさんちを始めた翌年から開催しました。ここでは、お母さんたちが来て得したと思えるようなほっとできるものを提供しようと、500円ワンプレートランチを出しています。

最初は実はベビーマッサージみたいなおしゃれなことをやってみました。しかし、そうすると、どうして

も参加費はもう少し取らなければならず、ベビーマッサージをするにはベビーオイルも買ってもらわなければなりません。また、普段の生活における子育てのワンポイントレッスンのようなものがないなと思っていました。

そんな中、実はお母さんたちは今どきの歌は沢山知っているのですが、私たちが育ってきた時に学校で習ったような季節の短い歌などを知らないことに気が付きました。そのため、海の歌や雨の歌のような短く、子どもに響きやすい歌を歌ったり、おうちで子どもをあやせるような手遊びや体遊びなどを 15 分程行い、その後はランチタイム、残りの 1 時間程はママたちのおしゃべりタイムにしました。今の若い人たちは LINE やフェイスブックなどにとっても長けているので、メールで参加予約を受け付けています。

話を聞いてもらうことによる安心感

さいとうさんちで高齢者やプレママを通して赤ちゃんやお母さんたちと関わってきて、お母さんたちも普段一人で食事をしていることがわかりました。パパの帰りを待って食事するというよりは、子どもに食べさせ、自分も急いで食べている状況で、ママたちも初めての子育てでとても孤独で不安でした。一方、高齢者は自分が老いていく不安がありますし、連れ合いを亡くした不安も大きいです。引っ越してきて友達がいないという先ほどの若い人もそうですが、高齢者も呼び寄せ介護で来られている方がいますので、そのような方たちもとても孤立感を抱えています。知らない町で生活するのにものすごい不安感があるようです。

そのような中、誰かとつながりたいな、おしゃべりしたいな、誰かに聞いてもらえるといいなと思いながら、さいとうさんちでは沢山の人が長い間おしゃべりをされています。しかし、私たちは普通の主婦なので、この思いをどう受け止めて、どう処理していけばいいのかわかりませんでした。一緒につらくなってしまうこともあったので、話を聞いてもらってよかったと思ってもらえるようにしたいと同時に、自分たちも学び、そしてそのような人たちの輪を広げていきたいと思って傾聴講座を開くことにしました。

傾聴ボランティア養成講座を開催

たまたま、ここでもとても良い出会いがありました。藤沢にある NPO 法人シニアセラピー研究所の鈴木しげ先生という方が、かながわコミュニティカレッジというところで傾聴講座を開催しており、そこにスタッフが学びに行きました。傾聴のはずですが、自分を知って自分を肯定することによって初めて人の話を聞けるようになるということをワークショップ形式で教わり、自分がハッピーになれる傾聴講座だったという話を聞いたので、そのような傾聴講座を継続的に開催したいと思い、市民活動げんき基金という助成金事業に応募し、採択されました。

茅ヶ崎市のげんき基金に採択されると、年に 2 回程広報紙に掲載してもらい、全戸配布してくれるので、私たちは広報費をかけることもなく、市内の皆さんに知ってもらうことができました。そして、市のお墨付きの講座なので、主任児童委員さんや民生児童委員さんなどに堂々とチラシを配付したり、市内の掲示板にも貼ることが出来ました。これはすごく良い制度だと思っています。この制度を利用して 2 年間傾聴講座を行いました。

鈴木先生の他にもうお一方、澤村先生という方もお招きして、2 人の先生に講師を務めて頂いています。傾聴ボランティアの養成というのは荷が重く、ボランティア養成はかなりハードルが高いと思っていたのですが、NHK 放送学園でも講師をされており、日常傾聴が得意な澤村先生に優しい語り口調で講座を行ってもらうことで、皆さんに気持ちよく講座を受けて頂くことが出来ました。

孤立しない子育ての場：ほんそん子ども食堂「いただきます」

このように傾聴講座も行ってきたのですが、まだまだ来られていない人たちがいたので、子ども食堂を始めました。2014年のことです。子どもに関わることがやりたいと思ったとき、子どもの貧困や不登校といった課題が周囲で見受けられたのですが、うちの息子も実は不登校になってしまったのです。発達障害のグレーゾーンでもありました。

私の家庭のことを少し話しますと、私より四つ上の兄は不登校になり高校を中退し、長い間引きこもりの生活を送っており、去年はアルコール依存症になりました。ライフサイクルにおいていろいろな問題を抱えて生きていたお手本がすぐそばにいたのですが、それがうちの息子にもやってきたのです。どうしようと思ったときに、「一緒にみんなで解決、仲間で解決してもらえような場所を自分でつくろう」と思いました。そして、周りを見渡すと、同じような悩みを抱えている人が沢山いました。私はその時、PTAの会長をしていたのですが、会長がポロっと言うと、「実は・・・」と他の人たちが周りでそこそ言ってきてくれるのです。

本当にすごく多いのだなと思い、解決するために何をやろうかと考え始めた時、子ども食堂をやろうと思いました。何しろご飯を作るのは得意だし、ご飯を作って食べてもらおうと、みんなが元気になるということはわかっていたので、子どもにもご飯だと思ったのです。

そんな中、NPO法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークというNPOが、豊島区で行っているあさやけ子ども食堂がテレビで紹介されました。「これだ、同じことをやっているじゃん」と思って見に行きました。そうしたら、さいとうさんちの子ども版のような感じだったので、「何だ、私たちやっているし、すぐできるね」と思ってアイデアを持ち帰ったのですが、仲間たちから合意が取れませんでした。「子どもの貧困って本当にあるの？見えない、わからない。そんなに不登校の子って増えているの？」という意見が出ました。普通に暮らしている人たちには見えなかったし、わからなかったということが明らかになったため、一年間学習を重ねて、やっと次の年にほんそん子ども食堂「いただきます」を始めることが出来ました。

地域の牧師さんの協力を得て活動

最初は毎月一回、第3木曜日に食堂のみを行っていましたが、今は月2回、第1と第3木曜日、そして、その前の時間を使って小学生の居場所を提供しています。今利用しているのは数人ですが、ぼちぼちやっていけばいいかなと思っています。子どもの参加費は300円でしたが、沢山来て下さるようになり、お金も回っているので、子どもは200円、大人は300円で実施しています。

場所は少しさいとうさんちから離れていますが、駅から歩いて行ける場所が良いということで、日本ホーリネス教団茅ヶ崎教会をお借りしています。この時も実はさいとうさんちで行うことを考えていたのですが、さいとうさんちは駅近で町中にあるため、どんな人たちが集まってくるか不安だと、オーナーがとても心配しました。空き家はオーナーとの合意がなくては様々なことが出来ないのどうしようと悩んでいたところ、たまたま私たちのスタッフがここの教会の信者さんだったので、牧師の先生にお話してみました。その方はその地域で小中学校のPTA会長などを務めていたり、お子さんが5人もいて子育てにとっても関心の高い方だったので教会をすぐに借りることが出来ました。本当にラッキーでした。

教会の集会室は約40人程が一度に食事が出来るほどの広さがあります。ここには近隣マンションに住んでいて、お友達がいないからという理由で来てくれる人もいますし、今までさいとうさんちでつながってきた親子たちが来ていました。そして、どんどんお友達の輪が広がり、今は親子が50人ほど、ボランティアが

10 人、スタッフが入って多いときで 80 人弱の人が集まる子ども食堂になっています。

色々な人が、色々な活動を

ある日は、パパと子どもさんという組み合わせの方が 2、3 組来ました。「今日はママが遅いので僕が」と、そのような利用の仕方も今時だと思っています。ママたちを見てみると、専業主婦の方と、今増えてきている保育園帰りの方がいらっしゃいます。教会のすぐ目の前に小規模保育園も出来たので、その方も利用するようになってきました。なぜなら、牧師の先生が駐車場を小規模保育園に貸してあげているので、その方たちがのぞいていかれるようになって、利用されるようになったからです。

また、文教大学 3 年生のゼミ生が入ってくれて（初めて参加してくれた学生が 3 年目になったので、代替わりで新しいゼミ生も入ってくれています）、子どもの嫌いなものが読み聞かせによってどのように変化していくかというゼミの研究にも使っています。

子ども食堂は全員がボランティアです。毎回 10 人程のボランティアが入っていますが、スタッフは 1 人か 2 人です。それから、こちらで頂いているお野菜は、教会関係者のサカマキさんという方から頂いています。さいとうさんちでも頂いているのですが、楽庵という地域活動支援センターで高次脳機能障害の方たちが作っているお野菜を寄付して頂いています。

子ども食堂から派生した取り組みとして「思春期カフェ」があります。これは、今来ている子どもたちが思春期に差し掛かり、「思春期の問題はすごく大きい」と感じたため、保護者や支援者が思春期の子どもたちの姿や、この時期に起こりやすい課題に関する学びや思い、情報などを共有し、孤立しない子育てが出来るように始めました。うちの息子もまだまだ高校 2 年生で、毎日が不安です。無能だとか、ばばあだとか、死ねとか、毎日あいさつ代わりのように言ってきます。それも私に甘えているから言えるんだと、やっと肯定的に捉えられるようになったところです。3 回しか利用出来ないげんき基金の 3 回目の事業は傾聴講座ではなく、この思春期カフェに使っています。

出会い、相談、食育の場

地域のお茶の間の効果は、胸の内を吐き出せることや、なかなか関わりがなかった高齢者世代と赤ちゃんを持つ若い世代が、ここでお互いに触れ合うようになり、出会いの場になっていることです。高齢者の方は本当に自分の孫やひ孫のように感じながら、お母さんたちに接しています。また、介護予防の効果もあると考えており、杖をついて来ていた人が今は杖を飾りのようにしてすたすた歩いて来ます。また、スタッフの中にはケアマネもいるので、利用者さんが家族や介護の相談をする場にもなっています。実はそのケアマネが、「以前（さろんどてに）来ていた人が私の担当になったのよ」と言いました。そこにはお友達もいたので、前の暮らしや今の生活状況を家族や本人から聞かなくても様々なところから情報を集めることが出来たので、その人のプランをより良く考えてあげることが出来るようになりました。

また、私も昨年保育士の資格を取り、他にも保育士資格を持つスタッフがいるので、子育てに関する全般的なことや幼稚園や保育園の入園相談等も受けています。

それから、食育の場にもなっています。高齢者の方はご自分で作られるものはどうしても簡単なものになりますし、外で買うことが多くなってくると、なかなか食事が楽しめなくなってしまうようです。ここではカレーはいつも一緒ですが、サラダだけは工夫して作っています。ドレッシングも手作りで、いろいろな味のドレッシングを作ります。ここで野菜や料理の作り方を教えると、お家で作るようになっていきます。

誰もが誰かの役に立ちながら、互いに支えあう居場所の力

さいとうさんちや子ども食堂の経験から、食事の力はすごく大きいと思うようになりました。そして居場所の力、安心して過ごせる場所があることは、こんなにもみんなを元気づけられるのだということも感じるようになりました。人とつながって、その中で自分が認められていることがわかると、自己肯定感を持てるようになります。私たちはそこでは支援する立場ではなく、一緒に地域で生きる仲間としてここで関わることを大事にして居場所をつくっています。

地域には〇〇士（師）という名前が付かなくても様々な専門家がいます。来てくれているおばあちゃんの中で手芸がすごく得意な方がいて、それを教えてあげたり、自治会で様々な活動をしてきた人が、「あ、あその誰々さんね、この人につなぐわ」と言って、つないでくれることもあります。地域には肩書きがなくても色々な専門家がいて、誰かの経験は絶対に他の誰かの役に立っていると思うので、彼らを私たちがその場でつないでいけばいいかなと思っています。地域で支え合うことは、すごく大切だと考えています。つながることは、支え合う関係づくりの一步だと思っています。

日々広がる活動

2016年の実績を少しご紹介します。一昨年1,675名だった参加者数が昨年は2,340名になりました。寄付とバザーの売り上げについて、寄付は倍になっています。さいとうさんちで行うバザーでは、1枚100円で洋服を売っています。おばあちゃんたちが着なくなった洋服を持ってくるのですが、最初のうちはそれらの洋服を捨てていたそうです。「もったいないから持ってきて」と伝え、それが目の前で100円で売れるのを見て、すごく嬉しがっていました。「自分もこの場をつくっている1人だ。その場にお金は寄付できないけど、洋服の売り上げで貢献出来ている」という実感がすごく励みになっているようです。やはり、してもらえばかりはしんどく、自分も役に立ちたいと思っているようです。

全体の参加者数2,340名中のうち、さいとうさんちの参加者は1,403人、ボランティアは114人です。プレママと赤ちゃんは月に1回で、104組の方が来ました。子ども食堂は、2015年の秋から開催し、その数は5回でしたが、2016年は15回行い、参加者は約700名になっています。見学の方も本当に多いです。傾聴講座も茅ヶ崎で延べ103名の方が講座を受けて、様々なところで活躍されています。居場所の力や地域に住む様々な子どもたちを包括的に支える重要性に関する映画上映もしたのですが、映画の力はすごいですね。映画を2回上映するだけで200の方が見に来てくれましたし、映像やドキュメンタリーで見るとすごく感動します。

「居場所」を地域で広める

最初の頃、モデルでさいとうさんちを始めましたが、ここを長く続けるというよりは、地域にこのモデルを広げたいという思いで活動を続けています。そのため、それが広がっていった例をご紹介します。

ここはスタッフがデイサービスをしている場所の空きスペースを利用して行っている地域の居場所です。香川という場所で行っているのので、「かがわ7丁目」と呼んでいます。デイサービスの要支援の方たちは、週に1〜2回ぐらいしか利用できないので、もう一回はここで過ごすという形をとっていて、デイサービスでは制限のあるようなことも



行ったり、一緒に食事作りもしています。

もう一つ、元民生委員さんが自宅を開いて、歩いて来られる人たちを招いて一緒に食事をしています。とてもお料理が上手で、1 回 500 円でバランスのいい食事を提供しています。利用者さんには呼び寄せ介護で来ている方たちがとても多いです。青森や山形から来た人がいらっしやり、田舎の話でとても盛り上がっています。

それから、地域コミュニティ制度のまちちから協議会の委員をして、地域へ取り組みを広めようとしています。PTA 会長を務めたご縁でその後も地区の推薦委員として協議会の委員を務めているのですが、そこでさいとうさんちと同じ取り組みを行うようになりました。

もう一つは学習支援です。私の息子が通う中学校では、息子の学年に不登校者が約 40 人もいました。この子たちの課題を解決するために何かしたいなと思っていたところ校長先生から、学校で学習の穴埋めをしたのだが、なかなか学校の先生もとても忙しくて時間がない、どうしたらいいかと相談を受けました。そこで、「地域でやります！」と答えました。まちちから協議会は事業認定されると市からお金をもらえるので、同じ課題を共有していた地域の人たちと一緒に始めました。今は中学 1 年生と 2 年生 20～25 名程集まっています。

新しいコミュニティをつくる

今後のことですが、私たちはいろいろなことで支えられて生きてきました。1 人では絶対生きてこれなかったと思います。でも、家族の単位も小さくなって、支えてもらえる人たちもだいぶ少なくなってきた、いろいろなことを自分で解決しなさいと、自己責任を求められていると思います。しかし、これは変えていかなければならないと思います。これだけ多様化し複雑化してきた課題は、自分たちだけで解決出来ず、新しいコミュニティを作っていかなければと思っています。居場所は新しいコミュニティの始まりですし、1 年前の円卓会議で宮本太郎先生が言っていた「新しい家族の縁、新しい地縁、新しい就労縁」を私たちは作っていると思っていますし、これをさらに茅ヶ崎市内に広げていきたいと考えています。ご飯を食べて居場所を作るという割と簡単なモデルなので、それをみんなが町の中で広げていってくればいいなと思っています。

以上です。どうもありがとうございました。

グループディスカッション

～分断を超えるために～

参加者のみなさんとともにグループディスカッションを行った結果を
討議者（以下）の方から発表いただきました。

討議者

三浦 知人（社会福祉法人青丘社 事務局長）

表 安（ぺいあん）（NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター 理事長）

加藤 忠相（株式会社あおいけあ 代表取締役・NPO 法人ココロまち 理事長）

原 美紀（NPO 法人びーのびーの 事務局長・港北区地域子育て支援拠点どろっぷ 施設長）

名里 晴美（社会福祉法人訪問の家 理事長）

司 会

小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長／21 世紀かながわ円卓会議運営委員）

<三浦>

（馬場さんの話で）僕が印象に残っているのは、出ることを閉ざされた中で働く職員の感覚のほうが心配だと。出て行っちゃうこともあるけれども、パチンコが好きだったりとか、子どもを育てたころの思いを持って家に足が向いたりとか、そんなことをする行為を通じて、働く人たちが一人一人の思いに向き合う必要があるみたいなことは非常になるほどなと思われました。とりわけ植木の 30 年の生活歴のある人が、庭に出て花が咲けるような専門的な技術をちゃんと提供して、周りに教えながら、自分の役割が毎日できたみたいな話は、むしろとてもステキな話だと思って聞いていました。



それから、日本語指導のグループから、さらに外国人の居場所づくりをされている人からもコメントいただきまして、特に居場所づくりというところでは、一番まなざしだとか、人が本当に来ていただける思いがちゃんと伝わって、居場所ができるというための苦労みたいなものはあるよねという話を共有しました。特に、やはり支援するだとか、介護するだとかいう人が、ちょっと上から目線なものがあるわけで、お互いに居場所というところでは、共感とかね、居心地の良さとかというふうに考えると、そういうボランティアをしていますよとか、地域代表ですよという人たちが、逆にそういう来てほしい人たちの邪魔をしているという場面も多々この業界にはあるなということは今日感じました。報告になっていないかも。

<斐>

マイノリティとして入ってくる人たちは、いろいろなトレーニングを受けるけど、マジョリティとして引き受けるほうは何のトレーニングも受けないで、受けてやったじゃんみたいなおしまいに。資格取っているでしょう、あんた、仕事としてやればいいじゃないというところで終わっているというのは、すごく寂しい話だね。やはりマイノリティの、別に外国人だけじゃなくて、高齢者であっても、一人親の人たちであっても、障害者であっても、マイノリティは本当にいろいろなことを努力している。みんなと働けるように、みんなと過ごせるように、頑張っている分、マジョリティ社会もやはりみんなと生きていかれるようなトレーニングをたくさんたくさん受けてほしいなと、そんな話を雑談でしておりました。



<加藤>



本当の意味でその人のつらい気持ちがわかることはまず人間はできないので、本当の意味まではわかり得ない中で、僕は専門性というものにしがみついて仕事をしています。結局、カテゴライズしたり、相手を診断したりすることによってさらなる分断を招いていて、自分がどんどんマイノリティ化されていくような社会になっていないのかなというのを感じるという話です。

...

広く知るのだけど、もっと身近であっていいんじゃないかなというところを、今、馬場さんが言っていたけど、やって始めて味わうことができる、シェアできるという話をしていましたが、社会が失敗を許さないということをものすごくしていますよね。

やまゆり園の問題も、おそらくカメラを付けろだとか、壁を築けだとかという話というのは、県の担当者が、それをやっておけば自分は失敗しない、怒られることはない、社会から責められることはない。でも、結局、人間というのは、失敗をして初めて成長することができるし、物を、例えば家を建てるなら失敗しないほうがいいし、金をつくるのは失敗しないほうがいいけど、おそらく今つくろうとしているのは社会の問題のはずなので、失敗する中で、その中で人材が育ってくるわけです。・・・ちゃんと人を育てるという意味で、失敗を許さないのではなくて、包容力とか包括力のある社会を育てるための人づくりをしていかなきゃいけないのじゃないかなと思いました。

...

たまたま多いほうに属していたというだけであぐらをかいていて、先ほどマジョリティの人の勉強は必要だという話をしていましたが、まさに偶然の人がマジョリティ、偶然マジョリティにいる人たちをどう勉強させるのか。マイノリティに関わっている人たちは、たぶん勉強しようとしたりとか、学びの場に出てこようとするのだけど、これを自然に地域の中で、学べる地域というキーワードはこれまでもありましたけども、神野さんの言葉の中に学べる地域を地域の中にどうつくっていくか。その学ぶというのは、こういった討議の場である必要はないと思うし、自然と知ることができる、発信をして、誰かが発信をすることを聞くのではなくて、こういう人いるよね。こういうことで困っている人、いるよねというのが自然と見えるのが大事ではないかなと思っている。

...

要するに分けられていることによる怖さというのではないのかなと感じます。だから、ただ、それは国がやってくれることではないですので、意識のある人たちがどんどん変えていかなくてはいけない。突破して示してって、それをどう広げてくれるのかというのを、手を組まないといけない時代なのかと思うので、キーワードとしては、自分の専門性からはみ出していくこと。

<原>

困るということ自体が見えなくなるということ。本当に今いろいろな事件が起きてますが、起きてからご近所の方々にインタビューすると、「あの家はみんな幸せそうにしていました」みたいなコメントが寄せられる悲しい事件がいっぱい起きていると思うのですけど。

...



合意形成というのが組織の中だととても難しい。やはり制度とか、施設と箱物、サービスができてしまうと、そこを変えていくというのはなかなか難しいし。でも、そこを、保育所をやられている代表の方は、やはり代表の意識はすごく大きいよねというお話もしてくださっていて、どんなに形を経てきても、変わらないものをしっかり持ち続けることだよねという話では、やはり得られたものと失ったものというものを、しっかりバランス良く確認していくこと。さっきの馬場さんでいえば、虫の目、鳥の目の両方のバランス感覚というものをしっかり対応しながら勝ち得ていくという、そこが合意形成ではないかということを私はこのグループディスカッションから教えてもらいました。

<名里>



講師の早川さんが入ってくださっていたので、いろいろな人がその居場所として本当に集まりやすいような、気軽さみたいなことが大事で、そういうところにルールはなければならないほうが良いというようなお話をいただいたりしていました。でも、そういう、なるべく敷居が低く、いろいろな人が集まってくると、本当にいろいろな人がいて、それを気にするかというようなところがすごく気になるような方とか、それはルールを決めないといけないんじゃないかというようなことをおっしゃる人がいるとか、やはりそれは人が集まったらそういうものですよねということではあるのだけど、でも、それはいいのよというふうに言ってしまうので、そういういろいろな不安とか心配とか、気になるところとかがある人のお話も誰かがちゃんと聞いて、それを特別なことじゃなく、みんなの問題としてというか、みんなでそこは共有しようねみたいにしていくことが大事ですよ、みたいな話になりました。

...

私のところのグループホームには、ヘルパーさんという、福祉のことをそんなにやってきたような人ではないような方が、100人ぐらいの方が関わってくださって、本当にこれからはそういう専門家でございませうというような人じゃない人が関わって、一緒にやっていかないと、やっていけなくなるだろうと思うので、いっぱいいろいろな人が気軽に入ってきてくださいと思うのだけど、でも、やはりある意味、お仕事として入ってきてもらうと、ここは決まり事で、ここはこうしてくださいねということもやはり出てきてし

まうところの、その案配が難しいというか、何でもオーケーというわけにもいかないところが難しいです
ねというようなお話もしました。

<小川>

いろいろな施設を見ていたけど、資格があると思えるような人に出会ったことがないと。それくらい特養はひどかった。本当に。何がって。私、お風呂入るのに、裸でずらっと 20 人が並んでいるというのを見たときに、これが老人ホーム？と思いましたよ。・・・ そのときに私は福祉の専門性というのにもものすごく不信を持ちましたね。それはこの業界に施設長として、あるいはこの社会福祉法人に関わりながら、ますますそれがひどくなってきた。

・・・

それくらい戦わないと、福祉の価値観というか、社会保障の価値観というかな。その価値観って何にも変わらないなと思っていて。その意味で、早川さんとか馬場さんとか、それからここにいる皆さんの実践とか、三浦さんもそうだし、加藤さんもそうだけど、やはり加藤さんが言ったように、率先してかち割っていかないと、それでどんな結果が出るか、それはわからない。けれども、のみ込まれるよりはやらなければならない。それがせめて自分ができる命を守ることだったらと思いました。



先ほど人材育成と、育成という言葉はあまり好きではありません。お互いに参加して気付いて、ああ、自分も考え直さなければ、学んだとか、得したとか思うことがあるわけで、お互い様だと思う。けれども、これから市民力、市民が持っている力、それから資源と、専門家と思う人がたくさんいるので、その人たちをどうやってうまく使うかですね。やはり持っていない、学んできたものは必ずそれぞれにありますので、その人たちがいかに機能してもらうか。それは行政マンであってもそうだし、政治家でもあってもそうだと思いますけれども、市民がどれだけそれを使うかが大事かなと思います。そこを超えていかないと、分断というのはやはりなくならないかなと思いますので、せめてここに集った人たちとは一緒にそのことも含めて議論を深めていきたいと。

（以上）

③【シンポジウム】

かながわから「頼り合える社会」を
つくるために

11/11（土）@湘南国際村センター（葉山町）

樺山 紘一（印刷博物館館長／東京大学名誉教授）



皆さん、おはようございます。本日は暮れも近づいております週末に、湘南国際村までお出でいただきまして誠にありがとうございます。21世紀かながわ円卓会議の運営委員を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

事務局に聞いたところでは、行政の関係者をはじめ、社会福祉法人、NPO等、さまざまな分野から多数、地域でご活動の方々が大量ご出席くださっていると伺っています。社会の中核で活動している皆さまにご参集いただいたということで、大変力強く思っております。

本日は11月11日という、1年のうちで1が横並びに4つも続く日ですが、中国では独身の日というそうです。それぞれが独立して、一本ずつ立っているということなのではないでしょうか。大変なフィーバーだとニュースで報道されておりますが、一方私どもは本日、この湘南国際村にて1日頭を使おうという次第です。

さて、この21世紀かながわ円卓会議ですが、さかのぼれば西暦2000年3月から開催してまいりました。これまでの間、大震災によって中断したことはありますが、毎年このような円卓会議を開催してまいりました。テーマは基本的にはグローバリゼーションを巡るさまざまな問題、あるいはその中からとりわけホットな課題を設定しながら、これまで17年間、継続してまいりました。当初の議論では、グローバリゼーションとは何だろう、あるいは、その結果として、さまざまな波及効果が及んでいる事柄について考えてまいりました。そして毎年、議論を積み重ねていく中で、とりわけグローバリゼーションの負の側面として起こる、コミュニティの衰退や地域の独自性や多様性の喪失といった懸念についてこれまで議論してまいりました。

円卓会議では、昨年度と今年度は「神奈川のコミュニティとグローバリゼーション」という2カ年にわたるトータルテーマとして掲げ、じっくりと掘り下げて議論するために、このような機会をつくってまいりました。そして、社会的コストの負担のあり方や地域コミュニティへの期待と可能性等々について議論してきたところでございます。

本年度は3回シリーズとして開催しておりますが、本日ご出席の方々の中には、1回目あるいは2回目も参加されたという方もいらっしゃるかと思います。1回目は6月の講演会、2回目は7月の勉強会とそれぞれ違った形式で行ってまいりましたが、この湘南国際村で行う3回目は、言うならばシリーズ全体を締めくくる総括討論となるものでございます。

本日全体のプログラムはお手元の資料をご覧くださいと思いますので申し上げますが、午前には井手英策さん、午後にはびーのびーの事務局長の原美紀さんにもお話をいただきながら、会場のみなさんとも議論を深めていきたいと思っております。

今回の円卓会議の開催にあたりましては、神奈川県や一般社団法人インクルージョンネットかながわなど数多くの団体の共催、協力あるいは後援をいただいております。これらの方々に心からお礼を申し上げる次第でございます。本日より、多少長丁場とはなりますが、実りある円卓会議となりますよう祈りまして、ご挨拶とさせていただきます。どうぞ一日、よろしくお願い申し上げます。

「経済」の視点から見た地域社会～自己責任社会を超えて～

井手英策（慶應義塾大学経済学部教授）

はじめに

「経済の失敗」＝「道徳の失敗」

憲法 25 条と 27 条の不幸な婚姻

現役世代は「自己責任」

自己責任で将来不安をなくするのが日本社会

21 世紀は日本史上、四度目の人口減少が始まる

共通ニーズ＋個別ニーズ＋顕示的消費をお金で満たす「経済の時代」

世界的に縮小していく顕示的消費

経済がすべてを決める時代は終わる

経済とは物質的欲求を互酬・再分配・交換という 3 つの手段で満たすこと

「公共の経済」である財政

共通ニーズを財政と地域社会でどのように満たしていくのか

財政や行政が何をやるべきか

保障の場（公）や生活の場（共）が小さく生産の場（私）が大きい日本

3 つの領域の重なりが広がっていく時代

損得を超えて共通ニーズを充足させるために

公共私のベストミックスと市町村のプラットフォームとしての役割

社会を共同と連帯でつくり替えていく

車の両輪としてどこを財政が引き取り、どこを地域社会が引き取るべきなのか

「福祉を地域にひらく」

最期は地域の一員として死んでいく

井手 英策（いで・えいさく） 慶應義塾大学経済学部教授

1972 年福岡県久留米市生まれ。95 年東京 大学経済学部卒業。2000 年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。日本銀行金融研究所、東北学院大学、横浜国立大学を経て現職。専門は財政社会学。著書に『経済の時代の終焉』（岩波書店）、『18 歳からの格差論』（東洋経済新報社）、『分断社会ニッポン』（共著、朝日新聞出版）、『財政から読みとく日本社会』（岩波ジュニア新書）他。最新刊は『大人のための社会科—未来を語るために』（共著、有斐閣）。2015 年度大佛次郎論壇賞、2016 年度慶應義塾賞を受賞。



問題提起

「経済」の視点から見た地域社会～自己責任社会を超えて～

井手英策（慶應義塾大学経済学部教授）

はじめに

今日は、問題提起として冒頭 40 分お話をさせていただくということになっていますが、実は、最近仕事が忙しくて、正直疲労困憊しているはずなのですが、お世辞でも何でもなく、果てしなく今日は気分がいいのです。なぜかはわかりません。とってもいい会になるような気が心の底から今しています。

僕は 40 分かけて問題提起をさせていただきますが、それを受けて、みなさんと可能な限り今日は議論させていただいて、僕自身の理論をもっとより頑健なものにしていきたいと思っていますので、プログラムの随所にみなさんに対する僕の質問や疑問のようなものを織り込んでおります。

今日のはかぎっこ付きの「経済」の視点から見た地域社会というタイトルを付けています。これは今日、ぜひみなさんと共有したい見方なのです。経済って何なんだろう。お金もうけなのか、交換なのか。実はそうではないのが経済ではないのか。だから、その意味でのかぎっこ付きの「経済」としています。

「経済の失敗」＝「道徳の失敗」

みなさん、大本ってご存じですか。新興宗教ですが、その大本の教祖は出口なおという女性です。彼女は明治の初めにこういう宗教が出てくるのですけれども、その出口なおが神がかって、このようなことを言います。「外国は獣類の世、強いもの勝ちの悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ。是では国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へなおしを致すぞよ」と言うのですね。そして、この大本という宗教を開いていきます。ここで注目しておきたいのは、外国という言葉が出ています。なぜか。開国をして、外国の商品が入ってくるようになって、国内の産業がズタズタになります。これはこ

「経済の失敗」＝「道徳の失敗」

・ 大本教祖・出口なおの「神がかり」

「外国は獣類の世、強いもの勝ちの悪魔ばかりの国であるぞよ。日本も獣の世になりて居るぞよ……是では国は立ちては行かんから、神が表に現はれて、三千世界の立替へなおしを致すぞよ」（安丸良夫『出口なお』）

→ 通俗道徳（勤労・儉約・分度・推譲・・・）を大事にしたのに没落した日本人の姿（＝江戸末期・明治期は新興宗教の勃興期）

→ この通俗道徳がしぶとく生き残る

の円卓会議のテーマでもあるグローバル化と関係している問題です。そして、出口なおは商売に失敗して没落していくわけです。破産します。

しかし、その彼女は、スライドの下に書いている「通俗道徳」——我が小田原の尊徳先生の教えに従うならば——勤労、儉約、あるいは分度ですね。分度は身の程というか、身の丈というか。推譲というのは自分の成功を他者に譲るという精神です。これを安丸さ

んという歴史家は日本人あるいは日本社会の「通俗道徳」と呼んだのですが、この勤労や儉約をとにかく大事にして、一生懸命働いた人が出口なおだったのですね。ところが彼女は、強い者勝ちの悪魔ばかりの国に敗れて、そして破産してしまいます。

経済的に失敗した彼女に対して、周囲のコミュニティの人たちはどう振る舞ったか。僕らの常識でいうと、仲間が傷ついたときには助け合いだから、その仲間を支えようとするのではないかと、言いたいところですが、このコミュニティの人たちはそうしなかったのですね。どうしたか。「おまえは真面目に働かないから失敗したのだ。儉約せずに無駄遣いをするから」「身の程を知らずに分不相応な暮らしをやったからおまえは失敗したんだ」と言って、経済的な失敗者である出口に対して道徳的な失敗者として周囲が罵ります。そして彼女はおかしくなって、今でいうと精神疾患なのかもしれませんが、神がかってしまい、先ほど紹介した言葉を口走り、宗教を開く。

憲法 25 条と 27 条の不幸な婚姻

実は、江戸時代の終わりから明治時代初期という時代には次から次に新興宗教が生まれました。僕はなぜこの物語から始めたのかというと「今これに近い状況が日本社会にありますか」ということをみなさんに問いかけたかったからです。この経済的な失敗を道徳的な失敗と読み替えて攻撃をする。例えば生活保護利用者に対して、「おまえ、本当は働けるくせに働けないふりしているだろう」「怠けたから、勉強しなかったから、サボったから、おまえ、そうになっているんだろう」といったような自己責任社会の在り方と、この話は紙一重ですよ。弱者に対して慮るのではなく、コミュニティの一員がその人を道徳的な失敗者として罵るというカルチャーを僕たちはどう考えるのか。

そのときに、この近世のイデオロギー、江戸時代の発想はいまだに続いています。一つだけみなさんにお示ししましょう。憲法 25 条はみなさん、知っていますか。これは生存権といわれますよね。生存権は、健康で文化的な最低限度の生活ができるというものです。

一方で 27 条は意外に注目されませんね。これは何かというと、勤労の義務です。憲法の中に勤労を義務として書き込んでいる国はおそらく日本と韓国しかないのではないかと思います。就労や労働はあったとしても、勤労が義務の国というのは珍しいのです。

しかも、松本烝治委員会といって、日本の憲法を政府がまず素案を作るわけですね。その素案を作るときの委員会、松本委員会というのがあって、この中で左派系の人がこういう発言をしています。いいですか。これは保守派、右派の議論ではない。左派がこう言っています。勤労の義務は「働カザルモノハ食フベカラズ式」の考え方だと言います。どういうことか。「働キタル者ハ生存権ヲ保障セラレネバナラヌト云フ考ヘデアル」と言うのです。25 条と 27 条は

「働かざるもの食うべからず」

- 日本国憲法 25 条と 27 条の不幸な婚姻
 - － 松本烝治委員会における憲法論議
 - － 「働カザルモノハ食フベカラズ式ノ考ヘデアリ、從ツテ働キタル者ハ生存権ヲ保障セラレネバナラヌト云フ考ヘデアル」（高瀬弘文「『あるべき国民』の再定義としての勤労の義務」）
 - － 左右のイデオロギーの結晶としての 27 条

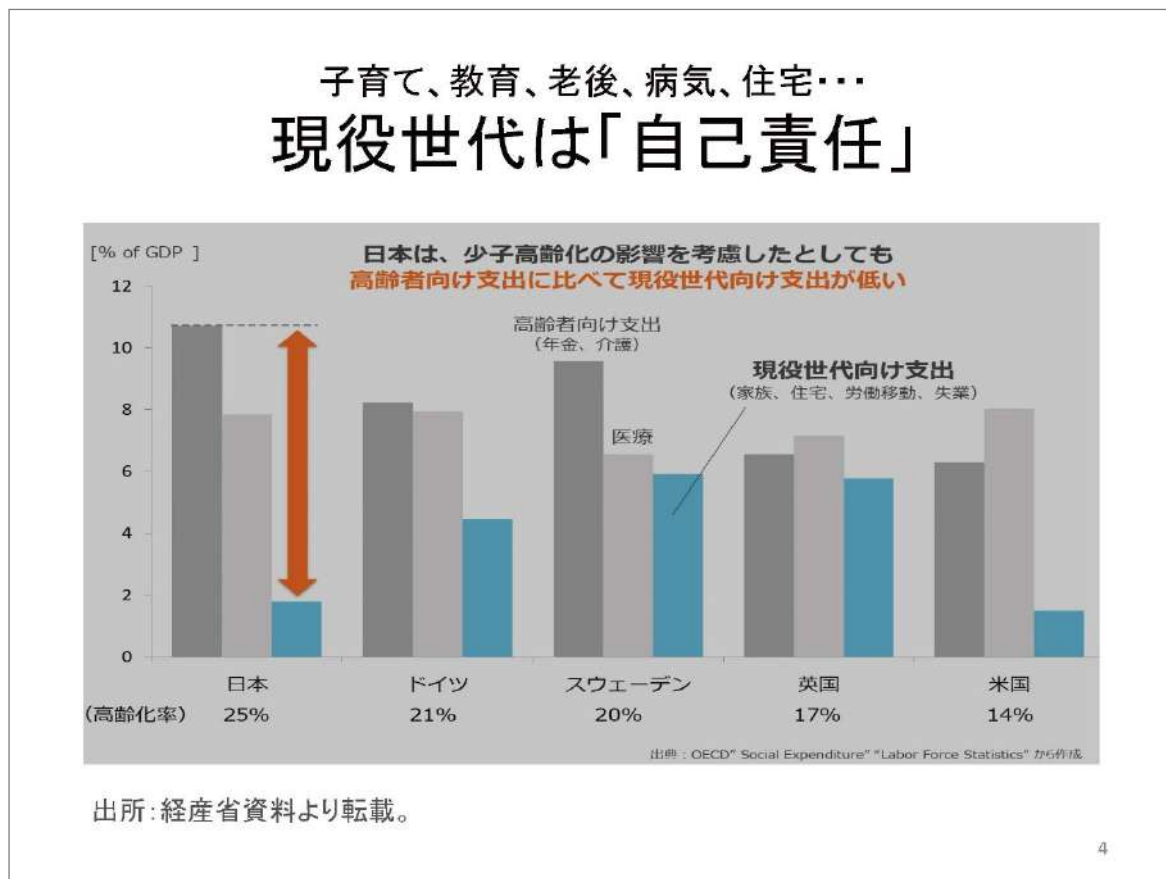
セットになっているのです。そして、勤労の義務を果たしたまっとうな人間は命を保障してやろうと。そして、勤労の義務を果たさなかった不届き者は、そんな人間の命は保障しなくていいという議論を左派の人たちがやっています。それほど日本人、日本社会にとって、勤労は非常に重要な概念になっています。

このように見てくると、なぜ生活保護を利用する人が少ないのかという問いにも答えが浮かびます。人様が払った税のご厄介になるのは恥ずかしいことで、勤労して自己責任で生きていくことが美しい社会なのです。生活保護をもらって誰かの助けを得るのは、人として恥ずかしいことだと受け止められています。本当は違いますよ。人間の権利ですから、堂々と使えばいいのです。しかし、そんなきれいな事を言っても仕方ありません。社会の根っこにある、勤労や儉約の美德という発想を無視した議論はやはり浮ついたものになると思っていますので、その根強さやしぶとさそのものをみなさんと確認しておきたかったのです。

現役世代は「自己責任」

ですから、こんな訳のわからない財政をつくってしまうのです。これは何かというと、一番左側がお年寄りに向かっていて社会保障です。3 本並んでいるうちの右側の棒グラフが現役世代に向かっていて社会保障です。最近パクられがちなんですよ。これは僕、ずっと作ってきた図で、そしたら、今度、経産省にパクられて、頭にきたので、経産省のやつをパクリ返してやったのですね。

真ん中の部分の棒グラフは医療です。医療はお年寄りにも現役世代にも行ってしまうから分けにくいのです。実は、でも、日本は 25%のお年寄りが医療費の 6 割を使っていますから、これはもし分けたら、もっとお年寄りに行くと思います。ですけど、見てわかるのは、お年寄りの取り分と現役世代の取り分があまりにも開いているということです。これはお年寄りがもらいすぎと言いたいのではなく、現役世代があまりに



ももらえていないことを言いたいのです。

ちなみに僕はもうちょっと真面目に研究しているので、35 カ国について調べました。そうすると OECD35 カ国の中でこの差の大きさは2番目に大きいです。トルコの次に現役世代の取り分が少ないのは日本です。ここに勤労の思想が見事に表れています。要するに働ける人は自分で働いて、自分で貯金して、自分で暮らしは何かしなさいという社会となっているのです。政府は、この社会は働く人たちを助けないのです。

みなさん、お子さんが生まれれば、幼稚園、保育園に行かせる、塾に行かせる、そして大学に行かせる。家を建てる。病気の備えをする。老後の備えをする。みなさん、全部、これは貯金でおやりになるでしょう。そうですよ。自己責任で働き、勤労し、儉約し、貯蓄をすることで、自分自身で生きていきなさいという社会をつくっているのです。これが勤労を重んじる社会の姿ですよ。逆に言うと、勤労できなくなった瞬間に終わりですよ。

僕は、前回話したかもしれないけど、2011 年に脳内出血で倒れて死にかけて、うちの連れ合いは専業主婦ですから、もうこれで後遺症が残って僕が働けなくなったら、うちの子どもたちのお先は真っ暗だなとベッドの中で思いましたよ。絶対この社会は僕の子どもを助けてくれない。自己責任の社会ですから。だから、塾に行かせて、いい大学に行かせてなんて夢物語で、大学さえ行けるかどうかわからなくなるなど、ベッドの中で思っていました。働けなくなった瞬間に生活不安が襲ってくるという社会を僕はつくっている。

自己責任で将来不安をなくすのが日本社会

ですから、みなさんと確認しておきたいのは、勤労プラス儉約、そしてそこから貯蓄をひねり出すという自己責任で将来不安をなくすというのが日本社会の大前提だということです。コミュニティあるいは地域社会とか言ったとしても、日本社会の大前提がこうなっている以上、地域おこしといったようなことに一体どれだけの時間を割けるのか？という話です。必死に働いて、必死に貯金して、家族が食っていける状況をつくるということに一生懸命な人たちに、私たちのまちを何とかしましょう、というようなことを訴えかけても、本当に説得力があるのかどうか？ということですよ。

実は今日、みなさんに問題提起したい半分は、だから地域をどうするの？という話とセットで、この自己責任の社会を変えなきゃ駄目でしょうということ。これをセットで議論しないと、地域おこしだとか、地域の再生だといったって、説得力ないでしょうというのがまず一つ目なんですよ。

しかも、困ったことに、このグラフは高度経済成長期の実質成長率の平均を取ったものですが、高度経済成長期には9.3%、オイルショックからバブルまで、4.3%、そして91年のバブル崩壊後から去年まで、平均0.9しか成長していません。要するに9.3成長する前提でこの社会は設計されているわけです。毎年9%ぐらい収入が増えるという前提で社会ができています。だから、自分で儉約して貯金して自己責任で生きていきなさいと言ってきたわけです。ところが、これが0.9まで落ちたわけです。

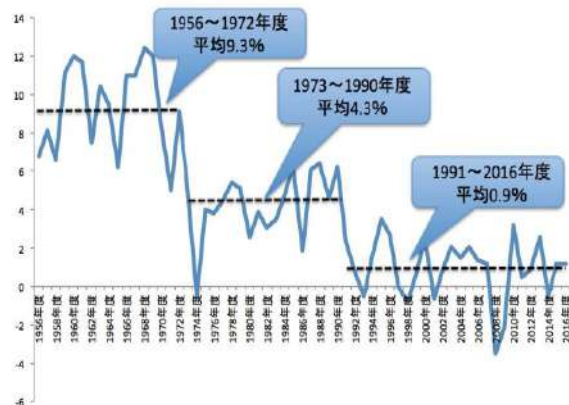
90年代、みなさん、ご存じでしょうかね。政府が必死に何をやっていたかということ、政府がやっていたことは、公共事業と所得税の減税ですよ。何で？ みなさんが貯金できるように税金をお返ししたんですよ。みなさんの所得が増えるように勤労の機会を提供するために公共事業をどんどんやったわけです。でも、僕たちの所得は十分に増えなくて、莫大な借金が残った。もう減税もできない、もう公共事業もできない、さあどうする？というときに、実質成長率は0.9、このギャップを丸ごと僕たちが自分たち自身で抱え込まなくては行けなくなったわけでしょう。

自己責任社会の黄昏

実質成長率の推移

- 「勤労＋倹約＝貯蓄」という「自己責任」で将来不安をなくするのが日本社会の前提
- 経済成長依存型の自己責任社会は維持可能か？

→ じつはこれは日本だけの問題ではなく、人類史的な歴史の転換点に僕たちはいる



97 年から所得が減り始めます。びっくりしますよね。2割近く減っています。そして、貯蓄率が下がって、ほぼゼロになります。非正規雇用が増え始めます。全部これは 97 年から 98 年に起きることです。どんどん僕たちは貧しくなっていく。なのにこの自己責任社会だけが残されている。老後は安心ですかと聞いたら、国民の 8 割 5 分、9 割近くが不安だと答える。暮らしは良くなりますかと聞くと、良くなると答える人が 1 割を切っている。そんな社会が残されて、多くの人々が不安におびえている。

21 世紀は日本史上、四度目の人口減少が始まる

ただ今日、この「21 世紀かながわ円卓会議」という名の通り、21 世紀のことを僕は語らないといけなわけです。21 世紀ってどんな時代なの？ここに書いています。日本史上、四度目の人口減少がこれから始まっていく。1 回目は縄文時代、2 回目は平安時代の終わりから鎌倉時代、3 回目は江戸時代の中期、そしてそれに続くというか、それをはるかに上回るような、おそらく縄文時代並みの人口減少がこれから始まります。それが 21 世紀です。それを前提にこれから僕たちは議論していかないといけないわけ。いいですか。人口が減っていくといったって、半端ない、日本史上 4 度目という減り方をするとところがまずミソです。

僕は散々、経済学を勉強してきた人間ですが、「資本主義」という言葉をあえて使わないのです。「経済の時代」と言います。なぜか。経済が人間の生き方のすべてを決めてしまう時代になってしまったから。だから、僕は「経済の時代」と呼んでいます。

共通ニーズ+個別ニーズ+顕示的消費をお金で満たす「経済の時代」

では「経済の時代」とはどんな時代か。これは、おそらく僕独自の見方であり極めてユニークな見方です。人間が生きていくためには、縄文時代の人間だって、みんなにとって必要なことをみんなでやっています。例えば狩りをやるとか、家を造るとか、みんなにとって必要なことをみんなでやっていく共通のニーズの部分があります。

そこにプラスして個別のニーズが発生します。例えば、僕は今日、ぎりぎり遅刻寸前でみなさんに心配かけてしまったのですが、逗子の駅からバスで来るのか、歩いて来るのか、タクシーで来るのかと、これは個別ニーズです。どれで行ったって別にいいですね。ゴールには着くのだから。僕はタクシーで来ようと思ったら、タクシーが全然止まっていなくて、それでちょっと時間的に危なくなってしまったのですが。つまりは、そうした個別ニーズ、僕のニーズがあります。僕がタクシーで行くかどうかはみなさんのニーズではない。

さらには顕示的消費がある。いわば見せびらかしの消費ですね。ちなみに僕が今着ている、黒いタートルネックのセーター、こんなに見せびらかしていますが、実はこれ、ユニクロのすごい安いセーターです。

人間が生きていくためには共通のニーズと個別のニーズと見せびらかしのための消費、これらを満たしていきながら人間は生きている。誰だってそうです。そして、このニーズをお金で満たすようになったのが「経済の時代」だということです。資本主義と、別に言っても構いません。

経済の時代の終焉

- ・ 日本史上、四度目の人口減少が始まる
 - － 共通ニーズ+個別ニーズ+顕示的消費＝これらを貨幣で満たした「経済の時代」
 - － 地球規模で進む人口減少
 - － 重要性を増さざるを得ない「共通ニーズ」
 - － Sharing Economyが示す「経済の共有化」

→ だが、経済が消えてなくなるわけではない
→ では、経済はどう姿を変えるのか？

世界的に縮小していく顕示的消費

さて、そうしたときに、みなさん、21世紀の人口減少は残念ながら日本だけの物語ではないのです。国連が推計を出しています。アジアやアフリカもひっくり返して、21世紀の終わりには人口の伸び率がほぼゼロになります。ですから、人類史上まれに見るような人口減少の時代がこれから始まってしまうわけです。そうした中で、人の数が減っていく、経済が萎縮していく状況において、さあ、みなさん、共通ニーズと個別ニーズと見せびらかしの消費のどれを選びますかということが問われるわけでしょう。

見せびらかしの消費は、これからどうなると思いますか。絶対減ってくるでしょうし、現に減り始めています。昔は髪の毛があったころ、あんなにおしゃれだった僕が、大学生のときに8,000円のTシャツを着ていましたが、今、あそこよりよはるかに豊かになったのに2,000円のユニクロのセーターを着るようになっています。あるいは、例えばUberのように、タクシーに乗るにしても、もっと安い値段で行くようになるでしょう。Airbnbも同様です。ホテルに1泊1万円、2万円払っていたのが、数千円で人のうちに泊まれるようになっていく。世界的に、すでにこの現象は起きているわけです。つまりGDPは減ります。見せびらかしもできなくなります。でも、どうでもいいんです。暮らしは変わらないから。というように、これからこの顕示的消費は世界的に縮小していくと僕は思います。

Uber や Airbnb というのは本当に深刻な意味を持ちます。なぜなら、今まで知らない人を自分の車に乗せていましたか。知らない人を自分のうちに泊められましたか。人間が守ってきた、プライベートな最後の空間（これをプライバシーと呼んでましたが）まで経済の領域に開放しないと生きていけなくなっているのです。これが今の世界の経済のあり方ですね。

経済がすべてを決める時代は終わる

それから、個別ニーズ（僕がタクシーにするのか、ユニクロのセーターにするのか）と、人間が生きていくために必要な共通ニーズと、どちらが優先されるでしょうね。それは人類の始まりを見ればわかる。共通ニーズから始まったのであって、個別ニーズは後からやって来ている。より本質的なのは共通ニーズです。

ですから、この共通ニーズをいったいどうやって満たしていくのか。今、シェアリングエコノミーという言葉を使う人が多くなっているようですが、それは要するに共有の経済、経済の共有化が始まっていくということです。経済をみんなで何とかしていく時代がやってくるということでしょう。すると、どうなってくるのでしょうか。

重要なのは、経済がすべてを決める時代は終わるということ。個別ニーズや顕示的消費よりもみんなにとってのニーズが大事になってくる。でも、経済が消えてなくなるわけではありません。その話をみなさんと少し考えたいと思うのです。これはちょっと難しい話になるから、もし質問があったら、後で聞いてください。でも、これはすごく大事なポイントです。

経済とは物質的欲求を互酬・再分配・交換という 3 つの手段で満たすこと

僕の尊敬しているカール・ポランニーという経済人類学者が、素晴らしいことを言ってくれている。経済とは結局何かというと「人間に物質的欲求を満たす手段を提供する」ことだと。要するに物質的な欲求を満たすのが経済だと言ってくれています。極めて簡潔な定義です。物質的欲求を満たす（本当はこの前段の引用部分もすごく重要なので後で読んでおいてください）。

物質的欲求を満たすのが経済ということだとすると、みなさん、気がつきませんか？ 物質的欲求ってお金を払って物を買うだけですか。物質的欲求の満たし方ってそれだけですか。違いますよね。例えば江戸時代の農村、あるいは今の農村でもそうでしょうけど、みんなで田植えをしたり、みんなで稲刈りをしますね。みんなで田植えや稲刈りをやるのは、物質的欲求を満たすためにやっています。でもこれは普通、交換とは

言わず、「互酬」と言います。つまり相互扶助といった、お互い様の助け合いの世界です。これも経済です。

あるいは、飢えている人がいて、その人にみんながかわいそうにとお米をあげて、ご飯を食べられるようにする。これは「再分配」ですね。だけど、その人の物質的欲求を満たしてあげていますよね。これも立派な経済でしょう。

実はポランニーに言わせれば、経済とは非経済的だと言うのです。つまり僕たちが経済

そもそも経済とはなにか？

- ・ カール・ポランニー「人間は、自分自身と自然環境のあいだの制度化された相互作用のおかげで生き永らえる。この過程が経済なのである。**それは人間に物質的欲求を満たす手段を提供する**」(『人間の経済 (I)』)
- ・ 物質的欲求を満たす三つの統合のパターン
 - － 互酬…相互扶助、助け合い
 - － 再分配…ルールにしたがって地域資源を構成員に配分
 - － 交換→ここにだけに注目してきた自己責任社会

だと思ってきた「交換」ではなくて、助け合いや再分配といった経済らしからぬものから経済は本来成り立っていたのだと。人類の歴史を見ると、「互酬」と「再分配」の方がはるかに先にあって、「交換」はずっと後になって出てくるのだと。そして、この交換があたかもこの世の中のすべてのように思ってしまう。

みなさんもそうでしょう。どんな青春時代を過ごすか。僕は女の子と楽しい思いもすることなく一生懸命勉強して東京大学に行きましたが、しかしながら、何でそんな人生の選び方をしたかという、いい大学に行けば、いい会社に行けて、お金をたくさんもらえて、そうするとすてきな女性と結婚ができて、大きなうちに住める。自分の人生の生き方がすべて経済基準で決まっているわけですよ。どこの大学に行くか、どんな会社に行くか、どんな人と結婚するか、子どもは何人持つか。全部金じゃないですか。でも、それは人類の歴史の中では本当の瞬きのような瞬間だと。むしろ人類の歴史を彩ってきたのは互酬と再分配だということをみなさんと確認したいわけです。

「公共の経済」である財政

市場経済、交換、お金が僕たちの暮らしの空間の中にどんどん入り込んできたのが経済の時代で、そのお金がないと、共通のニーズも個別のニーズも見せびらかしの消費もできないから、みんなお金が必要だった。だけど、ここで歴史は少し分かれていく。コミュニティが破壊されていきます。みんな、お金のために地域から出ていきます、地域がずたずたになる。そうすると、互酬や再分配のような助け合いの領域がどんどん弱くなっていく。すべて交換になっていく。それまでであった助け合いの部分をどこかが引き取らないと人間は生きていけない。互酬や再分配のない社会はあり得ない。

そこを引き取ってつくられたのが実は財政です。だから財政とは、みんなにとって必要なもの、みんなが生きていくために必要なものを、みんなが汗をかいて痛みを分かち合う。みんなで税を払うことで満たしてきたはず。財政は、経済の中の支え合いや助け合い、とりわけ共通のニーズと関わる部分を引き取ってきたのです。ですから、財政の原理とは、みんなにとって必要なものをみんなが満たしていくという、難しく言えば「共同需要の共同充足」を原理にしています。

だから財政は「公共の経済」

- ・ 市場経済や交換、貨幣が人びとの生活空間に入り込んできた「**経済の時代**」
- ・ だが、コミュニティの破壊とともに形成され、互酬と再分配を吸い上げて大きくなってきたもの、それが「**財政**」
- ・ 財政は「みんなにとって必要なもの」を「みんなで満たす」という「**共同需要の共同充足**」を原理とする

→ この原理を財政と地域社会とがどう満たしていくか
→ 財政の責任放棄、地域社会への押しつけにならないためには、何がポイントか？

共通ニーズを財政と地域社会でどのように満たしていくのか

ここでみなさんに、ようやくみなさんの専門の領域に話が下りていきます。何かというと、みなさんが、ではどうやって地域社会を再生していくのか。コミュニティや地域のつながりをどうやって再生していくのか。このことをみなさん、一生懸命考えておられると思う。でもね、それは何のため？ なぜそんなに地域が大事なの？ 何で今地域に目を向けなくてはいけないの？

それは僕に言わせれば、共通のニーズがより大事になっていく歴史の転換点に今僕たちは立っていて、その中で、財政で全ての共通のニーズを満たせるのだったら、実は地域社会って要らないはずなのです。とこ

ろが、財政ですべてを満たしていこうとしても、これから経済がどんどん弱まっていくではないか。財政は、税を集めなければできません。人々の所得が減っていく中で、たくさんの税を取るのは難しくなっています。

それに加えて、東京都のような、人がたくさんいてお金持ちもたくさんいるところではできるかもしれないけれども、過疎地域や農村では高齢化が進んだ地域ではみんながお金を払って、みんなで何とかしていきましょうといったって限界があるでしょう、という問題があります。僕たちはこれから共通のニーズを必ず満たしていけないといけな時代突っ込んでいきます。その共通のニーズを財政と同時に地域社会でどうやって満たしていくのかということこれから僕たちは考えないといけな。だから地域の再生が求められているのだと思うのです。

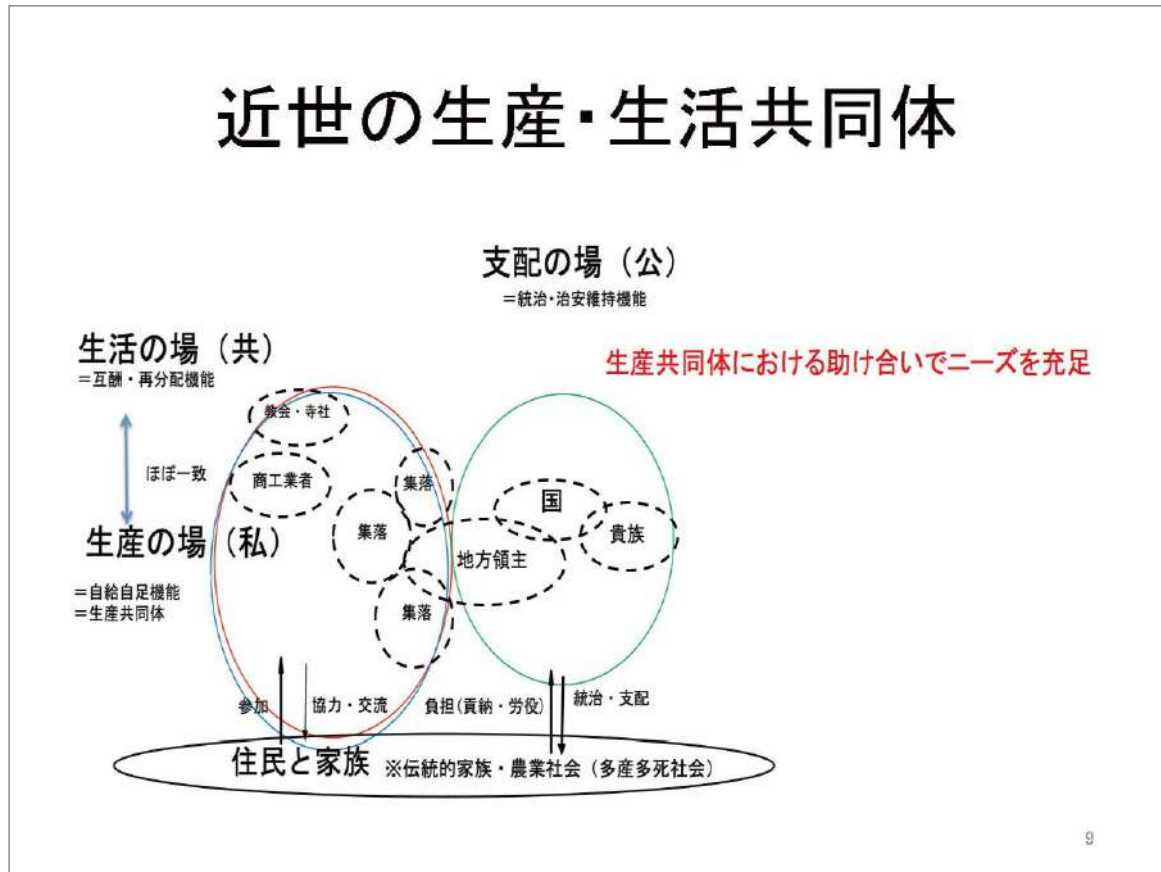
財政や行政が何をやるべきか

気を付けないといけなのは、みなさん、お気付きのように「地域社会がんばれ」と言った瞬間に、財政がいろいろなものを押し付けてきます。政府がやるべきこと、行政がやるべきことをみなさんにどんどん押し付けていきます。そうしないためにはいったい何がポイントなのかということみなさんと考えなくてはいいなと思います。財政や行政が何をやるべきかという責任論をきちんとやっておかねばいいななと思います。

今の話、図を使ってお話しします。つまり江戸時代、鎌倉時代から本当は始まっていますけれど。さっき言ったように、人口が減少していった平安末期から鎌倉時代、いわゆる末法思想と呼ばれるようなものが浸透して、鎌倉時代に生まれるのが惣村、つまり今僕らがイメージする村落共同体やコミュニティが生まれるのはその鎌倉時代です。それまではばらばらに住んでいた人たちが、人口が減少し、社会が不安定化するときに、集まって助け合って住むようになってできるのが惣村です。

このように、人口減少の時代には人々は必ず助け合おうとするのです。これからもそうなるのでしよう。だから今、コミュニティとか助け合ってみんな言い始めているのですよ。あの安倍さんですら、みんなで税を払って、みんなの社会保障を無償化していこう、と言い始めるわけです。助け合いの精神が入ってこないと社会は持たないのです。

ただ、その惣村あるいは江戸時代の封建制から近世の時代の農村は、生産の場（物を作っていくための場）と生活の場（暮らしていく場）が一致しています。みんなが生きていくために一緒に農作業をやりながら、みんなが一緒に暮らしていくための必要を満たしていた。そして、支配の場（公）は、ここは分離されていました。城下町があって、そこから離れてコミュニティがあるわけですから、地理的にも分離されていたのです。地方領主が一応、交わりにはなっていますが、この中で生産共同体が生活共同体となって、生きていくための共通のニーズをみんなで満たしてきた。ですから、例えば、自給自足はもちろんですけど、消防、防犯、水の管理、道の管理、屋根の張り替え、そして初等教育としての寺子屋など。すべて、自分たちで共通のニーズを満たしていたわけです。



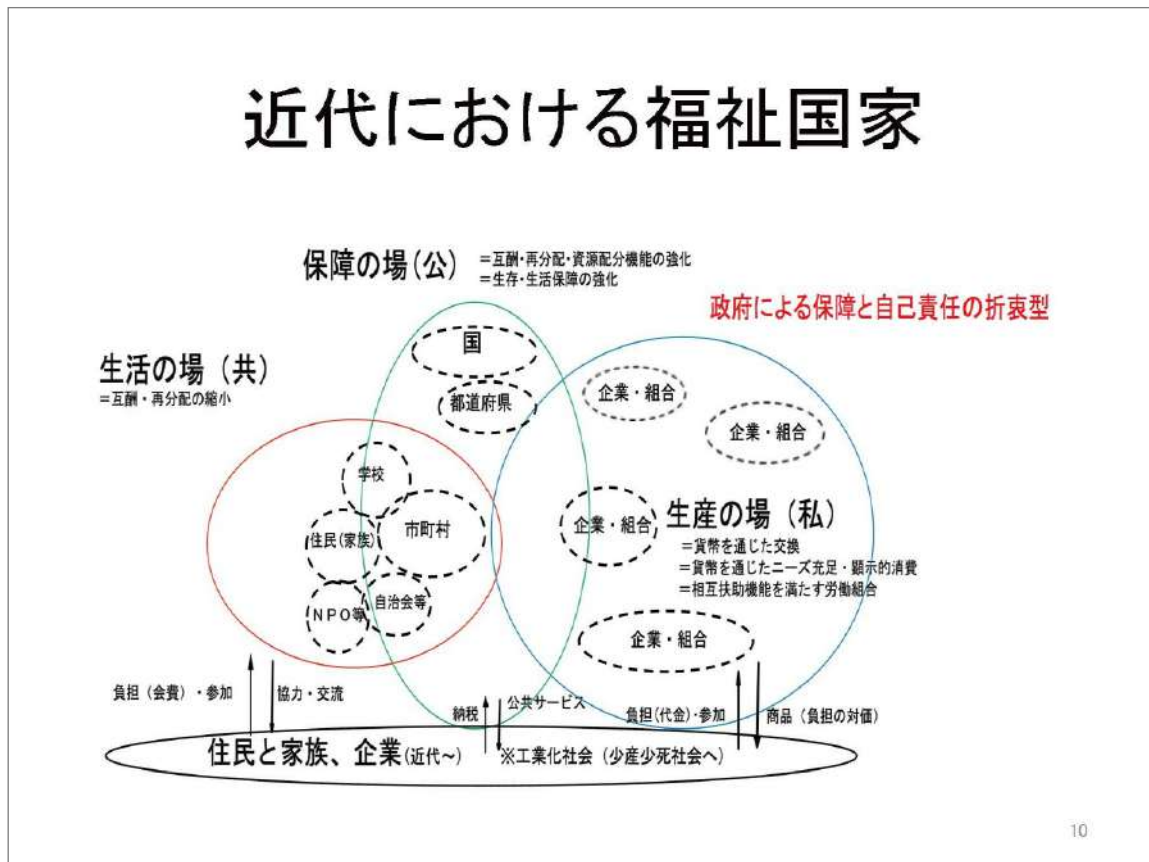
保障の場（公）や生活の場（共）が小さく生産の場（私）が大きい日本

ところが、今僕たちが生きている時代では、生活の場と生産の場、つまり暮らしているコミュニティと働く場がどんどん分離していったわけです。自分が住んでいるところから車でしばらく 15 分、20 分かけて通勤したり、あるいはコミュニティをすっかりあきらめて東京に行ったりするなどして、分離が進んで行くのが近代です。

こうした中で、この生活の場はキューツと小さくなっていきました。反対に生産の場、市場が急激に大きくなっていき、生産の場で稼いだお金を使って、人々は暮らしのニーズを自己責任で満たすか、税を払って国に満たしてもらうかのどちらかに分かれていったわけです。ヨーロッパであれば、税の領域（国の領域）がぐーっと大きくなったわけです。この市場の大きさと同じように国も大きくなっていったわけです。残念ながら、日本はこの保障の場（公）が小さいままで、生活の場（共）も小さいまま、生産の場（私）だけ極端に大きくなって、ここで勤労して、稼いだ金で貯蓄して、暮らしのためのさまざまなニーズを自己責任で満たしていくという社会をつくったのです。

一方で、これからどうなるのかというのが、今日、みなさんへの問題提起です。僕の認識によれば、確かに市場はグローバリゼーションの下でそれなりの大きさを保つでしょう。ただ、さっき申し上げたように、GDP はもう頭打ちになるはずで、シェアリングエコノミー、シェアリングサムシング、あらゆるものをシェアすることによって GDP は減ります。さっき言ったように 8,000 円の服が 2,000 円になっていくわけです。CD を買っていた人たちが YouTube でシェアして、タダで見えるようになるので、GDP は減っていきます。オランダでは、日常生活で、コップが必要だというときに、今までならコップを買っていたのが、

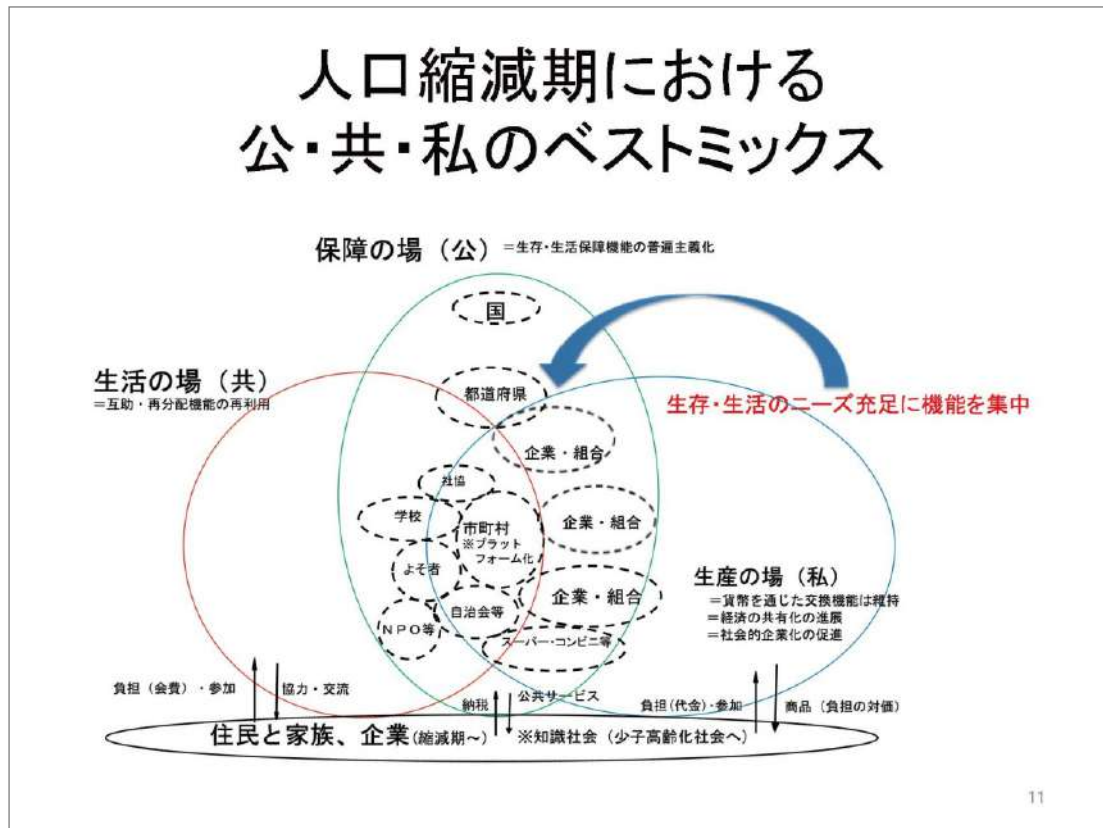
インターネットでコップを要らないという人がすぐに見つかって、その人からコップをもらえる。そうすると、暮らしぶりは何も変わらないけれども GDP は落ちていきます。



3つの領域の重なりが広がっていく時代

ですから、グローバル化の下で市場が膨張しようとする圧力と同時に、今度はシェアリングサムシング、何かをシェアしていくことによって小さくなっていく圧力が生まれる。一方で、今度は共通のニーズを私たちは満たしていかなければいけません。だから、生存、生活のニーズが優先されたときに、それをこの保障の場である財政で満たしていくケースと、コミュニティの中の生活の場を大きくして満たしていくケースの両方が出てくると思います。

そして、さらに重要なのは、「生活の場」である暮らしの中での関係、「保障の場」である政府のようなパブリックな関係、そして「生産の場」である市場の関係が密接に関わり合う領域が、このベン図のようにどんどん広がっていくと思います。つまり、この市場の領域ですら共通のニーズを満たしていくことの中に組み込まれていくしかないということです。今風の言葉で言うならば、「企業の社会化」が始まるということです。



損得を超えて共通ニーズを充足させるために

ご存じの方は結構おられるかもしれませんが、佐賀県の多久市では、本来、行政の仕事である——あるいはコミュニティがやる——見守り介護について、協定を結んで企業がこれに加わっています。ヤマト運輸、セブンイレブン、第一生命、日本郵政、次々と契約を行政と結んで、宅急便の品物を運ぶとき、セブンイレブンが宅配をやるとき、保険の勧誘に行くとき、あるいは郵便を運ぶとき、その一軒一軒のお年寄りの様子を探るためにきちんと見守り介護をするという協定を結んでいます。本来であれば、行政が果たすべき、あるいは最近であればコミュニティが果たすべき見守り介護という共通のニーズに、とうとう市場の人たちまでが入り込んできているのです。

なぜかという、人口減少社会では、人口が減りコミュニティが衰退していくと、市場として成立しなくなるからです。金儲けができなくなります。そういう例は全国にたくさんあります。地域おこしや共通のニーズを満たせなくなっちゃったら、人が出て行ってしまうので。だから彼らも損得を超えた共通のニーズの充足に協力せざるを得なくなっているのです。

そして、同時にそのことは、おじいちゃん、おばあちゃんの様子を見に行きながら、それが実は保険の勧誘につながっていくわけです。100%善意で見守り介護をやるわけではなく、彼らの利潤動機もそれなりに満たしながら、一方で共通のニーズも同時に満たしていくというウィンウィンの関係をつくっていくための取り組みが、今、佐賀県の多久市では行われています。

公共私のベストミックスと市町村のプラットフォームとしての役割

要するにこの領域を満たすためには、あらゆる機能を集中させて、公と共と私のベストミックスを模索し

ながら、力尽くでみんなの共通のニーズを満たしていくということを考えなくてはいけなくなっていく。そうすると、単に「地域おこしだけやっていこうね」というときに、この生活の場だけでは駄目で、行政との関係、あるいは企業との関係が当然問われるようになってくるし、市町村の役割も、今までのような上から目線ではなくプラットフォーム化していくことになります。よそ者でも受け入れざるを得ない。市町村は、学校や社協や NPO や自治会などさまざまな生活の場、あるいは企業や組合など生産の場をつないでいくプラットフォームの役割を果たしていくしかないでしょう。そういう大きな変化がこれから起きていくのではないのかと僕は思っています。

社会を共同と連帯でつくり替えていく

1928 年のスウェーデンでの議会演説を紹介します。スウェーデンは人口が急激に減少し、失業率が 25% に達するという大変な状況に立たされていました。そのときに社会民主労働党の党首であるハンソンは、我々スウェーデン人は家族のように助け合う、国家とはすなわち「国民の家」であるという演説をしました。そして、「国民の家」の基礎は、共同と連帯だとして、社会をこの共同と連帯でつくり替えていくと明言しました。

その中で、優位に立つ者と従属的な立場の者、富める者と貧しい者、奪う者と奪われる者とといったように、

公正・自由・連帯

P.A.ハンソンの「国民の家」(1928年議会演説)

「家の基礎は、共同と連帯である……国民と市民の大きな家に当てはめると、それは、現在、市民を、特権を与えられた者と軽んじられた者に、優位に立つ者と従属的な立場の者に、富める者と貧しい者、つまり、財産のある者と貧窮した者、奪う者と奪われる者に分けているすべての社会的、経済的バリアの破壊を意味する」

→ 社会的危機の時代にあらわれる互酬、再配分の原理

1. この原理をどう地域社会に組み込んでいくのか？
2. 財政が責任を取るべき領域、地域社会が引き取る領域

12

この社会に引かれている分断線がたくさんある。その社会的、経済的バリアの破壊こそが共同と連帯、つまり家族のように生きていく社会のあり方だと演説をしました。この人口減少社会、社会の不安定化する時代、ここで家族のように助け合うという社会民主主義が生まれるのです。僕はこれからの日本社会はそうになっていくと思います。家族のように助け合う社会。それは経済的、社会的バリアを次々に破壊していく、そういう状況になっていくと思います。

車の両輪としてどこを財政が引き取り、どこを地域社会が引き取るべきなのか

そこで、さきほどから僕が繰り返し話をしている互酬と再分配について、それをどのように地域社会の中に組み込んでいくのか、そして、どこを財政が引き取り、どこを地域社会が引き取るべきなのか。このことを考えていきたいと思っています。みなさんに申し上げたいのは、町おこし、地域おこしをみなさんがやっていくことと、我々納税者が税を払い、誰もが安心して生きていく社会をつくっていくことは車の両輪だということを言いたい。これがセットにならないといけなない。

そのときに、ではいったいみなさんはどういうことをやっていくことができるのか、どんな可能性があるのかということを最後にお話しして終わりにしたいと思います。

これは僕の親友と言っていい、中島康晴さんという、日本社会福祉士会の副会長を務めている人で、僕はすごく仲がいい人なのですが、彼は地域の絆という NPO 法人をやっています。

例えば、みなさん、こういうことです。僕らがきちんと税金を払っていけば、例えば介護サービスを無償化することができますね。みなさんがお年寄りになったときに、自己負担なしで介護サービスを受けることはできます。これは財政でできることです。要するに、みんなにとっての老い、介護という共通のニーズをみんなで痛みを分かち合って、みんなで税を払って、みんながそのサービスを受けられるようにしていこう。互酬と再分配を作り直そう。助け合いの文化をもっと作り直していこうということは財政でできます。

「福祉を地域にひらく」

ですが、中島さんの話を聞いたときに、財政ではどうしてもできないことに気付かされました。それは何かというと、介護サービスを提供するだけでは駄目なのです。彼は「福祉を地域にひらく」という言葉を使います。どういうことかということ、まず介護サービスを提供したとして、しかし、施設なのか、在宅なのかという選択が待っていますね。そうすると、高齢者は、本当は家族と共に暮らしていきたい、地域と共に暮らしていきたいと思うけど、それが言えない。家族に迷惑を掛ける。それはできない。だから、本意ではないけど、最期は施設で死ぬというお年寄りがたくさんいる。別に施設が悪いと言っているのではないです。在宅がいいと思っけていても、そうできない人たちがいるということを言いたいのです。自分の人生の最期の選択なのに、本当に自分の選びたいものを選ぶことができないということをどう考えるか。

事例紹介

福山市「NPO法人 地域の絆」

- 「福祉を地域にひらく」→施設に人間を閉じ込めない、死にたい場所で死ぬ人間の自由
- 職員、利用者、地域住民、警察、そして家族とのつながりを生むための努力
- その地域の一員として死んでいく権利

→ 財政が介護サービスを提供するだけではできない「自由という人間のニーズ」の充足

人間の自由の問題だと中島さんは言います。自分の死にたい場所、それは地域の中であり、そして地域の一員として死ぬことであり、そして家族と共に死んでいくことだと思ったときに、この最期の死ぬ場所を選ぶ自由ぐらいは人間に保障しなくては駄目だろうと言うのです。本当にそうだと思います。でも、僕ら財政学者が必死にがんばって介護サービスをどんなに充実させても、この領域には手を突っ込むことができません。

最期は地域の一員として死んでいく

そこで中島さんはどうしたかということ、職員と一緒に、利用者と一緒に、3人、4人で一緒になって家を1軒1軒、お店を1軒1軒、タクシー会社、そしてスーパーマーケット、この利用者がどういう状況にあるのかということを全部説明して回ったそうです。そうすると、認知症でスーパーに行くとな引きしてしまった場合、それまでであれば出入禁止になっていたのが、そうとわかれば、スーパーの人も多めに見てくれる。そして連絡さえすれば、「地域の絆」がお金を払いに行く。そしたら、スーパーの人たちは喜んで受け入れるようになっていった。地域の人たちも、そういう事情で徘徊しているのかということがわかれば「大丈夫かい」と言ってくれるようになった。そして、この利用者の方はタクシーに乗って遠くに行ってしまう癖があった。そこでタクシー会社にきちんと事業所に連れてきてくださいと言うと、タクシーの人たちは喜んで連れてきてくれるようになった。

こういうことを積み重ねた結果、どうなったかという、地域みなさんにこんなに良くしてもらって申し訳ないと言って、年に一度も訪ねてこなかった家族が毎月のように訪ねてくるようになった。そして、このおばあちゃんは以前、小料理屋さんをやっていたらしいのですが、「またやりたい」と言って、地域の人たちが協力して、ついに1日だけ小料理店を再開したのです。この人はその後、亡くなるのですが、最期は地域の一人として死んでいくわけです。

これは絶対に僕たち財政学者や政府、あるいは公共サービスでできる領域の話ではもうないですね。でも僕たちは、人間が人間らしく生きていくための社会をつくっていく上で必ずこういうものを必要としている。ですから、みなさんと今日は、財政がいったい何をどこまでやるべきかという話と、財政にできない領域があって、そのサービスの提供だけではどうしようもない領域をみなさんはいったいどのようにやっていきたいとお考えなのかということをお聞きしたいと思っています。

もう時間が来てしまったので、取りあえず問題提起はこれにて終わりにします。

希望と絶望を分かつもの

- 人「間」だからこそ、私たちは人と人との「あいだ」に「希望」を見出す
 - 「必要とされる」には「私を必要とするだれか」がいなければならない…このふたつを紡いでできるのが「希望」ではないか？
 - 人間には必ず「だれかを必要とする瞬間」がある…人を必要としているのにまわりに仲間がいないとき、私たちは「絶望」する
 - お互いが求め、求められる社会、頼り、頼られる社会、欲望の「奪い合い」から幸福の「分かち合い」へと社会を変える…それが「希望」
- 勤労と倹約、自己責任を超える財政モデル、地域社会モデルを！

地域の共感を創り出すために～子育て支援の場から広がる当事者意識～

原美紀（NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぶ施設長）

はじめに
支えられた人が次の支え手になる
スタートは自分たちで家賃を払って借りた空き店舗
港北区の子育て支援拠点どろっぶを運営することに
変わらないことと激変したこと
多様なボランティアさんに囲まれてさまざまな体験を
居場所を知らない人たちに会えるように
子育て情報の発信を通した幼児教育の環境づくり
“よるべない私たち”——事業者ではなく当事者・生活者として
“反芻的な関わり”と“揺さぶりをかけられる関係性”
“一人ひとりが主体であり続ける”ために
エピソード1：「私にとっての○○」と、一人ひとりの思いを込めていく
エピソード2：収益を上げることが目的だったけど・・・
エピソード3：何が大事か！？を大事にしてくれる大事な存在
大事にしていることを一緒に大事にすることで共感の輪を広げていく
地域の共感を得ること＝保育における子どもの発達サイクル
育てられたものから育てるものへ
イレギュラーを楽しみながら良心を引き出す
地域の共感を得られるために（1）
地域の共感を得られるために（2）
地域で家族を増やしていく

原 美紀（はら・みき） 特定非営利活動法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぶ施設長

横浜市出身。2男1女の母。大学卒業後、出版販売会社に勤務、新規事業開発担当としてマーケティングを行う。2000年「NPO 法人びーのびーの」を子育て当事者である親たちで立ち上げ、仲間とともに「おやこの広場びーのびーの」を商店街空き店舗に開設。2006年に「地域子育て支援拠点どろっぶ」を横浜市委託事業として運営。施設長を務める。社会福祉士。横浜18区での同事業者でのネットワークを創り、実践者同士の連携を強固に、子育て支援の在り方を検証中。

現在は「新しい協働を考える会」という研究組織もネットワークとして立ち上げ、契約実務に踏み込んだ協働の第2のステージとしてあるべき姿、仕組みを模索している。NPO 法人アクションポートよこはま理事。神奈川県かながわ協働推進協議会委員、港北区地域福祉活動計画策定・推進委員会委員、神奈川県立港北高校評議員など務める。



事例報告

地域の共感を創り出すために～子育て支援の場から広がる当事者意識～

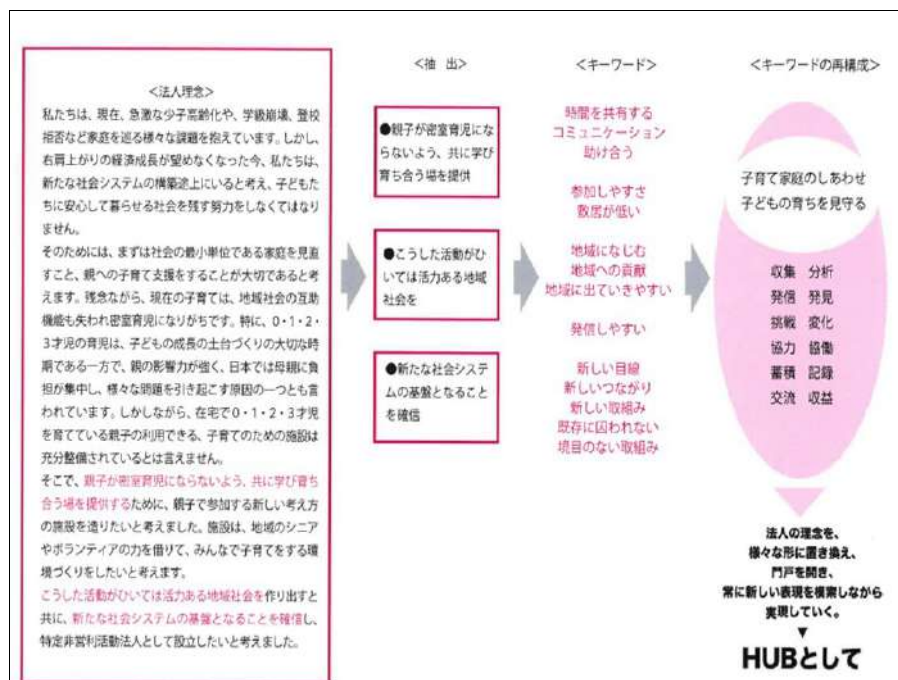
原美紀（NPO 法人ビーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぶ施設長）

はじめに

NPO 法人ビーのびーので事務局長をしています原と申します。本日は井手さんの話をお聞きして、本当にとっても刺激的でした。私自身も含めて参加されているみなさんも、そのお話を聞きながら「何をどこから始めていこうか」とご自身の活動と照らし合わせて受け止めている方は多いかと思います。井手さんが財政と地域社会が車の両輪となって共通ニーズを満たす、というお話をされていましたが、私の話は、地域社会での取組みというところについて——みなさんには釈迦に説法かとは思いますが——身近な活動の現場からの視点でお話しさせていただきます。

支えられた人が次の支え手になる

まずビーのびーの活動の理念についてお話します。横浜市には 18 区ありますが、私たちが活動している港北区は市の北部にあり東京にも近い位置ですので、いわば「横浜都民」と言われるような人たちも多く、若い人たちも流入してきています。2 年ほど前から人口は減少しているのですが、年間 3,800 人ほどの赤ちゃんが生まれており、新しい保育園を建てるなど、都内で言えば世田谷区や杉並区のように待機児童対策をさらに充実させているところです。また小学校も造っているほど、まだ増えている状態です。



今年3月に朝日新聞で、びーのびーのと、びーのびーのが運営している港北区地域子育て支援拠点どろっぶについて紹介いただきました。実際に取材した朝日新聞の記者さんも、どろっぶの元利用者さんだった方でした。その記事で紹介されている、「支えられた人が次の支え手になる。課題を抱えた人が来るのが、課題を解決する動きにつながる」というコメントを本会議主催の事務局の方が拾ってくださり、今日の円卓会議のテーマである「頼り合える社会」をつくっていくためのステップとして、地域の共感領域をどのように広げていくのかということをお話してくださいということでした。本日は、日々の実践の中で親子とそれを取り巻く家庭、そして地域の人たちがどのように関わっているのかというお話をしていきたいと思います。

スタートは自分たちで家賃を払って借りた空き店舗

びーのびーのは2000年に港北区に産声を上げ、活動を始めて17年になります。最初は商店街の中にある、戸口に立てば中が見えるぐらいの20坪ほどの小さな空き店舗で活動を始めました。私自身も3人の子どもがいて、まだ一番下の子どもが生まれたばかりの頃でした。もともと幼稚園や保育園しかなかった日本において、「地域で子育てを」と言われているわりには、公園とスーパー以外には居場所がない状況の中で、当時は行政を動かすという術もなく、自分たちで家賃を払って空き店舗を借りてスタートしました。

そうした中、2000年は介護保険制度が日本にできた年でもあり、高齢者介護の社会化については——いろいろな問題があるけれども——ともかく一段落して、次は子どもだということで、大きく動きがあった年でもありました。出生率が下がり“1.57ショック”とも言われていた中で、現金給付ではなく現物給付によって何か参考となる取り組みやそのアイデアがないかということで、厚労省に新たにできた少子化対策室が全国行脚している中で、びーのびーのにも視察に来ました。当時、子育て真っ最中の親たちと家賃21万円を出し合って、ほそぼそと開設していた頃でした。

成り立ち経緯

- ひろば事業開始年月日：
2000年（平成12年）4月19日
- 沿革：
- 2000年 2月 NPO法人化
- 2000年 4月 およこの広場オープン
- 2002年10月 親と子のつどいの広場事業受託
- 2004年 7月 大倉山へ引越し(菊名建替え)
- 2005年 4月 大倉山・菊名2か所で広場開始
- 2006年 1月 ゆーのびーの（保育と預かり）を妙蓮寺にオープン（2008年4月菊名へ）
- 2006年 3月 港北区地域子育て支援拠点どろっぶオープン
- 2007年10月 子育て応援情報メールマガジンココめへる配信
- 2010年 7月 子育てサポートシステム事業移管（国でいうファミリー・サポート・センター事業）
- 2013年 3月 ゆーのびーの終了
- 4月 預かり保育まんまーるスタート（大倉山）
- 2015年 4月 小規模保育事業ちいさなたね保育園
- 2016年 3月 港北区地域子育て支援拠点サテライトオープン
- 2017年 4月 空き家活用での介護支援予防事業COCOしのはらオープン



港北区の子育て支援拠点「どろっぷ」を運営することに

当時は何の支援もなく、自分たちで負担して活動していましたが、親子で利用できる子育て拠点を制度化しようということで交付金が配られ、全国 200 カ所でスタートしています。現在は 8,000 カ所に拡がっていて、中学校区に 1 個ずつつくるという箇所数目標になっています。当時、東京都江東区や吉祥寺には公設民営や公設公営のモデルがあり、私たちは民設民営でしたので、それらを一連のコースとして全国から視察が訪れていました。視察のコースとしては、大抵、吉祥寺、武蔵野市、江東区に行って、最後はびーのびーのに来て、新横浜で新幹線に乗って帰る、というような流れでした。最後にびーのびーののボロボロの民家を見て、みなさん、公設公営の立派な施設はできないので、「あ、この程度だったらうちでもできるかも」という自信を持たれて帰っていくようでした。

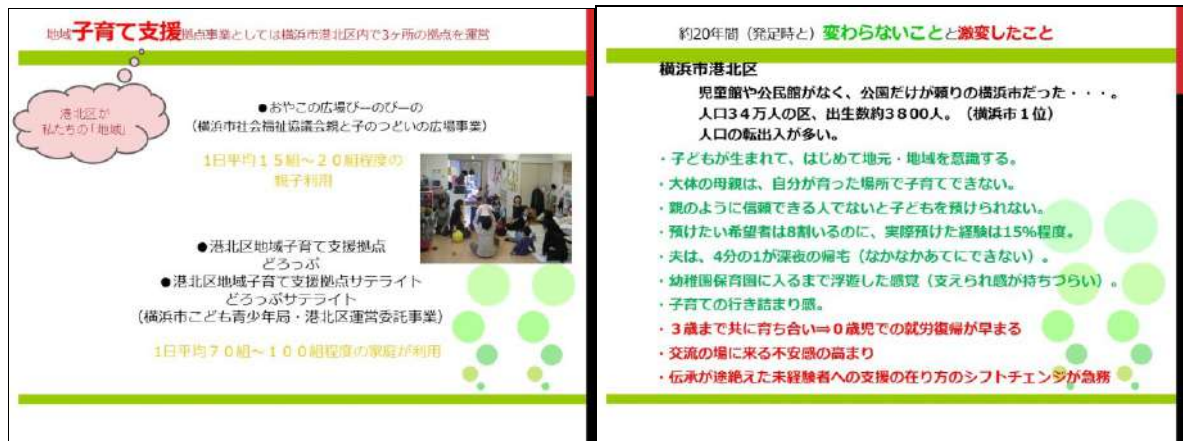
その一方で、横浜市でも各区に 1 カ所、公的な子育て支援拠点をつくらなければということで、港北区ではどろっぷ（スライドの左下の小さな写真ですが）が 2006 年 3 月にオープンしました。その 10 年後、港北区の人口は依然 35 万人、年間 3,800 人の赤ちゃんが生まれている中で、まだまだ就園前の親子と地域とのつながりをつくる場所が足りないよねということで、区内の綱島というところにどろっぷサテライトとして、もう 1 カ所つくられました。サテライトは 18 区全区での設置ではなく、人口増が見込まれるといわれる 5 区だけが 2 カ所設置ということになっています。



変わらないことと激変したこと

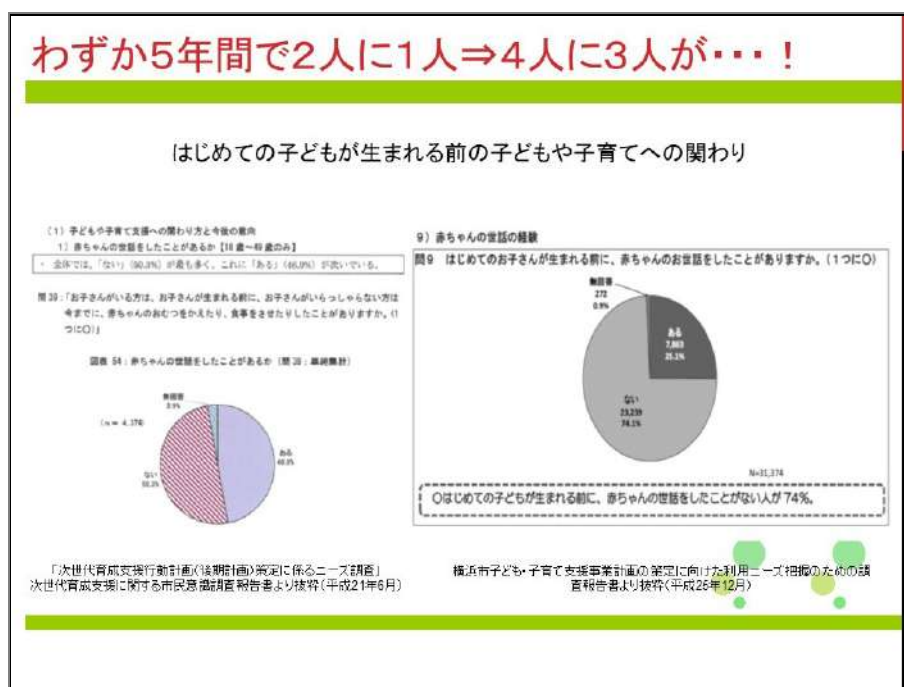
スライドにある写真がびーのびーののです。大家さんがちょっと改装してくださいました。広さとしては 20 坪ほどなので、1 日に利用する親子も 20 組程度ですが、どろっぷは利用料無料ということもあり、現在、70 組多いときは 100 組ほどの親子が来ています。

私たちの活動期間としては 20 年弱なので、高齢者福祉や障害者福祉の歴史のある団体と比べたら、まだまだひよっこだとは思いますが、わずか 20 年の間の中でも劇的に変わってきたことがあります。以下箇条書きでスライドに 11 点リストアップしていますが、20 年やっても依然と変わらない課題がリストの上にある 7 点で、激変したことが下の 3 点です。



一つひとつ説明する時間はないので、一部だけお話しすると、現在は保育所の待機児童対策が進められる中、就労する人口も増えていますので、それまでは子どもが3歳になるまで地域の中でゆっくり一緒に支え合い、育ち合いができていたのが、現在は生後2カ月、3カ月くらいのゼロ歳児で仕事に復帰されている方が増え、循環のスピードが速くなってきています。このように親子でゆっくり地域で過ごしなが、知り合いをつくっていくことが難しくなっている中で私たちは何を伝えていけるか、何を一緒にやっていけるのかということとを毎日、模索しています。

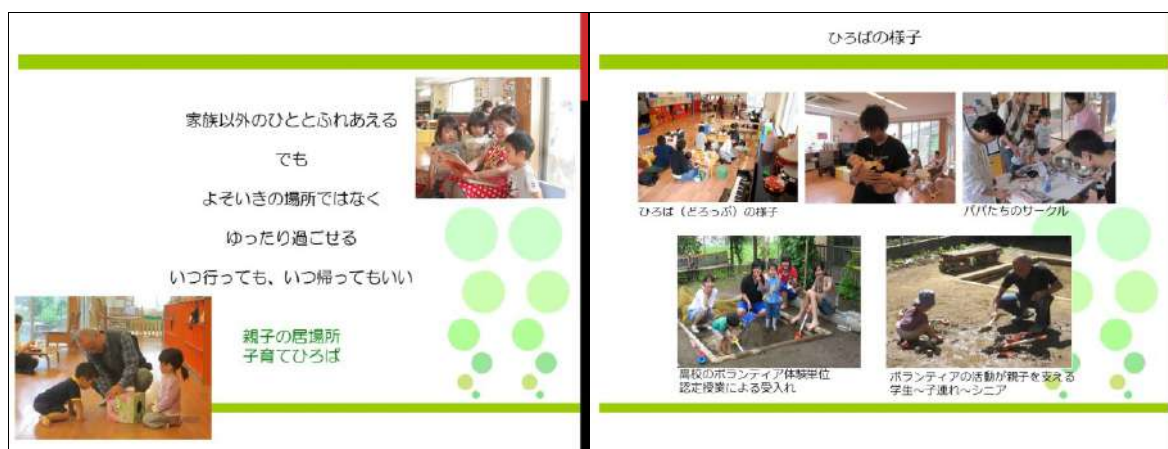
ちなみに横浜市が実施した無作為3万人の大規模調査において、子育て経験がある人、ない人に関する質問項目があります。初めての赤ちゃんが生まれる前に赤ちゃんのお世話をしたことがないという人の割合が、わずか5年の間に急激に増えており、今はもう75%です。おそらく、この調査は今後も実施されるでしょうが、そうした人の割合が8割になる日も近いだろうと思います。このような質的に急激な変化が起きている中で、私たちも何を伝えていけばよいのかということについて、もっときちんと考えなければいけないと日々思っているところです。



多様なボランティアさんに囲まれてさまざまな体験を

びーのびーのやどろっぷには、ボランティアさんが毎日よく来てくれますが、私たちは、S ボラさんと呼んでいます。S は高齢者ボランティアと言うと怒られるので、（シニアではなく）“すてき”とか、“スーパ―”といったような意味です。写真のエプロンをした方も、お子さんが3 人とも巣立ってしまい、保育ボランティアとしてこのようにおばあちゃんのように読み聞かせなどをしてくれて、子どもたちは本物のおばあちゃんとはまた違う温かさを感じています。

本日、参加されている方々の中にも、子育て支援の活動をされている方もいらっしゃいますが、体験することの大切さは感じていらっしゃると思います。さきほどご紹介したように 75%は子育て未経験、ということでもあるので、私たちは保育園ではありませんが、多様な人たちに囲まれながら、「食う・寝る・遊ぶ」という 3 要素を体験できるように心掛けています。



居場所を知らない人たちに会えるように

私たちは、このように親子の居場所である「子育てひろば」の温かさを伝えようと積極的に取り組んでいますが、ただ一方で、親の志向も変わってきており、子育て体験のない方たちもたくさん増えているので、居場所に来てもらえるきっかけ作りとなるように、私たちから働き掛けるアウトリーチも地域の人たちと協力しながら取り組んでいます。例えば私たちは「子育てタクシー」と呼んでいますが、民間の企業に協力いただき、タクシードライバーのみなさんに対して、妊婦さんや子どもが1 人でタクシーに乗るときの対応を身につけてもらうように、ひろばで研修を行うなど普及啓発もしています。



地域の人たちと協力しながら、こうした取り組みをしていくことで、さまざまな出会いの場面をつくっていき、「子育てひろば」のことを一人でも多くの人たちに知ってもらえればと思っています。

子育て情報の発信を通した幼児教育の環境づくり

びーのびーのは活動を始めた当初、居場所の家賃 21 万円の支払いについては何の補助もなかったため、収益事業として幼稚園・保育園ガイドブックの編集・制作に取り組むようになりました。当初、1冊つくと、3カ月分の家賃が賄えるので 10 年来継続しています。

びーのびーの「子育てひろば」で過ごした乳幼児がこの先どのように幼稚園や保育園で過ごしていくのだろうかということ視野に入れて、第三者評価とまではいなくても、NPO として私たち自身がしっかり情報をまとめて——親の立場としては子どもを預けた園に対してなかなか言えないこともあるでしょう——ガイドブックとして発信していくことで、一緒に幼児教育の環境づくりをする一助となることを目指しています。また、港北区社会福祉協議会からの委託事業として、子育て情報をウェブ上のサイトでも発信しています。

情報発信にあたって常に大事にしているのは、「当事者を真ん中にする」ということです。私を含めてびーのびーのを立ち上げたメンバーは、子どもが中高生、大学生になってきています。当事者が声を出していくということ言えば、発信する情報のつくり手の中心にいるのは、子育て真っ最中の親たちです。その人たちが、今、何が楽しくて、何が苦しいのか、そして何が知りたいかということから出発するというプロセスを大切にしています。



“よるべない私たち”——事業者ではなく当事者・生活者として

今回改めて、このような発表の場をいただいて、私たちは 17 年間、何を大事にして活動してきたのかを私なりに振り返って考えてみると、常に“よるべない私たち”という思いを抱いていたと感じています。現在、子育て支援事業者ということで、資格を持っているスタッフももちろんおりますが、でも根底にある共通した思いは、地域で子育てした親たちがたまたま集って活動しているということです。このことは絶対に忘れないようにしています。

びーのびーのは港北区に特化して活動していますが、それは港北区が自分たちの地域だと思っているからですし、他の地域や他市町村にフランチャイズするという発想もまったくありません。費用対効果や労働対価に見合わない活動をしていても、そこにエネルギーを費やせるのは、自分たちのふるさとだからですね。

親にとっては縁あって、たまたま住んだ港北区ですが、子どもたちにとっては確実に産まれたふるさとなるので、親として、そこに住んでいる大人として、この港北区でこういった環境づくりができるかということを考えているのです。そうした、当事者であり生活者であるという思いを、私たちスタッフは共通して抱えています。

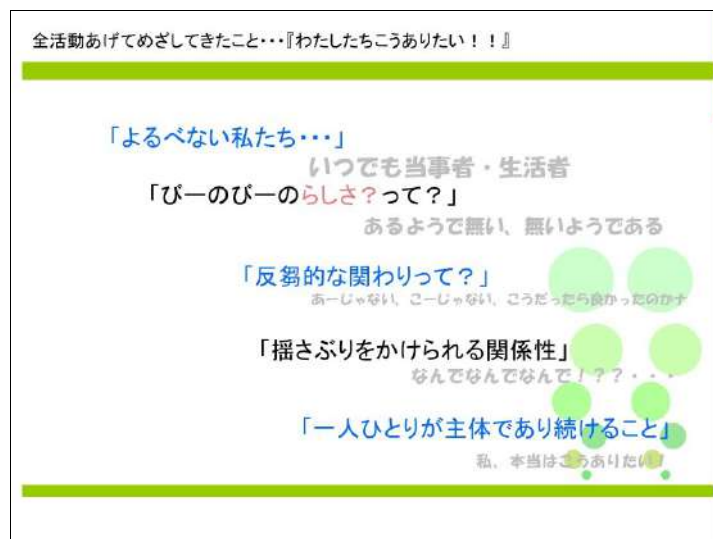
“反芻的な関わり”と“揺さぶりをかけられる関係性”

そしてもう一つ大事にしてきたものとして、特に対人援助にあたっては“反芻的な関わり”があります。「あーじゃない、こーじゃない、こうだったら良かったのかな」といったような関わりのプロセスについて平坦に平等に語り合いつつ、試行錯誤していく中で生まれてくる、“揺さぶりをかけられる関係性”もとても大事にしています。

子育て支援に対する思いには、私たちスタッフそれぞれがもつ自分の価値観が色濃く反映されます。「どうして、あの親子に対してあのような関わり方をしたのか」「何がしたかったのか」と、一方ではそれを否定されるような見方もある中で「すべてはやはり、より良い子育て環境のためだね」といったように揺さぶりをかけられる。そうした時に「なんで?」「なんで?」と、自分に問いを投げ掛けることをとても大事にしています。

“一人ひとりが主体であり続ける”ために

そして、これで良かったのかなと思う価値や判断の決定を誰かに任せるのではなく、「自分で決めていくこと」を大事にしており、それがびーのびーの“らしさ”だと思っています。“一人ひとりが主体であり続ける”とはどういうことだろう?と職員もボランティアも利用者もみんなで考えていくということです。誰もが持っている、自分は本当はこうありたい!という思いを、さまざまな場面——さきほど紹介したガイドブックを発行するとき、「子育て広場」で使うおもちゃを買うとき、あるいは名札1個を付けるとき——どんなに些細なことでも、意図を込めることができるように、そのプロセスを担保することをとても大事にしています。

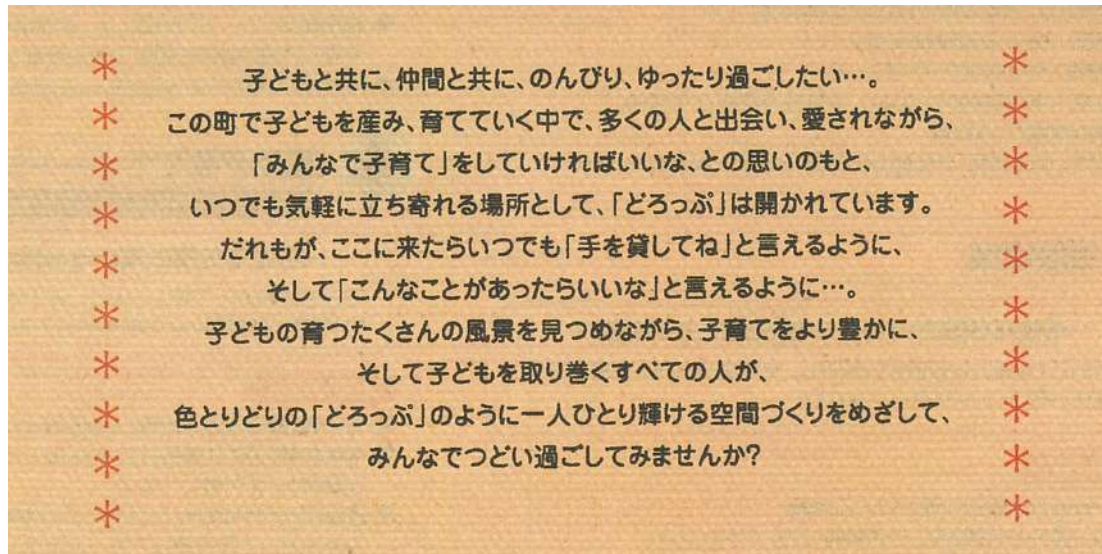


エピソード1：「私にとっての○○」と、一人ひとりの思いを込めていく

これまで 17 年、活動してきた中で、私自身の中にもいろいろな思い出やエピソードがあって、自分自身

の価値観が揺さぶられる経験はたくさんありました。パンフレットの原稿を作った時のことですが、その校正の段階でみんなの手が入って真っ赤になって、私がつくった原文がなくなってしまったこともあります。それはそれとして凹むのですが、ただ一方で、そのことの意味としては、スタッフそれぞれが自分にとってのびーのびーの、自分にとっての子育て広場はこうありたい！という思いがすごくにじみ出ているのです。

どろっぶを紹介するパンフの表紙にあるリード文も、そのたった 10 行を生み出すのに本当に 3 日間ぐらいかかっています。いわば「私にとっての〇〇」という、一人ひとりの思いを込めていく作業はとても大事にしています。そして、みんながそうしたことを言い合える関係にあるということも、組織だけにとどまらず地域をつくっていく上でも大事なことだと思っています。



【どろっぶのパンフ表紙より】

エピソード 2：収益を上げることが目的だったけど・・・

さきほど紹介した幼稚園・保育園ガイドをつくるときにも、家賃や活動を維持していくのがとても大変で、「3 カ月分の家賃を生み出すには、手取り早くつくり収益が上がればいい」という考え方もありましたが、そうではないだろうと。「幼稚園や保育園を選ぶときには、簡単に〇×だけで決められないよね。それぞれの園の理念やこだわりのようなものに触れて、親自身がしっかり選ぶということをやってもらうことが、各園の質的向上にもつながるのではないかな。発行するって、それぐらいの責任があるよね」ということを考えていました。

活動の場を維持するための収益源として考えていたはずなのに、ガイドの発行そのものが大変な作業になってしまいました。NPO には、本業よりも他の事業の方が大変になってしまうことが数多くあると思うのですが、そういったかたちで一つひとつの事業に思いを込めていくことが、しかもメンバーからの発意によってなされるのはすごく大事なことだと思っています。

エピソード 3：何が大事か！？を大事にしてくれる大事な存在

それからまた「何が大事か！？」ということと一緒に大事にしてくれる人をいつも大事にしていきたいと思っています。例えば、どろっぶの施設は、次世代育成支援行動計画の目玉事業として、児童館のなかった横浜市に初の公的支援センターとして、横浜市肝いりでできた施設です。私たちは当時、商店街の中にある

本当に吹けば飛ぶような 20 坪の空き店舗で活動していましたが、どろっぶを任されるということになって、「在宅家庭支援のモデルとして横浜が初めてやるのであれば、土と光と水という 3 つの要素を保障しなくて何がモデルといえるのでしょうか」ということを法人として強く主張していました。

開設前準備金を十分に積んでいたわけではないので、行政としてはどこかテナントが撤退した跡地などを想定した改装費しか積んでいなかったわけです。ただ、保育所に入ればゼロ歳児の子どもが月額十何万と保障される一方で、横浜市では、たまたま保育園に入れなかったために家でずっと子育てしている家庭もたくさんあります。同じ次世代を支える子どもなのに、どうしてその子に行くのは、月額 5,000 円の児童手当だけなのか。だからこそ、1 日 100 組の親子が利用する建物として、どういうものを造り、何を応援するかといったことはとても大事だと考えていたので、横浜市に対しても、きっちりとそうした主張をして、出てくるテナントを全部断っていました。年度の事業として 3 月までに執行しなくてはいけないスケジュールでしたが、最終的に現在の場所が見つかったのは 12 月でした。

大事にしていることを一緒に大事にすることで共感の輪を広げていく

ただ一方で、私たちは NPO として不安も強く感じていました。困った人がたった 1 人でもいれば、その人のため動くのが NPO の行動原理と考えていたので、「みんなの広場」なんてあり得ない、顔の見えない人々たちを支援するということは考えられなかったし、公的支援センターを請け負うことの怖さをとても感じていたので、できれば市側から断ってもらえたらいいな、ということも思っていました。

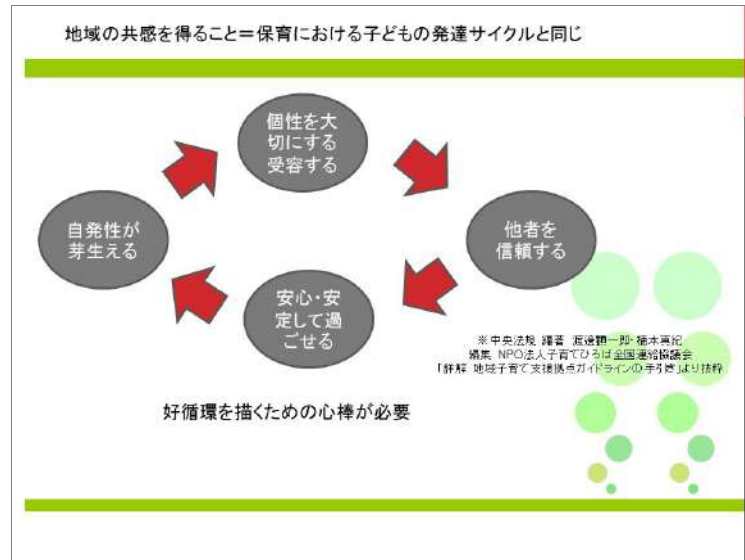
場所の件をはじめとして、他にもいくつか条件を出しました。支援者側への支援を大事にするとか、要綱上の目標をすべて単年度で達成するような目標設定はしないこと（たとえば具体的に言えば子育て広場という対人の文化を地道に育んでいくことで、次のネットワークや人材育成が生きてくるのであって、1 年目からそれを求められるのは難しいといったこと）などを主張しました。

結局、どろっぶは地主さんが最初に初期投資をしてくれて、家賃を 10 年かけてお返しするという民設民営のスキームでやることになりました。最初の子育て支援拠点をこうしたスキームでやったことがきっかけとなったのか、他の 3 区か 4 区でも、地元の篤志家である地主さんに働きかけをしていくことで、同じようなスキームで取り組んでいます。どろっぶサテライトの場所探しについては、行政も一緒に探してくれ、地主さんに対し待機児童対策としてこういった拠点事業にもぜひ貸してくれませんか、建ててくれませんかをお願いして、先行投資で造ってくれています。

このように何が大事かということと一緒に大事にしてくれる存在というのはとても大事であり、そういう信頼関係に感謝するとともに、これが共感の輪を広げていくのだなと思っています。

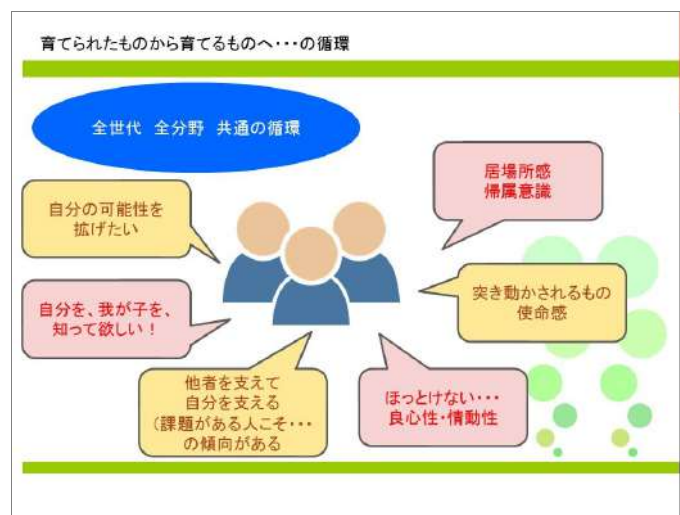
地域の共感を得ること＝保育における子どもの発達サイクル

常日頃思うこととして、地域の共感を得ることと保育の子どもの発達サイクルは同じだなと思っています。このサイクルはどこから始まってもいいのですが、この循環を積み重ねていくのが大切だと。個性を受容すると、他者を信頼するようになり、自分にとっての安心・安定が得られる。そしてそこで関心が生まれてきて、自分でやりたいことをどんどん見つけていくというサイクルです。地域の共感を得るということは、この好循環を地域の中で回していくことかなと思っています。このサイクルを回して、巻き寿司のようにどんどん野太くしていくことが、おそらく私やここにいるみなさんの活動なのだろうなと思っています。



育てられたものから育てるものへ

これは、子育て支援という私たちの分野だけに限ったことでなく、そしてまた今日ここに来られているみなさんもそうしたことを感じている方々が多いのだらうなと思っていることとして挙げられるのが、「育てられたものから育てるものへの循環」ということです。どろっぷに来る人たちを、日々一人ひとり見ていると「生かされている」あるいは「元気がもらえるな」と本当によく感じています。ボランティアさんがたくさんいるのは横浜だからよねとか、時間に余裕があるからよね、などいろいろな言われることもあります、私自身は、まったくそうは思いません。



もちろん利用者で子どもを連れてくるボランティアさん（親子ボラさんと呼んでいます）もいますが、その人たちがゆったり過ごしているかと言えば、そうではなくて、One of them でいたいという承認欲求行動の一つの現れとして人とかかわりを持ちたいと思っている人たちもいます。すごく力のある人がボランティアをするというわけでは決してないと思っていて、「私はここにいる」ことを自分からアピールしていくことから始めて、誰かを支えたり、支えられたりという互酬性の関係ができてきて、それが力になってくると思っています。まさにびーのびーのの構成員がそれぞれ自身に課題があるからこそ、誰かを支えて自分を支えようと思うのかもしれません。

こうした事例は本当にたくさんあって、育てられたものから育てるものへ、という変化が見られるのが、私たちにとって——みなさんもそうかと思いますが——活動の醍醐味かなと思っています。最初は相談で来るのですが、相談を待っている間に、違う人の相談に乗っていて、実は相談することがなくなっちゃったといったことってありますよね。おそらく介護の分野などでも同じなのかもしれませんが、そういったダイナミズムやイレギュラーなことが現場ではたくさん起こってきますが、「地域の中で支え合い」って本当にこういうことだな、ということを感じさせてもらっています。

そうした意味で、地域をつくる次世代にも活躍してもらいたいと思い、取り組んでいる一つが、空き家を借りて行っているアプリ開発です。慶應や東大の学生さんなど IT に長けた人たちが、CODE FOR KOHOKU という子育てアプリを開発しています。子連れで握り飯と豚汁で晩ご飯を取りながら、夜な夜なこういった作業を通しているところです。いろいろなチャンネルを使いながら地域をつくるきっかけを発信するのはすごく大事だなと思っています。さきほど触れたように、イレギュラーなことが起きるのがすごく楽しくて、誰と出会うか、誰が周りにいるのかということで、活動もダイナミックなものに変わると、いつも思っています。

地域をつくる次世代の活躍

CODE FOR KOHOKUの作業風景

オープンデータを活用した子育て情報サービス検討プロジェクト勉強会 vol.3

GITHUB データ打ち込み編

4時間一本勝負で保育園アプリつくってみよう！

◆日時：11月12日土曜日 16時～20時

◆会場：えんがわの家 よってこしもだ
<http://engawanole.com>

Code for Sapporoの保育園アプリを参考に
海老蔵をつくってみます。
 エクセルができる方なら大丈夫！
 #保育園探すの私だ！という方
 #NPO×ITという方
 #とりあえず地域のためにスキル活かしてなんかやってみたいのかた
 #よくわからないけど、おもしろそうだから行ってみよう！という人です！ぜひ、大歓迎！
 インターネットにつながるパソコンなどご持参ください
<https://www.facebook.com/groups/kohoku-cfp-since-2016/>

港北区地域子育て支援拠点 どんぐり×港北区役所区政推進課×こども家庭支援課
 参加中、問い合わせ どんぐり 館中
 TEL045-540-7420 / y-hatanaka@kohoku-drop.com

地域の共感を得るためには、いろいろなセオリーがあるのだと思うのです。そんなにたやすく共感を得られないということも多々あります。ただ私たちの場合は、最初、子育て真っ最中の親たちでスタートして、周りの人たちからすれば「何か助けてあげないと、この人たちはどうなっちゃうんだろう」という、たぶん危うさみtainなものがあったのだと思います。親子の居場所は絶対に必要！と思って熱いのでつくったので

「あ、3カ月後に家賃払えなくなるじゃん」というような甘い見通しでもありました。思い切り開き直った言い方をさせていただくと、「何かほっとけないな」というところが、結果的には助けてくれる側の力を引き出してくれていたのかな、と思っています。

あと、私自身が原動力として感じているのは、(みなさんもそうだと思うのですが) 驚きや憤りを感じるのがとても大事だと思います。「え？ 今どき、この時代に、こんな不利益を被っている人や家庭がまだここにいるの？」と結構、度肝を抜かれることがありますよね。そしてそれは怒りになって出てくるのですが、実はそこを感じたときに着手するチャンスだと思っていますので、どう取り込むかということに、日々知恵を絞り、力を注いでいます。

そうしたときに意外とキーワードになっているのは「となりのおばちゃんこそすごい専門性だな」ということです。ただ遊ぶだけ、ただ抱っこしているだけ、ただいるだけといった行為の、“ただ”ということが普段、意外となかなかできない。損得を考えず情動性で動ける強さがあると思っています。遊ぶことのできる野っ原もなく、何か声を掛ければ変質者だと通報されかねない時代の中で、となりのおばちゃんとして声を掛けることができるというのは、本当にすごい専門性だなともいつも思います。

さきほどSボラさんの話をしましたが、何か困ったというときに、「あ、それぐらいだったら私やれるかも」と支援に動ける人を増やしていくことが、問題が重大になる前の予防として大事だと思っています。ちょっとした困りごとを早くキャッチして、「そんなことであれば、やれるわ」と支援できる人は地域に数多くいるのではないのでしょうか。そのきっかけとなることをつづやいていくのは、もしかしたらソーシャルワーカーなのかもしれないし、行政の人かもしれないし、私たち NPO かもしれません。こうしたことを通して、関われる人を増やしていくのが地域の共感の輪を広げていくことだろうなと思っています。

そして、その際に、何か一つ支援してもらったら、それをさまざまな人が賛美することが大事です。私たち町内会が予算をかけてベビーキープ（トイレで大人が用を足している間に、赤ちゃんを保持する設備）を付けてもらったりすると、みんなでもろ手を挙げて感謝します。「え？ こんな人からもお礼を言われるんだ」と思われるほどの人にも言うてもらうようにして、一つのことがいろいろな人に認められるという場面をつくっています。

地域の共感を得られるために(1)

- ぜんぶを自分たちでやらないし、当然やれない
- 障壁(驚きや憤り)を感じて包摂となる(ありきたりだけど「ピンチをチャンス」に・・・)
「この不安感はいかばかりか・・・！？」
「こんな人がまだこんなところにいた・・・！？」
「となりのおばちゃんこそすごい専門性では・・・！？」
- 役に立ってもらう前に役に立つ鉄則(Win Win)
- 多少のエビデンスを持って伝える
「ちょっと困った・・・」の時点で「それならやるわ！ できるわ！」
の関われる人を増やすことが地域でできること
- 1つの功労が100の賛美に・・・



地域の共感を得られるために (2)

どろっぶの最初の施設は建てられてから 14 年が経っていますので、ゼロ歳児で来た子たちが小学生や中学生になっています。その子たちが何を語り始めるかなということがおそらく自分たちの成果だと思っています。だから、自分たちの成果や評価は、自分たちで出すのではなく、ここで育った子たちがどういう育ちをしていくかということが勝負だと思っているのです。小学生たちは遊びに来て、それこそおばちゃん的な専門性をもって、誰にもまねできない関わりをしてくれます。このようないろいろな人たちの居場所になってほしいと思っていますので、ルールはなるべく決めずに、どれだけ「場そのものを開放していけるか」ということを心掛けています。

活用の仕方はこちらで考えるというよりは、利用する人たちが考えるわけです。一応私たちが公的なセンターなので制約はありますが、「こういう利用の仕方を要望してくるんだ!？」というぐらいユニークで、すごいなと思いました。だから立ち上げた 1、2 年目は、私は毎日試されている感じでした。離婚した人たちの面接交流の場に使いたいとか、引っ越してきた片付けが済むまでのあいだおじいちゃん、おばあちゃんが過ごす場にしたいとか、予想もしないような場の使い方の要望が出てきます。

どこまで自分たちのバッファを広げるかといった時に、それは外から何かが来て広げられていくような感覚をもったことは、おそらくみなさん、ありますよね。その押しやり引いたりする、攻勢のようなものもとてもおもしろいです。そして、そうした時に、一緒に子育てをしているという実感を私たちが持てることをとても大事にしています。

地域の共感を得られるために(2) 小学校・中学校・高校



地域の共感を得られるために(3)



地域の共感を得られるために(4)



地域で家族を増やしていく

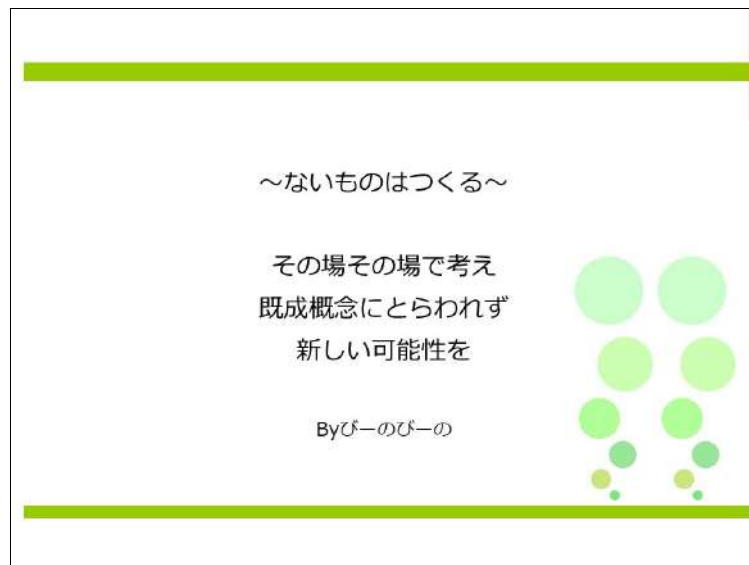
一方で現在、難しいなと感じているのは、恩返しのためにそれぞれができるかたちで何らかの支援をしてくれる人もとても多いのですが、そうした動きが広がることで、かえって「何か恩返しをしなくちゃ」とプレッシャーをかけてしまう、ということもあります。ただ、いわば「市民の、市民による、市民のための活動」の輪がどんどん広がっており、「自分たちは地域の中で生きているんだ」という証しというか確固たるメッセージをいろいろなところで感じています。

ただ、その輪が全員に届けられるわけではない、ということもいつも頭の隅にはあって、今の自己責任社会の中で、ずっとがむしゃらに突っ走ってきた人たちや働き続ける親たちにとっては、そういった共感が大事であるという体験がないが故に、まだ実感することができていないと思います。そういう人たちに対して、どのように「一緒に輪に入って」と働きかけていくことができるのか、その輪の広げ方についてもこれから私たちびーのびーのとして考えていかなければと思っています。

さきほど井手さんが、国家は国民の家であるというスウェーデンのハンソンさんの話をしてくださいました。びーのびーのも、地域としては港北区に特化していますが、いろいろな活動をみんなとやってきて、それでも気楽にいられると言うか、気持ちとしては、すごくユルユルとやることができるのは、港北区で活動しているさまざまな人たちとともに、家族を増やしていくような作業だからなのかなと思っています。

だから、利用者もちろん大事ではありますが、活動している私たち自身を始めとするスタッフやボランティアが生き生きしていることや、周りに生かされていることがすごく大事ななと思っているのです。活動そのものは、猛ダッシュで走りながら悪戦苦闘しているのですが、でも一方で、根底で気楽にいられるのは、いわば“安心の根っこ”のようなものが広がっている実感があるからです。だから、自分に何か起きてても助けてくれる母体がある！という安心のつながりを感じていますし、自分が他者を支援しているようで、やはり助けられているのだなと思っています。

こうしたつながりの輪を地域の中で広げ、自分自身も心豊かに生きていけるような「頼り合える社会」をつくっていければと思い、日々活動しています。以上です。



2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議 / 討議者・運営委員プロフィール

【 討議者(五十音順) 】

加藤 忠相	株式会社あおいけあ代表取締役社長
名里 晴美	社会福祉法人訪問の家理事長 ※①講演会パネリスト
馬場 拓也	社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事 ※②勉強会講師
早川 仁美	地域のお茶の間研究所さろんどて代表 ※②勉強会講師
原 美紀	NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぶ施設長 ※③シンポジウム講師
府川 悟志	小田原市市民部地域政策課長
褒 安(べい あん)	NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター理事長
三浦 知人	社会福祉法人青丘社事務局長 ※①講演会パネリスト

【 運営委員(五十音順) 】

小川 泰子	社会福祉法人いきいき福祉会理事長／ラポールグループ総合施設長
樺山 紘一	印刷博物館館長／東京大学名誉教授
黒田 玲子	東京理科大学研究推進機構総合研究院教授／東京大学名誉教授
高島 肇久	株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長
林 義 亮	神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹

■ 討議者(五十音順) ■

【 加藤 忠相 (かとう ・ ただすけ) 】 株式会社あおいけあ代表取締役社長

神奈川県藤沢市で高齢者福祉サービスを実施している。お年寄りの管理・支配をする介護の現状に愕然とし、現在の会社を開始する。お年寄りの力を使って地域へ広げていくことをモットーに、小規模多機能型居宅介護「おたがいさん」を展開。その取り組みは、「第 1 回かながわ福祉サービス大賞」として認められ、地元を中心に同じ思想を持った仲間とともに取り組みが広がりつつある。

単に介護サービスを提供するだけでなく、利用者的高齢者が地域の活動に参加し、社会資源として活かされ、やりがいや役割を持ち輝いて生きているところに、子どもたちが立ち寄り、利用者から味噌造りや大根を干したたくわんをつくることなど、文化の継承をするような多世代が交流できる次世代型の小規模多機能型居宅介護(サービス)を広めていくために NPO ココロまちの活動も展開している。



【 名里 晴美（ なり ・ はるみ ） 】 社会福祉法人訪問の家 理事長

社会福祉法人訪問の家は、法人設立以来 30 年を迎える。重症心身障害者といわれる重い障害のある人たちの通所施設が、まだ法律にない時代に、学校卒業後も通える場、集える場として、最初の施設「朋(とも)」を開設。横浜市栄区を中心に、磯子区・旭区においても障害者施設や障害者グループホーム、高齢者デイサービス事業等を展開し、現在 27 の事業所を運営。



朋開設当時の「目の前の人々が望んでいるであろうことを実現させよう」という精神は、今の訪問の家の理念「一人ひとりを大事に」に、そしてまた「文化施設としての社会福祉施設」(創設者・日浦美智江の言葉)という精神はもう一つの理念である「誰もが暮らしやすい社会づくり」につながっている。

【 馬場 拓也（ ばば ・ たくや ） 】 社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム 常務理事



大学卒業後、イタリアのファッションブランド「ジオルジオ アルマーニ ジャパン株式会社」入社。トップセールスマンとして活躍した後、2010 年に現在の法人に2代目経営者として参画。法人改革に邁進すると同時に、全国 20 の社会福祉法人と共同で“写真×論考”の書籍「介護男子スタディーズ」を企画・出版。厚生労働省介護人材地域戦略会議にて全国に呼びかける。

また、地域との隔たりであった施設を囲う壁を取り払い、特養と地域との“距離”再考プロジェクトを企画。若手建築家・造園家・大学生らと共に誰もがアクセス可能な座れる庭「ミノワ・座・ガーデン」を完成させ、地域に開かれた運営を推進している。現在 ICT による介護記録システム「ケアコラボ」の開発を推進している。著書に「～職場改革で実現する～介護業界の人材獲得戦略(幻冬舎)」を持つ。

【 早川 仁美（ はやかわ ・ ひとみ ） 】 地域のお茶の間研究所さろんどて 代表

地域のお茶の間研究所さろんどてでは、高齢者や赤ちゃん連れの親子が集う地域の居場所である「さいとうさんち」、妊婦と 0 歳児の赤ちゃんを育てるお母さんを対象に月 1 回、居場所を開放する「プレママと赤ちゃんの日」、居場所に来る人たちの話を受け止めるための傾聴講座、子ども食堂「いただきます」などの事業に取り組んでいる。

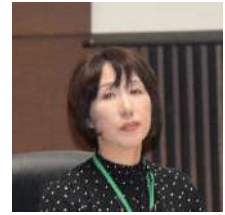


地域のお茶の間は、高齢者が胸の内を吐き出し、また若い世代とのかかわりを持ち、子どもたちを見守るなどの出番をつくる場となり、若い母親たちにとっても、子どもを通じた出会いの場となっており、子育て全般の相談もできるようになる。誰かが誰かの役に立つような、地域にいるさまざまな専門家をつないでいける居場所を目指している。

【 原 美紀（ はら ・ みき ） 】

特定非営利活動法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっぶ施設長

横浜市出身。2 男 1 女の母。大学卒業後、出版販売会社に勤務、新規事業開発担当としてマーケティングを行う。2000 年「NPO 法人びーのびーの」を子育て当事者である親たちで立ち上げ、仲間とともに「おやこの広場びーのびーの」を商店街空き店舗に開設。2006 年に「地域子育て支援拠点どろっぶ」を横浜市委託事業として運営。施設長を務める。社会福祉士。横浜 18 区での同業者でのネットワークを創り、実践者同士の連携を強固に、子育て支援の在り方を検証中。



現在は「新しい協働を考える会」という研究組織もネットワークとして立ち上げ、契約実務に踏み込んだ協働の第 2 のステージとしてあるべき姿、仕組みを模索している。NPO 法人アクションポートよこはま理事。神奈川県かながわ協働推進協議会委員、港北区地域福祉活動計画策定・推進委員会委員、神奈川県立港北高校評議員など務める。

【 府川 悟志（ ふかわ ・ さとし ） 】 小田原市市民部地域政策課長



1964 年秦野市生まれ。88 年に明治大学法学部卒業後、民間企業勤務を経て 91 年に小田原市役所入庁。固定資産税評価、高齢者福祉、防災対策、水道事業、下水道事業の担当を経て 2009 年より現在の課に所属。地域コミュニティ組織の設立支援のほか市民活動推進を担当。

地域担当職員として市内の地域コミュニティ組織との活動支援や連絡調整を担当するほか、おだわら市民交流センターの整備開設に関わった後、2016 年より現職。自治会活動支援、地域コミュニティ組織支援のほか、市民活動支援を所管。居住地区において PTA 活動の後、青少年育成会、自治会等の地域活動に参加している。

【 斐 安（ ぺい ・ あん ） 】 NPO 法人かながわ外国人すまいサポートセンター理事長



東京都出身の在日コリアン 2 世。1998 年から外国籍県民かながわ会議第 1 期委員、第 2 期副委員長を務めた。上記センターは、この会議の最終提言書に盛り込まれた外国籍県民の入居支援に関する提言を实践すべく設立された。その他「外国人学校ネットワークかながわ」共同代表、困窮者自立支援団体「一般社団法人インクルージョンネットかながわ」理事などを務め、ともに生きる地域、社会を目指し活動展開中である。

【 三浦 知人（ みうら ・ ともひと ） 】 社会福祉法人青丘社 事務局長



社会福祉法人青丘社は、関東では屈指の在日コリアン集住地域・川崎市川崎区桜本で、40 年以上前から在日 2 世のコリアン住民が中心になって、民族差別に向き合う地域活動を推進。地域の具体的な生活の中で差別をなくし、ともに生きる地域社会を掲げて歩み、多様な生活課題に向き合う自発的活動が生まれてきた。

子育てを中心に教育、高齢者・障害者問題など、多様な分野の活動をにない、人権活動、文化活動、外国人支援活動、街づくり事業などを住民参加型事業として展開している。こうした取組みを踏まえ、ともに生きる地域づくりをまもり、在日コリアンに対する民族差別をあおるヘイトスピーチを解消する運動の中心となって、取り組んできている。

■ 運営委員（五十音順） ■

【 小川 泰子（ おがわ ・ やすこ ） 】

社会福祉法人いきいき福祉会理事長／ラポールグループ総合施設長

証券会社、外資系企業勤務の後、89 年、福祉クラブ生活協同組合理事に。92 年、神奈川ワーカーズ・コレクティブ連合会理事長。96 年、生活クラブ生活協同組合副理事長、生活クラブ運動グループ福祉協議会会長。98 年、社会福祉法人・いきいき福祉会理事、特別養護老人ホーム・ラポール藤沢施設長。2017 年、同社会福祉法人理事長。2003 年、厚生労働省社会保障審議会介護保険部会臨時委員。2011 年、内閣官房「社会保障に関する集中検討会議」委員、厚生労働省医政局「医療・介護サービス連携会議」委員等を務める。神奈川大学法学部非常勤講師・同大学プロジェクト研究所客員教授。主な著書に『協同の時代』（共著）、『住民参加型の福祉活動』（共著）など。



【 樺山 紘一（ かばやま ・ こういち ） 】 印刷博物館館長／東京大学名誉教授

1941 年東京生まれ。専門は西洋中世史、西洋文化史。東京大学大学院修士課程修了後、京都大学助手、東京大学助教授、同大学教授、国立西洋美術館長を歴任し、2005 年 10 月より現職。著書に『ゴシック世界の思想像』『歴史のなかのからだ』（岩波書店）、『カタロニアへの眼』（刀水書房）、『西洋学事始』（日本評論社）、『ヨーロッパの出現』（講談社）、『歴史の歴史』（千倉書房）、共編著に『解はひとつではない』（慶應義塾大学出版会）ほか多数。



【 黒田 玲子（くろだ・れいこ） 】

東京理科大学研究推進機構総合研究院教授／東京大学名誉教授

仙台市出身。お茶の水女子大学理学部卒業。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1975 年から 86 年までロンドン大学キングス・カレッジおよび英国癌研究所にて研究・教育に従事。86 年東京大学教養学部助教授、92 年同教授を経て、同大学大学院総合文化研究科教授。2012 年 4 月より現職。



専攻は、化学、分子・発生生物学、分光学。ミクロ(分子)からマクロまで自然界に普遍的に現れるキラル(左右非対称)な形態に着目し、キラル認識、創生、増幅、転写を固体化学で追求。分光装置を開発しタンパク質の凝集過程の研究に展開。さらに、巻貝の左右巻型決定遺伝子と決定機構の解明に取り組んでいる。著書に『生命世界の非対称性』『科学を育む』(中公新書)など。2008 年国際科学会議(ICSU)副会長、2009 年スウェーデン王立科学アカデミー外国人会員に選出される。

【 高島 肇久（たかしま・はつひさ） 】 株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長

1940 年生まれ。学習院大学政経学部卒業後、63 年 NHK 入局。ワシントン支局、ロンドン支局長、報道局国際部長、「NHK ニュース 21」でのキャスター、報道局長、解説委員長などを経て退職。国連広報センター所長に就任し、日本国内での国連の PR を担当。その後、外務報道官として、日本外交のスポークスマン役を務め、退官後も参与として広報面のアドバイザー役となる。2006 年からは学習院大学法学部特別客員教授と国連大学学長特別顧問に就任。2008 年 9 月より 2011 年 5 月まで株式会社日本国際放送代表取締役社長を務める。2015 年 11 月より現職。



【 林 義亮（はやし・よしあき） 】 神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹



1952 年生まれ。89 年神奈川新聞入社後、県警、遊軍、川崎、県庁各記者クラブキャップを経るなどして、99 年報道部副部長兼論説委員、2005 年編集委員兼論説委員。09 年論説主幹、12 年統合編集局長、13 年取締役統合編集局長、15 年取締役論説主幹。16 年から現職。

「21 世紀かながわ円卓会議」これまでのトータルテーマとプログラム

<第1～7 次シリーズまでのトータルテーマとモデレーター>

開催年度	トータルテーマ	モデレーター
第1 次 / 2000～02 年度	グローバリゼーション	鈴木 佑司（第1 回） 樺山 紘一（第2・3 回）
第2 次 / 2004～06 年度	21 世紀を構築する	樺山 紘一
第3 次 / 2008・09 年度	新しい都市と地域	神野 直彦
第4 次 / 2010・11 年度*	コミュニティが育む人間性	神野 直彦
第5 次 / 2012・13 年度	地 域 力	神野 直彦
第6 次 / 2014・15 年度	地域社会を活性化させる民主主義	神野 直彦
第7 次 / 2016・17 年度	神奈川のコミュニティとグローバリゼーション	井手 英策

※第4 次の2010 年度は東日本大震災により開催中止

【第1 次】21 世紀かながわ円卓会議（2000～02 年度／全3 回）

開催時期	トータルテーマ 「グローバリゼーション」
2001 年 2 月	「グローバリゼーションと新しい価値観」 趣旨説明 鈴木佑司（法政大学教授） 第1 セッション「グローバリゼーションに対応する新しい価値観と倫理観の創出」 樺山紘一（東京大学教授）／ 鈴木佑司（法政大学教授） 第2 セッション「アジア的価値観の貢献は可能か」 福原義春（かながわ学術研究交流財団理事長）／ 川勝平太（国際日本文化研究センター教授） 第3 セッション「文化の接触と変容から見た近代アジア」平野健一郎（早稲田大学教授）
2002 年 2 月	「グローバリゼーションの進展と市民社会の役割」 趣旨説明 樺山紘一（国立西洋美術館長） 第1 セッション「アジアの状況をどう見るか」小島朋之（慶應義塾大学教授） 第2 セッション「グローバリゼーションとイスラム社会」片倉もとこ（中央大学教授） 第3 セッション「アメリカの世界観とアメリカ市民社会のゆくえ」五十嵐武士（東京大学教授） 第4 セッション「21 世紀と新しい市民社会の進展」福原義春（かながわ学術研究交流財団理事長） 第5 セッション「グローバリゼーションとローカリゼーション再考」鈴木佑司（法政大学教授）
2003 年 3 月	「グローバリゼーションのゆくえと日本」 趣旨説明 樺山紘一（国立西洋美術館長） 第1 セッション「途上国の自立と調和的な世界経済システム」原洋之介（東京大学教授） 第2 セッション「宗教とナショナリズム」小杉 泰（京都大学大学院教授） 第3 セッション「グローバルガバナンス」毛利勝彦（横浜市立大学助教授） 第4 セッション「地球社会の針路と日本」福川伸次（株式会社電通顧問・地球産業文化研究所顧問）

⇒アジアの中の日本、イスラム世界と他の文明地域との共存、国境を超える経済活動の進展などのテーマを中心に、政治学、社会学、哲学、文化人類学など多様な分野の研究者や文化人が討議。

【第2次】21世紀かながわ円卓会議（04～06年度／全3回）

開催時期	トータルテーマ 「21世紀を構築する」
2005年 3月	「超大国のゆくえと日本の対応」 趣旨説明 樺山紘一（国立西洋美術館長） 基調講演「超大国の責任と限界—21世紀の世界のガバナンス」明石康（元国連事務次長） 第1セッション「アメリカの実像—世界戦略は変わるか」五十嵐武士（東京大学教授） 第2セッション「台頭する勢力Ⅰ—中国・インド」 田島英一（慶應義塾大学助教授）／竹中千春（明治学院大学教授） 第3セッション「台頭する勢力Ⅱ—ロシア・EU」 袴田茂樹（青山学院大学教授）／羽場久泥子（法政大学教授） 第4セッション「日本はいかに対応すべきか」 船橋洋一（朝日新聞社編集委員）／福川伸次（株式会社電通顧問）
2006年 3月	「世界を走る亀裂—グローバル化に何ができるか」 趣旨説明 樺山紘一（東京大学名誉教授・印刷博物館館長） 基調講演「世界を走る亀裂—不公平に世界はどう立ち向かうか／大学の役割」 ハンス・ファン・ヒンケル（国際連合大学大学長） セッション1 「世界の公正の現状」藤原帰一（東京大学大学院教授） セッション2 「環境保全か経済開発か—環境と貧困の悪循環をどう抜け出すか」 諸富徹（京都大学大学院助教授） セッション3 「民主主義と人権」伊豫谷登土翁（一橋大学大学院教授） セッション4 「教育・文化の断層を超えるために」竹中千春（明治学院大学教授） セッション5 「格差に向き合う思想」福川伸次（機械産業記念事業財団会長）
2007年 3月	「地球と地域との協働の道——社会関係資本を組み立てる」 趣旨説明 樺山紘一（東京大学名誉教授・印刷博物館館長） 基調講演「文化の原動力」大岡信（詩人、文化功労者、文化勲章受章者） セッション1 「文化は世界をつなぐ」大原謙一郎（大原美術館理事長） セッション2 「グローバリズムの可能性と限界」藤原帰一（東京大学大学院教授） セッション3 「グローバル化と地域の持続可能な発展の可能性」諸富徹（京都大学大学院助教授） セッション4 「神奈川県土地利用から見る21世紀社会」小林重敬（横浜国立大学教授）

⇒グローバリゼーションの潮流に着目しつつ、徐々にその光と影の両面について掘り下げるようになる。第2次シリーズを締めくくる2007年3月開催の円卓会議では、最後のセッションにて＜神奈川＞という地域の視点からの展望を語る。

【第3次】21世紀かながわ円卓会議（08・09年度／全2回）

開催時期	トータルテーマ 「新しい都市と地域」
2009年 3月	「都市と地域の未来を拓く～まちづくり・ものづくり・ひとづくり～」 ◆趣旨説明&問題提起 「人間性回復のための地域社会づくり」 神野直彦（東京大学大学院経済学研究科教授） ◆まちづくりセッション 「環境と経済と社会の統合～サステイナブル・シティの挑戦～」 岡部明子（千葉大学大学院工学研究科准教授） ◆ものづくりセッション 「伝統を現代に生かす知恵産業の未来」 村山裕三（同志社大学大学院ビジネス研究科教授） ◆ひとづくりセッション 「人のつながりを豊かにするアートイベント」 北川フラム（アートフロントギャラリー代表取締役） ◆自治体からの提言セッション 「地域を拓く『文化力』」 野呂昭彦（三重県知事） ◆自治体の現状と今後の展望セッション 「地方都市が独自の文化を築くための5つの鍵」 榛村純一（前掛川市長） 「目に見えないものを目に見えるかたちにするまちづくり」 露木順一（開成町長）
2010年 3月	「築かれる都市と地域の未来～人の絆・文化の絆を紡ぐ～」 ◆問題提起 「この国のあり方 この国のかたち」 野呂昭彦（三重県知事） ◆趣旨説明 「人の絆・文化の絆が育む地域社会の未来」 神野直彦（関西学院大学大学院教授） ◆セッション1「生活と絆」 「町民の生活文化と志がかたちになるまちづくり」 寺谷誠一郎（鳥取県智頭町長） 「自分たちのまちを自分たちでつくる“地域分権”へ」 倉田薫（大阪府池田市長） ◆セッション2「地方分権の未来」 「神奈川県力を高め、新たな時代を創造する」 松沢成文（神奈川県知事） 「文化力で築く“ふじのくに”」 川勝平太（静岡県知事） ◆セッション3「産業と絆」 「地域独自の生活様式が育む『創造の場』」 佐々木雅幸（大阪市立大学大学院教授） 「都市経営の視点で創造都市戦略を展望する」 野田由美子（横浜市前副市長） ◆セッション4「学びと絆」 「いま、教育がないうこと」 広田照幸（日本大学文理学部教授） 「ひとを育てるまち／まちを創るひと」 清原慶子（東京都三鷹市長）

⇒グローバル化の影の部分である、生活様式の画一化や地域の独自性・多様性が損なわれつつある地域社会を念頭に置いて、今後、求められる「都市と地域」の役割についてディスカッション。

⇒第3次円卓会議から、運営委員会方式による企画検討を行っている。

<21世紀かながわ円卓会議・運営委員会（五十音順／2018年3月現在）>

小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長）
樺山 紘一（印刷博物館館長／東京大学名誉教授）
黒田 玲子（東京理科大学研究推進機構総合研究院教授／東京大学名誉教授）
高島 肇久（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長）
林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹）

【第4次】21世紀かながわ円卓会議（10・11年度／全2回）

開催時期	トータルテーマ 「コミュニティが育む人間性」
(2011年 3月)	「ひとを育むまちをつくる～成熟社会かながわへ～」 <u>※東日本大震災により開催中止</u> ◆趣旨説明 「人間を高める地域社会の創造」 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆ダイアログ 奥山恵美子（仙台市長）／諸富 徹（京都大学大学院経済学研究科教授） ◆セッション1「地域力で育む教育」 竹原和泉（横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長）／佐藤晴雄（日本大学文理学部教授） ◆セッション2「地域力で育む医療」 沢田貴志（横浜・港町診療所所長）／色平哲郎（JA長野厚生連・佐久総合病院地域医療部医師） ◆セッション3「地域力が育まれるコミュニティの姿」 斉藤 保（港南台タウンカフェ代表）／西村幸夫（東京大学先端科学技術研究センター教授） ◆総括セッション 平井竜一（逗子市長）
2011年 11月	「新しいかながわを築く～コミュニティを支える医療・教育・文化～」 ◆趣旨説明 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆セッション1「地域主権の医療～命の格差に向き合う地域医療～」 講 師：色平哲郎（JA長野厚生連・佐久総合病院地域医療部医師） 冒頭発言：町田宗仁（厚生労働省 相双地域医療従事者確保支援センター） ◆セッション2「学校と地域を結ぶ防災教育～地域から未来をつくる～」 講 師：佐藤晴雄（日本大学文理学部教授） 冒頭発言：竹原和泉（横浜市立東山田中学校コミュニティハウス館長） 小澤光男（横須賀市消防局消防救急課長） ◆セッション3「地域文化を育む～歴史・伝統を受け継ぐ～」 講 師：赤坂憲雄（学習院大学文学部教授／福島県立博物館長） 冒頭発言：飯島重一（三浦市教育委員会生涯学習課主任） ◆セッション4「新エネルギーの時代～東日本大震災後の社会の行方～」 講 師：黒岩祐治（神奈川県知事） 講 師：飯田哲也（特定非営利活動法人環境エネルギー政策研究所所長） ◆総括セッション 冒頭発言：落合克宏（平塚市長）

⇒これまでの議論を引き継ぎ、地域社会のあるべき姿について、神奈川での取組みも参照しながら、コミュニティのもつ多様な機能についてディスカッション。

⇒2011年3月開催予定であった第4次シリーズ第1回は、開催日1週間前に発生した東日本大震災により中止。

【第5次】21世紀かながわ円卓会議（12・13年度／全2回）

開催時期	トータルテーマ 「地域力（community capacity）」
2012年 12月	「地域力を鍛える ～“分かち合い”で築くかながわの未来～」 ◆趣旨説明 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆基調講演「『みんなの家』に込められた思い」 伊東豊雄（建築家） ◆話題提供①「地域力を育む“分かち合い”のかたち」（医療／福祉／環境） 鷲尾公子（NPO 法人ぐるーぷ藤・理事長） 酒井太郎（「さかい内科・胃腸科クリニック」院長） ◆話題提供②「地域力をいかに養い、受け継いでいくか」（教育／文化／地域づくり・自治） 池田雅之（NPO 法人鎌倉てらこや理事長） 岡部友彦（コトラボ合同会社代表社員） ◆ダイアログ「私が理想とする地域の姿」「地域力をいかに養い、受け継いでいくか」 ファシリテーター：森 高一（NPO 法人日本エコツーリズムセンター世話人） ◆対談「地域力を鍛えるための鍵は？」 西村幸夫（東京大学副学長・教授）×伊東豊雄 司会：樺山紘一
2013年 11月	「地域力をいかに育てるか ～“分かち合い”で築くかながわの未来Ⅱ～」 ◆趣旨説明 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆講演①「村民とともに歩む地域づくり～子ども・若者が元気な村に」 伊藤喜平（長野県下條村長） ◆講演②「新しい地域自治～地域の課題を地域で解決するために」 平井竜一（逗子市長） ◆基調講演 「生きている共同体とは何か～関係を生み出す社会デザインを考える」 内山 節（哲学者） ◆話題提供①子ども：多様なかかわりによる子どもの育成 奥山千鶴子（NPO 法人びーのびーの・理事長） ◆話題提供②高齢者：地域全体としてのケア——支える側／支えられる側からの脱却 加藤忠相（小規模多機能型居宅介護事業所おたがいさん代表者） ◆ダイアログ「地域力を育てるビジョンづくり」 ファシリテーター：世古一穂（NPO 研修・情報センター代表理事） ◆対談「地域力を育てる鍵は？」 早野 透（桜美林大学教授）×高島肇久（日本国際放送特別専門委員）

⇒地域福祉や子育て・教育などさまざまな機能をもつコミュニティを育む活動主体に着目し、県内での事例も参考にしながら、多様な「コミュニティを担う主体」や「地域力」を育てるために求められるものについてディスカッション。

【第6次】21世紀かながわ円卓会議（14・15年度／全2回）

開催時期	トータルテーマ 「地域社会を活性化させる民主主義」
2014年 9月	「多様な豊かな地域社会を自分たちで育てるには」 ◆趣旨説明 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆基調講演「対話で切り拓く地域の未来～リーダーシップのあり方は？」 嘉田由紀子（前滋賀知事） ◆事例報告①少子高齢化—高齢者を地域全体で見守る 鈴木恵子（ボランティアグループすずの会・代表） ◆事例報告②こども・若者支援—世代間格差を超えて将来世代を育む 江成卓史（NPO 法人子育ての里 食と遊 副理事長／葉山にここ保育園） ◆事例報告③多文化共生—多国籍・多世代が住みやすい地域づくり 三浦知人（社会福祉法人青丘社／川崎ふれあい館館長） ◆対談「次世代の担い手を育てるために～政治家の視点・科学者の視点」 平井竜一（逗子市長）× 黒田玲子（東京大学名誉教授） ◆ダイアログ「対話から生まれる地域の未来～あなたが住みたい神奈川は？～」 ファシリテーター：木村乃（ビズデザイン株式会社代表取締役）
2015年 11月	「市民がともに学び、分かち合い、つくるまち～参加型の民主主義へ～」 ◆趣旨説明 神野直彦（東京大学名誉教授） ◆基調講演 「民学産公の協働」と「参加型民主主義」～三鷹市の取り組みから～ 清原慶子 東京都三鷹市長 ◆討議〈冒頭発言〉 林 義亮 神奈川新聞社取締役論説主幹 <u>民主主義的な自治への挑戦～自治体の取組から～</u> ◆講演① 住民参加と行動の場づくり～身近な自治を活かす 速水雄一 島根県雲南市長 ◆講演② 多様な意見で紡ぐ計画づくり～幅広い世代の声を活かす 加藤憲一 小田原市長 ◆講演③ 多文化共生を目指す提言づくり～マイノリティの声を活かす 中村ノーマン 外国籍県民かながわ会議・委員長 ◆コメント 宮本太郎 中央大学法学部教授 <u>パネルディスカッション 自分たちのまちを自分たちでつくるために</u> ◆都市内分権ショートレクチャー 名和田是彦 法政大学法学部教授 ◆ずしの新しい地域自治 細野 裕 逗子市市民協働部市民協働課専任主査 ◆新たな地域コミュニティ「まちちから協議会」の取り組み 廣瀬友徳 茅ヶ崎市総務部市民自治推進課課長補佐 ◆ダイアログ「地域生活のプロとしての市民になろう！」 ファシリテーター：川北秀人（IIHOE [人と組織と地球のための国際研究所] 代表者）

⇒市民一人ひとりが抱く地域への想いをそれぞれ尊重しながら、豊かなコミュニティづくりを目指して、いかに多様な声を掬い取ることができるのか、そして、それをどのように一つのかたちとして実らせていくことができるのかについて、自治体の制度も参考にしながらディスカッション。

【第7次】21世紀かながわ円卓会議（16・17年度／各年度でシリーズ形式にて開催）

トータルテーマ 「神奈川のコミュニティとグローバリゼーション」	
◆2016 年度全 4 回シリーズ◆	
①	【キックオフ講演会】 6/2（木）@神奈川中小企業センター（関内） 「社会的包摂で新しいコミュニティをつくる～困窮と孤立を超えて～」 基調講演：宮本太郎（中央大学法学部教授） 事例報告：鈴木晶子（一般社団法人インクルージョンネットかながわ代表理事） 司 会：樺山紘一（印刷博物館館長）
②	【テーマ別フォーラム（1）】 8/24（水）@横浜情報文化センター 「格差・貧困の拡がり」と家族・コミュニティのあり方～県内自治体での実践を踏まえて～」 講 師：片山睦彦（藤沢市福祉部長）・石黒知美（鎌倉市健康福祉部市民健康課長） 司 会：小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会専務理事）
③	【テーマ別フォーラム（2）】 11/11（金）@湘南国際村センター第6研修室 「コミュニティの担い手になるために～制度的な課題を考える～」 講 師：名和田是彦（法政大学法学部教授） 「事例報告／小田原市における地域コミュニティ組織の取り組み」 講 師：府川悟志（小田原市市民部地域政策課長） 司 会：林 義亮（神奈川新聞社取締役編集担当論説主幹／21世紀かながわ円卓会議運営委員）
④	【総括シンポジウム】 11/12（土）@湘南国際村センター国際会議場 「分断社会から、all for all の社会へ～『創る』民主主義の時代～」 基調講演：井手英策（慶應義塾大学経済学部教授） 「藤沢型地域包括ケアシステムと支えあいの地域づくり～マルチパートナーシップでつながる人と地域～」 講 師：鈴木恒夫（藤沢市長） 司 会：高島肇久（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長／21世紀かながわ円卓会議運営委員）
◆2017 年度全 3 回シリーズ◆	
①	【講演会】 6/17（土）@横浜市技能文化会館 「私たちはいかにして分断を超えられるのか～障害者福祉・ヘイトスピーチ・生活保護から考える」 基調講演：井手英策（慶應義塾大学教授） パネルディスカッション： 名里晴美（社会福祉法人訪問の家理事長）・三浦知人（社会福祉法人青丘社事務局長） 小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長）・司会：林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹）
②	【勉強会】 7/30（日）@横浜情報文化センター 「分断を超えたコミュニティを育む市民社会のかたち」司会：小川泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長） 講師：馬場拓也（社会福祉法人愛川舜寿会ミノワホーム常務理事） 早川仁美（地域のお茶の間研究所さろんどて代表）
③	【シンポジウム】 11/11（土）@湘南国際村センター（葉山町） 「かながわから『頼り合える社会』をつくるために」 モデレーター：井手英策（慶應義塾大学教授） 講師：原 美紀（NPO 法人びーのびーの事務局長／港北区地域子育て支援拠点どろっふ施設長）

⇒貧困の拡がりというグローバリゼーションによる負の側面によって、地域社会にはどのような影響がもたらされ、どのようにそれに立ち向かうべきなのか、県内のさまざまな取り組みを参考にしながら議論を展開。また開催形式については第7次円卓会議から、個別の議論を深めるために連続シリーズ方式に転換。

2017 年度 21 世紀かながわ円卓会議 全 3 回シリーズ

報告書

2018 年 3 月 27 日 発行

企画・編集 公益財団法人かながわ国際交流財団

湘南国際村学術研究センター (担当 清水・西山)

<http://www.kifjp.org/shonan>

〒240-0198 神奈川県三浦郡葉山町上山口 1560-39 湘南国際村センター内

電話 046-855-1821 ファックス 046-858-1210

メール shonan@kifjp.org

©2018KIF

本書の全部または一部の複写・複製等を禁じます。これらの許諾については当財団までご照会ください。

【21 世紀かながわ円卓会議運営委員会】(五十音順)

小川 泰子（社会福祉法人いきいき福祉会理事長）

樺山 紘一（印刷博物館館長／東京大学名誉教授）

黒田 玲子（東京理科大学研究推進機構総合研究院教授／東京大学名誉教授）

高島 肇久（株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構取締役会長）

林 義亮（神奈川新聞社取締役編集・NIE 担当論説主幹）